

Wars of Characters

ロードゲート

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

キャラクター。

この単語に聞き覚えがあるだろう。

そう、アニメやゲーム等の架空の世界で活躍する者達である。

そのキャラクター達が存在する世界（二次元世界）が、現実世界（三次元世界）と二次元世界の間の世界の神によって世界は統合し、それぞれの世界で混乱が発生してしまう。

その統合世界に現実世界から小学生の少年が転生し、統合した世界を元に戻す為に冒険すると言うお話。

※ストーリー構成(予定)

第1章〜第4章ぐらい 仲間集め

第5章ぐらい 本格的に冒険

出演作品(随時更新)

※キャラクターのみ

Genre Over (オリジナル作品) ※

<https://syosetu.org/novel/180468/>

FAIRY TAIL (漫画版)

UNDER TALE

仮面ライダーシリーズ (昭和) ※

仮面ライダーシリーズ (平成) ※

プリキュアシリーズ ※

Re:ゼロから始める異世界生活 (小説版) ※

ポケットモンスター (大抵はゲーム版 アニメキャラのサトシは登場) ※

ドラゴンボール ※

スーパーマリオ ※

学戦都市アスタリスク ※

MINECRAFT

金色のガッシュユベル!! (漫画版) ※技のみ

電波人間のRPG※

アンパンマン※

妖怪ウォッチ※

スプラトゥーン※キャラとブキのみ

ドラえもん※ドラえもんと秘密道具のみ

仮面ライダーアクロス With Legend Heroes (カオス箱様) ※

<https://syosetu.org/novel/184959/>

現在の章

第1章 FAIRY TAIL編

第2章 undertale編 ↑今ここ

※本作では死亡シーンや流血表現等が含まれます。苦手な方はブラウザバックを推奨します。

※FAIRY TAILとundertaleの原作既読、クリアをお勧めします。

※基本的に駄文、文字小数、ストーリー構成ガバガバです (途中意味分からない台詞

が登場するかも)。

※キャラクターに対するアンチ・ヘイトが含まれる場合があります。予めご了承ください。

※また、登場させたい二次元作品又は自分のオリジナル作品があつたら活動報告にてお書き下さい。内容の簡単な説明などを付け加えてくれると尚嬉しいです。

作品募集はここから

https://syosetu.org/?mode=kappa|view&uid=215810

※投稿頻度 不定期12:00頃

目次

オリキャラ設定	1	第5話	妖精の尻尾	67
Wars of Characters		第6話	心を変えろ	75
Special episode		第7話	連合	87
#1 Another Story		第8話	六魔將軍現る！	105
6		第9話	v.s. 六魔將軍	124
Prologue		第10話	天空の巫女	140
第1話	世界統合	第11話	“奴”	156
第2話	異世界転生	第12話	ニルヴァーナ	175
F A I R Y T A I L 編		第13話	もう1人の星使い	195
第3話	初戦	第14話	星霊合戦	219
第4話	加勢と出会い	第15話	破滅の行進	245
		第16話	発射	260
		第17話	阻止	280

第18話 知らされる事実、受け入れ

る現実 ————— 298

第19話 終焉、そして： ————— 312

Undertale 編

第20話 好奇心から始まる物語

325

第21話 いせき① 記憶喪失と花

335

第22話 いせき② パズルとエンカ

ウト ————— 351

第23話 いせき③ 探索と白いお化

け ————— 367

第24話 いせき④ 襲来と夢

383

第25話 いせき⑤ 望みたくない戦

闘 ————— 405

第26話 スノーフル① 極寒の地

426

第27話 スノーフル② 弟との邂逅

と探索 ————— 442

第28話 スノーフル③ リアクション

ン ————— 451

第29話 スノーフル④ 疑問と冴え

る脳 ————— 460

第30話 スノーフル⑤ 町とパピル

ス ————— 470

ルス
——
第31話 スノーフル⑥
v s .
パピ

オリキャラ設定

主人公

ユウト（転生前 優斗）

年齢 12

性別 男

説明

高校生が憑依したような大人っぽさがある小学6年生。

紺色が好みと言う事もあつてか、髪、瞳、服、靴の色はほぼ紺色。

身長は少し小柄で、体重も平均よりやや少なめ。

転生前では小学生感を醸し出していたが、転生後は何故か高校生が憑依したような大人っぽさが出ている。

性格はナツには敵わないが好戦的。

好物は肉で特に脂っこいのが好み。

嫌いな物はゴーヤとパクチー、そして仲間を傷付ける奴等。

使用魔法

氷の滅竜魔法

ナツやガジルにウエンデイが持つ竜を滅する為の魔法。

通常は竜から教えて貰うが、ユウトの場合転生特典として与えられる為、教えられる竜は存在しない。

ギルドの仲間達から竜の名前を訊かれた時は架空の名前で誤魔化している。

※追記

FAIRY TAIL編最終回、ユウトは自分が転生者だと言う事を打ち明け、ナツ及び最強チームはこの事実を既に知っている。

現在ユウトが使える魔法としては

氷竜の咆哮、氷竜の鉤爪、氷竜の氷柱^{つらら}等がある。

氷の造形魔法

グレイ、リオンの持つ魔法。

造形魔法とは文字通り、ハンマーやランチャー等に造形した氷を繰り出し、氷の硬さを利用して攻撃できる。

一応ユウトも使えるが、総合的な強さとしてはLv. 1と言う所だ。

スプラトウーン^{エンチャント}のブキの大半の造形はでき、強さもそこそこ。

付加魔法

ウエンデイが持つサポーター系の付加魔法。

味方や敵の速度や力、防御力を上げ下げしたり、異常状態を防ぐ等を付加する事ができる。

これもユウトは使用可能だが、ユウトの場合は武器や鈍器にエンチャントが可能。

例

鋭さ、火属性、パワー、爆発耐性等

上記以外の能力としては知力や多少の筋力、または通貨の換金能力が与えられている。

オリキャラ

ミント・リーフレット

年齢 20

性別 女

説明

死亡した者を異世界へと送る転生神の1人。

名前がミントとなっているが、実を言うと彼女はミントが大の苦手。

ミントと言う名前を見ただけで吐き気を催す程で、付けた両親を強く恨んでいるのだ

そう。

しかし、緑色が好みなので髪色はエメラルド色。

パルテナの鏡のパルテナ様の大ファンで、服装はパルテナ様を真似ているとの事。
使用魔法、能力は未だ不明。

レート・インフェルノ

年齢 18

性別 男

説明

所々はねている赤髪ロングで、金色の角を生やしている。

服装は和服（表現下手なので許して）。

三次元世界、現実世界を監視する。〃次元間世界じげんかんせかい〃の2代目の次元間神。

しかし、彼曰く世界の各々を監視するのが面倒らしく、秘書であるレインに統合世界の計画を促した。

実は初代次元間神の父親の計画を目的としているようだが…？

使用魔法、能力は此方も未だ不明だが、幻覚を見せる事は出来るらしい。

レイン

年齢 22

性別 女

説明

レートの秘書。

紫色のおかつぱ、パープルアメジスト色の瞳を持ち、常に眼鏡を着用している真面目な女性。

次元間世界との縁もあつてか初代次元間神に「次元間世界で仕事しないか？」と促され、次元間の仕事を引き受ける。

それから何年か経ち、今や立派な秘書。

レートの秘書を担当しているが、レートから無理難題な仕事を引き受けられる等をさね、秘書から通常の仕事に戻る事も考えている。

子供の頃に起こったとある「悲劇」を覚えていられるらしく…？

こちらも使用魔法、能力は未だ不明。

Wars of Characters Special
Episode
#1 Another Story

——小学6年生の少年、ユウト。

彼は交通事故で死亡し、成仏せずに「統合世界」に転生し、各世界から集めた仲間と共に、「統合世界を元に戻す」事を目標に、各世界を冒険している。

しかし、彼が死んだ後の世界はなんとも悲しいものだった。

そんな前世の話を、これからしようと思う。

——2019年 地球

通学時間である午前8時に、それは起こった。

キイイイイイ

ブレーキを掛けているのか、タイヤの音を発てながら大型トラックが通学途中の少年に向かって走る。

少年は何故トラックが向かって来るのか、それは信号を見てから気付いたが…

「赤信」——!？」

時既に遅し、トラックは既に少年の体と接触し、その衝撃で身体が吹き飛ばされ、交差点の中心に落ち、トラックは少年のすれすれの場所で動きを止めた。

「……………っ」

「え……………？」

その瞬間を目撃していた通行人は啞然としていた。

唾然するのも当然だ、

——人が、目の前で死んだのだから。

その沈黙を打破したのは救急車のサイレンであった。

「助かるのか、な？」

「…轢かれたのは兎も角、子供があれば轢かれた場合、生存率は極めて低い。だから…も
う……………」

「嘘…っ！」

男性にそう言われ、女子高生が口を押さえながら驚く。
他に唾然としている人々も、それは分かっている。

「……………」

「どうだ？」

「…駄目です、この子はもう…」

「……っ………そうか……。…とりあえず、病院へ運ぶぞ。」

「……はっ。」

悲しみを我慢し、遺体を担架に乗せ、救急車に乗せて、病院へと運んだ。
啞然とする通行人に見守られながら。

「——優斗君は、亡くなりました」

『『ガタツ』——!?!』

突然の訃報に、教室にいる児童全員が驚愕し、騒がしくなる。

「はい皆さんお静かに!……今日の授業は予定を変えて、優斗君が無事に天国に旅立てる
ように、お別れの言葉を書きましょう」

色紙とペンを持ちながら小太りの教師がそう言い、色紙を回す。
回されたクラスメイト達は次々と色紙に別れの言葉を書き残す。

しかし、1人だけ書かない者がいた。

教師は1人分の枠が開いてない事に気付き、怒りながらその名前を呼ぶ。

「こら！ 柗さん、何で書いてないの！」

「あ？ 書きたきやねえよ、そんなゴミみてえなものよ」

「何ですって……！」

柗と呼ばれる少年の辛辣な発言。

教師は怒りを募らせ、我慢の限界からか怒号を放とうとした……

「柗さん!! 廊下に……」

「おい、柗!! 少しは優斗に対する思いやりって事も考えたらどうなんだよっ!!」

教師の怒号を遮るように、黒髪の児童の怒号が教室内を響き渡る。

しかし、彼はそれに表情を変える事もせず……

「あ？ 思いやり？ 何が思いやりだよ、彼奴は死んでねえ！ だから、そんな紙なんてゴミみ

てえなもんじゃねえか」

柊は優斗の死と言う現実を信用せず、死んでないからと勝手に決め付け、お別れの言葉を書かずにいた。

…そんな彼に対し、様々な言葉が飛び交う。

「優斗は死んだんだよ!」

「落ち着け、柊!」

「現実を受け止めなさい、柊」

「柊君…お願い、受け入れて…」

クラスメイトの様々な声に、遂に怒りの限界を超えたのか、荷物を持ち始める。

「柊さん!?!」

「…優斗は、死んじやいねえっ…!」

「お、おい…!」

そう吐き捨てて荷物を持ち、舌打ちをしながら颯爽と教室を退出した。

「……………」

小学校から遠く離れた場所、そこは、草や木、花以外には何も無いと言う、少し寂しい感じの草原。

そこに、体育座りで眺めていた柀の姿があった。

「畜生……っ！何であいつらは優斗が死んだって思ってるんだよ……っ」

——優斗の死。

親友であつた柀にとって、それは悲しいもの。

「彼奴は死んで……っ」

しかし、何故此処まで彼は優斗の死を信用しないのか？

「助けた……答……なのに……っ」

彼の口から衝撃の事実が漏れる。

——「助けた」と。

あの時、柊はあの場に居たのか？

あの時、柊は優斗を助けたのか？

あの時、柊は「自分が優斗を助けた」と何故言い切れるのか？

「俺は……っ！」

「——助けた、と何故言い切れるのですか？」

「!?…誰だ…っ!?」

不意にそう話し掛ける女性の声に、柊は咄嗟に振り返り、誰なのかを確認する。

その人物は、

「八美……?」

「はい。貴方のタコさんですよ。」

赤いタコ足のような髪型が特徴的な少女、八美。

一言で言えばサングラスを外したタコゾ……やはり言うのはやめておこう。

彼女は柊のクラスとは別クラスの児童ではあるものの、柊に一目惚れをし、必ず柊に二人きりで会おうと「貴方のタコさんですよ。」と言うのだそうだ。

しかし、彼女は何故此処に居るのだろうか。

「何でお前が此処に居るんだよ?」

「貴方が血相を変えて帰ったと聞いたので」

「…違うんだよ」

「?」

柊の言葉に、何も知らない八美は首を傾げる。

その姿を見たのか、柗は彼女に訳を話した。

——数分後

「柗はその優斗さんと言う方を助けたのですか？」

「その筈なんだよ……っ」

「？」

でも、誰も信用してくれない。

——だけど、彼女に話したら信用して貰える気がする。

——そう、八美なら……

「信じてもらえないと思うけど、話す」

「貴方の話、私信用します」

「ありがとう。…昨日の話だ」

——時は優斗の死後まで遡る。

とある病室で、とある少年——柊はもう動かない優斗の亡骸を見て泣き崩れ、街に出て彼から離れていても、泣いていた。

親友が死んだ悲しみ、そして信用する仲間を失った寂しき、親友を殺した奴への怒り。これらが全て混ざり、それが涙となって表れているのだ。

「優斗…」

ふと名前が口からこぼれる。

それほど寂しいのだ。

昨日まで笑っていた親友が居なくなると言うのは。

もうあの日見た笑顔すら、見ることも出来ないのだ。

——また、涙が…

「うあああああ…」

誰か、こんな俺を助けてくれ…

「——おやおや、そんな悲しそうな顔をして」

「!?…誰だ？」

不意な女性の声が聞こえ、終は後ろを振り返り、正体を確認する。
視線の先にはフードを被った少し小柄な老婆の姿。

彼女は此方を見据え、不気味な微笑みを向けてくる。

そんな彼女を見て真っ先に思い付いた言葉…

「魔女…」

「フフ、心配している年寄りを魔女扱いとは、酷いモノだねえ」

彼女はハハハ、と笑いながらそう答え：

「ほれ、時計をあげよう」

そう言いながら、老婆は終に不気味なデザインが目立つ時計を手渡す。

「時計?…気味が悪いデザインだけど」

「そう思うじやろ?じゃが普通の時計じゃない」

「普通じゃない?」

普通じゃないと言われるが、一見怪しいボタンのような物は見当たらず、ただカチカチと針が動いている時計。

その普通じゃないとは…

「時間を、巻き戻す」

「!？」

「——と、言いたい所じゃが、今の日本の技術的にはそれは不可能でろう」

「巻き戻せないのか!？」

「うむ。じゃから、指定した人物を何処かに蘇生する、と言う機能を付けたのじゃ」
「じゃあ、生き返るって事!？」

柘は老婆の言葉を聞き、優斗は生き返ると言う期待の表情を浮かべる。

しかし…

「話を最後まで聞きなされ。」

「…?」

「その時計には確かに蘇生する機能を持つておる。…じゃが、その対象者に多大なリスクを背負わせなければならんのじゃ」

「リスク?」

「…〃転生〃じゃ」

〃転生〃。

1度死亡した者を成仏させず、別の世界に身体を復活させる事。

異世界転生、とも呼ぶ。

その転生と言うリスクを優斗に背負わせるのは少々無理があつて…

「無理だよ、彼奴身体能力無いし」

「じゃあ蘇生はしないんじゃない？」

「ぐ……分かった。それで彼奴が生き返るんなら、例え危険だろうとやってやる。」

「その意気じゃ。…じゃあ、その時計のガラス部分を押すのじゃ」

「ガラス？」

ガラス部分の場所はすぐに分かった。

老婆の言う通りに、レンズ部分を親指で押してみる。

しかし、何も起こる気配は無く…

「?…何も起きないけど…」

「いいや、これでお主の親友殿の転生が決まった」

「本当に？」

「うむ。」

柗は老婆に疑いの目を向けるも、直ぐに彼女を信用し、疑いも掛けなかった。

「…信じるよ、あんたを」

「信じてくれて有り難いのお」

「それじゃ、俺は行くよ」

「気を付けてなあ」

老婆の言葉に反応するように手を挙げ、柗はそのまま大通りの奥へと消えて行った。
老婆はそれを見送りながら…

「『タコの脅威』にな…」

そう呟いたのだった。

——翌日

「やっぱり学校に行けないなあ」

昨日の事を思い出し、クラスメイトの顔を合わせられず、柊はいつもの草原で居座つて居たのだつた。

「暇だなあ、誰か来て欲しいなあ」

その時だった。

柊の頭に、

銃シューターが向けられていたのは。

「…は？」

「柊、私は貴方を撃ちます」

「何を言つて…!?!」

柊は抵抗しようとして体を動かそうとするが体が動かず、もがく事しか出来ない。それでも、彼女はニヤリと微笑みながら続ける。

「だって、あなたのタコシンですカラ。」

「——やめ」

パン!!

銃声の音が草原に響き渡る。

同時に頭に激痛が走り、柘の意識は途切れた
：

「タコは少年を統合世界へと連れて行ったか…」

老婆が煎餅を食べながらそう呟く。

彼女は時計のレンズのボタンを押し、何事もなかったかのように、また煎餅を食べたのだった。

「煎餅美味しいのう」

#1 END

Prologue

第1話 世界統合

キャラクター。

アニメやゲーム、漫画等の二次元で活躍する創作から生まれた者達。

その中でも一番活躍する主人公には、ヒーローが居たり、裏をかいて悪役になったりと、様々な者が存在する。

主人公ではないキャラクターも同等だ。

話は変わるが、それぞれの世界には、“決まり”が存在すると言うことをご存知だろうか。

それは他作品からキャラクター達がその世界に来ると言う事は決して無いと言う事だ（例外もある）。

しかし、“とある出来事”により、キャラクター達が存在する世界が融合したら…？

それぞれの世界に存在する“決まり”を無視し、他作品からキャラクター達が入り込んで来たら…？

——今回はそのキャラクター達の話をしていこうと思う。

——それは突如始まった。

FAIRY TAILの世界

「イーツ」

「イーツ」

黒く鳥のような模様の着ぐるみ？を着て目と鼻と口のみ肌を出している謎の人物達が、魔導士ギルド『妖精の尻尾』へと侵略する。

その妖精の尻尾に所属すると思われる炎の魔法を操る桜髪の青年や剣で攻撃する緋色の髪の女性は、黒い鳥の模様の人間達と戦っている。

「クソ、キリがねえ！」

「このままじゃギルドが崩壊してしまうぞ！」

彼は妖精の尻尾を守るべく戦い続ける。

Genre Overの世界

こちらもこの世界に存在はあり得ない大規模な敵と竜の擬人化？の敵達が『宇宙防衛隊』と言う名の組織の隊員達を苦戦させる。

「うぬ等は我等が滅する。」

「オシマイダー!!」

「……このままじゃ二人が危ない………ジークさんっ！ユウとムーンを連れて逃げて下さいー」

眼鏡をかけた少年が危険を感じ銀髪の青年にそう言うと、彼は迅速に幼稚園児の二人を抱きながらその場から離れる。

「この世界はゲルに崩壊させる寸前だって言うのに、これじゃもつと被害が……！」
「くっ……！粘るんだ、リン！」

彼等も地球を守るべく戦い続ける。

——それぞれの世界に他の世界を存在する敵キャラクター達が現れ、キャラクター達は悪戦苦闘。

——何故、このような事が起こってしまったのだろうか。

——それはとある人物が計画した“とある計画”が全ての原因だったのだ。

——ここは、キャラクター達の世界を監視する“次元間世界”。

ここで、様々な世界の悪事や行動を監視し、悪行が見られたら直ぐ様逮捕しに向かうと言う警察のような世界。

その次元間世界の三代目次元神である“レート”と言う人物が、様々な世界が映っているモニター画面を監視ではなく、楽しんでいた。

「やっぱ人が戦ってる所を見てると興奮してくるぜ！最高ー!!」

「——レート様」

「クククツ…ん？何だ、レインか。」

モニターを見ている彼の元に、眼鏡が特徴の紫髪の女性——レインが姿を現した。

「『世界統合計画』、実行終了しました。」

「ああ、お疲れ。統合した世界で敵達に悪戦苦闘してるヒーロー達の姿を見てると興奮して来るよ。」

『世界統合計画』。

それぞれ別の世界に存在している

その計画により、彼等は違う二次元世界の敵達がやって来たと言う訳だ。

その『世界統合計画』で統合した世界を見て楽しんでるレートだが、しかしそれだけではまだ満たされない様子。

「うーん…だけど、もう一つの世界が足りないんだよね。」

「えっと、もう一つ…と言いますと?」

「——現実世界だよ。」

「現実…世界?」

彼は統合した二次元世界に現実世界、所謂三次元世界を統合しようと提案する。
勿論これは無理難題で、計画に含まれていない提案を含め多数の問題が生じる。

「計画外の実行は無理難題です!それに、現実世界と二次元世界を繋いだら…次元同士の区別がつかなくなってしまいます!」

「だが僕はリスクを負ってでも満足がしたいんだ、頼む。」

「しかし…!」

たとえリスクを負ってでも実行したいと言う彼に、レインは無理だと提案を拒もうとする。

そんな彼女に対して彼はレインの顎を掴み、耳元で喋りだす。

「——またあの悲劇を味わいたいのか？」

「——ッ！……それは……！」

レインはレートのも「あの悲劇」と言う言葉に悪夢を思いだしたのか恐怖で震えだし、彼に対する抵抗が出来なくなる。

彼の言う悲劇とは、一体何なのだろうか……？

「やってくれるな？レイン」

「——承知しました、レート様。」

レインは彼の提案を受け入れ、三次元世界を統合する準備をするためにレートの部屋を後にする。

彼はレインを見送った後、首に掛けている小さな骨の欠片を握り、微笑しながら語り出す。

「もうすぐだ…もうすぐで父さんの長年の夢が実現する…フッフ…フハハハハ！」

笑い声が部屋中に響き渡るものの、その笑い声が、レインに聞こえる事は無く、彼女はすたすたと歩き続けるのであった。

場面が変わり、三次元と呼ばれる現実世界。

勿論、その世界で暮らす人々は二次元世界が統合した事を知る由も無く、ただ平和に暮らしていた。

「行つて来ます！」

とある一軒家の玄関のドアが勢いよく開けられ、元気な声を出しながら少年がドアから太陽の光が当たり、ラピスラズリ色の瞳を輝かせながら外へと飛び出す。

彼の名は「優斗」。

小学六年生で、その割には身長は小さく、勉強も駄目、運動神経も悪い。

簡潔に言えば、のび太の現実ver.である。

：黒いランドセルを背負って学校へと向かう彼は、スキップしながら交差点の横断歩道を渡る。

——その信号が赤信号だとも知らずに。

彼は学校へと向かう事に気を取られ、赤く光る信号に視点を向けずに横断歩道を渡る。

そんな彼に向かって大型トラックがブレーキをせずスピードを上げながら走って来

る。

——そして彼は、轢かれてしまう。

優斗は轢かれた弾みで10m程吹き飛ばされ、全身を強打。

その激痛に耐える事はできず、そろそろとやって来る歩行者達やトラックの運転手に
囲まれながら、

死んでしまった。

——彼の、12年と言う若さの人生に幕を閉じるのであった——。

——と、思われたが。

「……ん？」

死亡した筈の優斗が目覚めた場所は、一面が白く染まり、建造物も何もない殺風景な所。

「……どこどこ？……てか俺、大型トラックに轢かれて死んだ筈なんだけど。」

「……そうです。貴方は亡くなってしまったのです。」

「うお!!……誰!!」

いきなり女性に話し掛けられた優斗は驚き、その場から後退る。

優斗を驚かせてしまった彼女は彼に謝罪を、と頭を下げる。

「驚かせて申し訳ありません。…私の名前は“ミント・リーフレット”でございます。」

「……ミン、ト？」

「誠に唐突でございしますが、貴方を“転生”させるべく、此処へと呼ばせて頂きました。」

「………は？」

エメラルド色の瞳を輝かせながら転生させると告げる彼女、ミント。
彼女は一体、何者なのだろうか…？

T o b e c o n t i n u e d . . .

第2話 異世界転生

「……は？」

ミントの「異世界転生」と言う言葉に優斗は意味が分からないと言わんばかりに首を傾げる。

…そもそも、優斗は「異世界転生」ジャンルの小説は興味が無いからと一切読んだ事はなく、この単語は彼にとつて全く知識に無いのだ。

そんな事を知らないミントは彼に聞こえなかったかな、と勘違いし、もう一度発言する。

「異世界転生を……」

「それは知ってるんだけど、その異世界転生って単語の意味を教えてください？」

「あ、そういう事ですか。」

「ミントは彼が『異世界転生』と言う単語すら知らないと言う事を知り、意味を示教する。」

「えっと、『異世界転生』とは、私達と同じように転生神のミスで亡くなってしまった人達を別世界で生活させる——と言う事です。」

「……。」

一般人には全く理解出来ない程に下手なミントの説明に優斗は一旦黙り込む。
意味が通じなかったのだろうか。

（あれ？伝わらなかつたかな？）

「あ、そう言うことか！」

（あつさり納得した……！）

なんとミントの理解不能な説明を優斗はあつさり納得したのだ。
彼女は理解してくれた事に安堵すると、直ぐに転生の話を進める。

「で、早速ですが今回転生してもらおう異世界は——。」

「ちよつと待って」

「?……あ、はい、どうされました?」

彼女が異世界の名を言う前に優斗は待ったを掛ける。

彼は思い出すように何かを考えると、彼は彼女に頼み込む。

「あの、いきなりで悪いんだけど、統合世界ってどこで良いかい?」

「……え?」

優斗が本来転生する場所を変更する事にミントは目を丸くする。

彼女は、彼に提案理由を聞き出す。

「えー……何で統合世界を?」

「今日テレビで、アニメやゲーム、二次元世界って言うのかな?……の各世界に他所の世界の敵が出現して混乱してるってやってたんだ。」

(世界統合の事……かな?まさか下界にも影響するなんて……)

優斗が言うには、下界のテレビニュース等で二次元世界が統合し、現在、様々な作者達に多大な混乱状態を引き起こしていると言き、彼はそれぞれの世界を元に戻すために統合世界を選んだようだ。

「何故その決意を？」

彼は何故、世界を元に戻そうと決意したのか、とミントに訊かれると、彼は思い出すように話し出す。

「俺が幼稚園児位の時今は亡きじいちゃんが遺した言葉を思い出したんだ。」

——時は8年前に遡る。

優斗が幼稚園児の時、今は亡き祖父に教えてもらった言葉がある。

「優斗や、お前はこの世界が他の世界と統合したらどうする？」

祖父が優斗に訊く。

「友だちがいつぱいできるからうれしいなー!」

「あはは、今はそう思うかもしれないがな、わし達にとっては危険なのじゃ」

「どーしてー?」

優斗は何故危険なのかと疑問しながら耳を傾ける。

「この世界に悪役が出てきて乗っ取られたり、現実こじとの区別がつかなくなるからじゃ。」

「げん、じつ?」

「お前がいずれ大きくなれば分かるさ。：優斗、お前は将来この世界を守るのじゃ。」

「このせかいをまもるの?」

「うむ。そうすればこの世界を救えて、ハッピーエンドになるのじゃ。」

「ハッピーエンドかあ：ぼく、しょうらいになったらこのせかいをまもってみせるよ!」

「おお! その意気じゃ!」

「しかし、俺のじいちゃんはその三日後に死んだ。俺は悲しくてその日は一日中泣きまわったさ。」

「――。」

優斗の過去を聞いたミントは宝石のように輝く目を涙で潤しながら相槌を打ちながら聞く。

「泣き止んだ俺はそれからじいちゃんに言われた通り下界を守る為に必死に強くなってみせた。力は全然無いけどね。」

「力は無いんですね…。」

「だけど強くなくても他の世界を救って、ハッピーエンドを迎えたいんだ！…だから、統合世界に転生してくれっ、頼むツ!!」

「――。」

優斗は土下座しながらミントに頼み込む。

彼女は一旦優斗の提案に考え込むが、彼の嘘偽りの無い言葉と真剣な表情を見ると、考えが変わり、その提案を受け入れる。

「——分かりました。貴方の願い、受け入れましょう。」

「やった！」

「しかし、条件があります。」

彼女は彼の希望を了承するが、条件を付けると告げる。

その条件とは——。

「私を、ご同行させて貰います。」

何とミントを付き添いさせると告げたのだ。

この発言に優斗は納得いかないと拒み始める。

「はあ!?!——あんたが何でついてくんの?てかもっとマシな条件無かったのか!?!」

「じゃあこの話はなかった事に…」

「ウ、ウソウソ!冗談だつて!……良いよ、付き添わせますよ!」

「はい、成立です。」

彼女の冗談に優斗は冷や汗をかきながら素直に受け入れる。

「しかし、私は実体化できないので通信の付き添いになります。」

「よかった…他の人にリア充だと思われなくなかったからね…。」

彼女は外界での実体化は不可能で、通信機器を使つての付き添いとなる(それって付き添いじゃ無いやn)。

「分かったから早く転生してくれっ!!」

「そんなに忙しなくても良いですよ。じゃあ早く転生させますね。」

「お願いしまつす!!」

彼の急かしに彼女は冷静に、早急に転生準備をする。

「貴方が統合世界を救ってくれると信じます。では。」

「え？ちよつといきな——。」

ミントが杖を白く硬い地面に叩いた直後、彼女の前から優斗の姿が消える。

どうやら統合世界に転移したようだ。

彼女は彼の転移成功した事を杖の上にある水晶玉を見て確認し、彼女は彼を見ながら心の中で彼に対して祈る。

「…健闘を祈ります。」

数秒後

「——うお!？」

優斗はとある砂漠の中央の方に転送されたようだ。

一面砂で覆われていて、さらに砂嵐で目が開けられない。

だが優斗から見て後方に街があることは分かった。

しかも見覚えがある街なので、彼はそこが何処なのか確信し、呟きだす。

「——まさかここからスタートとはね、マグノリア。」

彼が転生した場所は、“FAIRY TAIL”の世界に存在する、マグノリアの街にある出入口の門前でもあった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

FAIRY TAIL 編

第3話 初戦

「レート様、統合世界に三次元世界からの転生者が出現しました。」

「ああ、知ってるさ。——予想外だな、こりゃ」

『世界統合計画』を実行し様子を見ていた次元間世界では、既に優斗が統合世界へと転生している事に話題で持ちきりとなっていた。

この事を報告しに来たレインだが、既にモニターを閲覧し、把握していたレートは予想外の出来事に困ったな、と頭を掻き出し始める。

「大丈夫なのでしょうか…彼が計画に影響しなければ良いのですが」

「うーん…まあ取りあえず彼は小学生だから一応は大丈夫だとは思うんだがな……」

しかし、と彼は続ける。

「念のため様子を見よう。…彼がただの小学生と言えど侮つてはならないからな。」

「分かりました。…では彼の行動の監視を重視するよう伝えておきます。」

「ああ、頼む」

「では」

彼女は部下達に伝えるべくレートの部屋を後にする。

レインの足音が聞こえなくなり、部屋に沈黙が訪れた所で彼はモニターを睨みながら
呟く。

「父さんの計画の邪魔をしたらどうなるか、思い知らせてやるからな…、優斗…!!」

———ここはマグノリアの街。

本来であればフィオーレ王国と言う永世中立国の一部に存在しているのだが、何故か

地形が變形しているらしく、そのおかげで砂漠に移動してしまったようだ。

——その街に、とある少年がいた。

「本当にマグノリアの街じゃん!!」

ラピスラズリ色の瞳をキラキラと輝かせながらはしゃぐ少年の名は優斗——いや、ユウトと呼んだ方が良いな。

彼は現実世界と呼ばれる三次元世界で交通事故により死亡してしまうが、謎の転生神“ミント・リーフレット”の力によって本来行く筈のなかった統合世界へと転生した。

この世界に無理強いをしてもで転生[＊]した彼の目的はただ一つ。

——世界を元に戻して“ハッピーエンド”を迎える。

——しかし彼は力も何も無いただの小学生。

——果たして彼は、この世界を救う事が出来るのだろうか？

「それにはまずこの目標を決めなきゃな…。」

世界を救うとなると目標が必要だとユウトは考える。

まずはFAIRY TAILの世界の目標を立てる。

一つ目は魔導士ギルドフエアリーテイル“妖精の尻尾”に加入する事。

二つ目はこの世界にいるであろう敵達を探し、一掃する事。

そして三つ目は…

「仲間を誘う…かな？」

彼は自分の弱さを自覚している為、仲間が居なければこの先どんなことがあるかと先に進むことが出来ないだろうと考え、三つ目の目標を「仲間を一人探す」と決断する。

——これで目標が揃った。

後はそれらを実行するのみ。

ユウトは目標を達成するべくまずはフェアリーテイルへと足を運ぶ。

——道中、ユウトの前に黒い影が現れる。

ユウトは突然の事に驚き、バランスを崩して尻餅をつく。

「な、何だ!？」

「イー……」

ユウトの前に現れたのは鳥のような模様の黒地の着ぐるみのような物を着た男だった。

ユウトは彼の正体に気付く。

「『シヨツカー』……!?……何でここに——うお!？」

黒い着ぐるみを着た男——シヨツカーは、ユウトが尻餅をつき、座って動きずらくなっているにも関わらず、ユウトを拳で攻撃する。

幸い攻撃が当たる前に回避したから怪我を負う事は無かったが、装備もしてない無防備な姿のまま攻撃されるとマズイと思い、その場から逃げ出す。

「逃げんな
イーッ!!」

「逃げんなんて言われても、無防備だから無理だつて!」

プルルルル……

逃走中、突如ミントから支給された通信機が鳴り出す。

ユウトは逃げながら通話ボタンを押し、耳に当てる。

「もしもし、ミント様……早めに頼むよ!」

『…あの、今逃げてますよね?』

「!?…何で知ってるの!?!」

『水晶玉で監視してるので…』

通話相手であるミントは既にユウトがショッカー達に追跡されている事を水晶玉を通じて把握していた事にユウトは目を丸くする。

その後の言葉で彼は納得し、内容を聞き出す。

「んで、内容は?」

『今武器所持してませんよね?…なので転生特典を付与したのですが…』

「転生特典あんの!?!…早く言ってくれよ!」

「ミントの口から転生者に魔法や財産等が付与される“転生特典”がユウトに付与したと告げられると、何故それを早く言わなかったのかと彼は怒鳴り出す。

しかし、小学生の彼にとっての感謝もある。

魔法が無ければこの世界で何も出来ないまま死ぬのは逃れられるのだから。

「早く教えてくれ！じゃないとショツカー達に……うお！……殺される！」

「イーッ！」

ユウトは追われながら攻撃するショツカー達の攻撃を回避しながら、ミントに転生特典の伝授を急ぎ立てる。

彼女は彼の急ぎ立てに迅速転生特典を告げる。

『ちよつと待つて下さい、ええと……転生特典は……』

「駄目だ、死ぬ……！」

彼女が転生特典を言う直前、ユウトに避けきれなかったショツカーの握り拳が此方向かって来る。

そして彼の顔面とシヨツカーの拳が1cmにまで迫ったその時：

『あつた！… 氷の滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}です！』

「氷竜の咆哮^ド！！」

『後もう少しだったのに
「イーッ！！」』

ミントから転生特典が告げられたと同時にユウトが詠唱すると、口からビーム咆の様なものが氷の粒と共にシヨツカーに向けて発射されると、シヨツカーは一瞬で氷漬けとなり、動けなくなっていた。

「あつぶなかつた…」

『やりましたね！シヨツカーを倒しましたよ！』

「やったな。」

FAIRY TAIL

この世界に散らばった敵のシヨツカーの一人を倒し、ミントは勝利を歓喜する

が、ユウトは殺されたかと思いい冷や汗をかきながら勝利を歓喜する。

しかし倒したと言っても全てが終わった訳じゃないと分かったのか、二人は真顔になる。

「でも、今みたいなシヨツカーがFTの世界に散らばってるんだよな？」

『はい。』

ユウトの質問にミントは相槌を打つ。

彼の言う通り、シヨツカー達はまだこの世界に散らばったままだ。

そのシヨツカー達を倒す事が、この統合した世界を救う為の手立て。

諦めるわけにはいかない。

「世界を救う為に、シヨツカー達を一掃してやる!!」

*ユウトはシヨツカー達を倒すと、胸に決意を抱いた。

T o B e C o n t i n u e d . . .

第4話 加勢と出会い

「ほえー……でっけえなあ」

ユウトの初戦から数分後、彼はフェアリーテイルへと向かっていた。

漫画でも把握はしていたが、実際見てみるとざっと縦長20mと言った所だろうか。

「あ、いやいや、高さに惚れてる場合じゃない、早く行こう。」

こんな事をしてる場合じゃないと、彼はフェアリーテイルへと足を進めた。

「たのもー!!……あれ?」

ギルドに着いたユウトは早速フェアリーテイルに加入しようとする大きな声を上げ、ギルドに足を踏み入れる。

しかし、ギルド内は用事で外出中なのかもぬけの殻だ。

……これでは先へ進めない。

「……外に居るかもな」

彼はふとそう思い、外に出て街全体を搜索する。

…ギルドの裏の湖にシロッカー達と戦う者達の姿が視界に映し出される。

ギルドメンバーもしくは住民か。

「なんか見覚えの人達が居るな……って事はあっちに居るってことで良いんだな？」

そう信じ、彼はシロッカー達の元へ走り出す。

「イーツ!!」

「イーツ!!」

「チツ…キリがねえ!」

「どれだけ居るんだ、こいつらは!?!」

ショツカー独特の鳴き声が耳に響くが、気にせず戦い続ける。

数え切れない程のショツカー達は、倒しても倒しても数を減る事は無い。

——魔力ももう空だ。

——ギルドも、街も、ショツカー達コイツらに壊滅させられるのか……。

——そんな俺達の元に、紺色の髪の少年がやって来た。

「うおおおおお!!!」

「イーッ!!」

ユウトはシヨツカー達の背後を狙ってライダーキックを食らわせる。

非力な彼の攻撃は通用はしなかったが、バランスを崩したシヨツカー達はドミノのよう
うに前へ倒れる。

それを狙った彼は氷魔法で攻撃し、纏めて氷漬けにする。

「取り敢えず数は減つ……て無い!?」

よくも

「イーッ!!」

俺達の仲間を

「イーッ!!」

許さん

「イーッ!!」

「チッ、全員纏めて消してやる…… “氷竜の咆哮”!!」

ユウトに仲間がやられた怒りに身を任せて一斉攻撃を仕掛けるショツカー達に、ユウトは滅竜魔法で纏めて倒す。

流石に塵にまではしなかったが全員気絶させ、体を山積みにする。

しかしまだ生き残りがいるが、お構いなしに魔法で戦う――。

「うっ……!」

……途端、ユウトは魔力を使い果たし、膝から崩れ落ちる。

「ここで魔力切れとか…タイミング悪すぎだろお…」

アイツ倒れたぞ

「イーッ!!」

形勢逆転だ

「イーッ!!」

魔力切れで倒れたユウトに形勢逆転と、シヨッカー達は彼に向かって一斉攻撃をする。

——もうダメだ。

彼はそう思いつつ、死を覚悟して目を瞑る。

彼の十二年と言う短い幕が本当に終わる——。

——と、その時。

「火竜の咆哮!!」

「イーッ!!」

男性の詠唱と思われる声が聞こえた直後、シヨツカー達の悲鳴を聞き、ユウトは何事だと目を開ける。

——そこには、シヨツカー達を倒した桜色の髪の青年が立っていた。

「何だ…?」

目を開いたユウトがそう呟くと、青年はユウトに振り向く。

桜色の髪、白銀の鱗模様のマフラー、右肩にある赤色のフェアリーテイルの紋章。

間違いない。

「ナツ・ドラグニル…」

ユウトが彼の名前を呼ぶと、青年は相槌を打つように頷く。

「ああ！」

——これが、青年—— “ナツ・ドラグニル” とユウトの最初の出会いだ。

To Be Continued…

第5話 妖精の尻尾

前回までのあらすじ+ダイジエスト

現実世界で死亡し、統合世界に転生した小学生ユウトは転生神ミントと共に、最初の世界、FAIRY TAILの世界へと足を踏み入れる。

その世界には仮面ライダーの世界にしか存在しない筈のショッカーと言う名の敵が現れ、彼等と戦う事に。

戦いの最中、ユウトはFAIRY TAILの主人公であるナツ・ドラグニルと邂逅し、ナツとユウトの共闘によってショッカー達は全滅。

マグノリアはショッカー達の脅威から開放され、平和を取り戻した。

だがしかし、彼等は知らなかった。

新たなる脅威がユウト達の元に迫っている事に。

「シヨツカー達が全滅した…？」

「イーッ！」

「イーッ！」

砂漠にあるとある廃墟。

ここは、全滅した筈のシヨツカー達とそのリーダーだと思われる少女一人が拠点にしていた。

そこにフェアリーテイルによって全滅したと、マグノリアから命からがら逃げてきたシヨツカー二人によって伝えられる。

その報告に少女は、それぞれ片方ずつ異なる色をしている目を丸くしながら返事をする。

「イーツ！」

「イーツ！」

「彼奴等、強い、勝てる気がしない、だって？」

「イーツ！」

少女はシヨツカー達の言葉を翻訳出来るらしく、一人一人ずつ口に出しながら翻訳する。

彼女はその言葉に癩に障り、シヨツカー達を魔法で消滅させる。

「妖精の偽善者共に逃げるシヨツカー達は要らない。∴彼奴等に負ける訳が無いんだ。」
その通りでございます
「イーツ！」

少女の声にシヨツカー達は相槌を打つように返事をする。

「あの偽善者共を許さないよ！」

「イーツ！」

「決戦だア!!」

『イーッ!!!』

彼女はフェアリーテイルと戦争をするべくシヨッカー達と廃墟を出て、マグノリアへと歩み出す。

「ようこそ！妖精の尻尾へ！」

「遂に俺も、ここに……！」

シヨッカー達を倒したユウトは、ナツとその相棒の青猫、ハッピーの勧誘によってフェアリーテイルに加入することに。

遂に入れると歓喜していたユウトは早速フェアリーテイル内へと足を踏み入れる。
ファンタムロード 幽鬼の支配者と言う名の闇ギルドにギルドを破壊されたのか新しく建て替えて間もな
いらしく、新築したばかりの家のような木の匂いが鼻に入ってきて来る。

そしてギルド仲間達の騒ぎ声が耳に聞こえ、テーブルを破壊した音も聞こえる。

ユウトはそれらを聞いてこれこそ「フェアリーテイル」だな、と思いつつマスターの

所まで足を運ぶ。

「君が黒き者達からフェアリーテイルを助けてくれた若者じゃな？」

「いえいえ、僕はただショッカー達と悪戦苦闘してる姿を見て加勢をただけですよ。」
「それを助けたと言うんじや」

フェアリーテイルを守ってくれた、とユウトを称賛する老人。

彼こそが、妖精の尻尾のマスター、マカロフ・ドレアーだ。

「そうじや、何か礼をしなければな」

「いい、いいですつて！…お礼なんか…」

「何かをされた時には拒まれても礼はするべきじや。」

「いや、そうですけど…」

実はユウト、本当はお礼をしてもらいたいのだが、ちよつと格好をつけたいと拒んで
いるのだ。

ちよつと期待している事はマカロフにはお見通し。

そうじゃ、と言葉を続ける。

「お前さんをフェアリーテイルに加入することを許可しよう。」

「(っしや!) …マジですか?」

「うむ。マジじゃ。」

「やったー!!!」

マカロフの許可を聞き、ユウトは大声で歓喜する。

格好つけなんかこの際どうだっていい、と思いつつ彼は歓喜の声を上げ続ける。

その時…

バァン!!!

と、扉を蹴り上げる音がギルド内に響き渡る。何事だ、とユウト達は音のした方へと向かう。

そこには、全滅した筈のショットカー達と、そのリーダーらしき一人の少女が扉の前に佇んでいた。

ユウトは彼女に正体を聞き出す。

「お前、誰だ？」

「あ、まず自己紹介しなきゃいけない系かな？…じゃあ教えてあげよう。」

彼女は彼等に名乗り出す。

「私は大ショットカーのリーダー、アナザー族に属するハル・メテウスだ。」

片目を閉じ、微笑みながら自己紹介をする少女、ハル・メテウス。

——彼女は一体、何者なのか…？

To Be Continued…

第6話 心を変えろ

「え？アナザー族？…ワケワカメ過ぎてヨクワカラナイ」

「そこからなのね…」

髪色が水色とピンク色が左右対称に別れていて、カラコンなのは分からないが左目が黄色、右目が水色と左右異なる特徴を持つ不思議な少女、ハル・メテウス。

彼女の言う“アナザー族”という言葉にナツ達は意味が分からないと言わんばかりに首を傾げる。

アナザー族、とは？

「えっと、アナザー族って言うのは…君達 “ノーマル族” のもう一人の人間…：まあ、所謂ドツペルゲンガーのような存在だと思ってくれれば良いよ。」

「ドツペルゲンガー、ねえ…」

アナザーハルの説明をもう少し詳しく説明すると（分かりにくいですがすみません）
：

ナツ達のような通常の間人、 “ノーマル族” のもう一つの種族、 “アナザー族” 。

アナザーハルの説明通り、基本的にはノーマル族と体力等の値が全く同じ（技名や能力等は多少異なるが）。

ドツペルゲンガーと言うより、クローンと言った方が分かりやすいか。

「昔はアナザー族とノーマル族は仲良く暮らしてたんだけどね。二つの種族同士の戦いが原因で関係に亀裂が出来てしまったのね。」

「二つの種族の戦い？」

「この世に同じ人間は二人もいてはいけないうって理由で戦争が起きたんだよ。」

数年前まではアナザー族とノーマル族の関係は良好だったのだが、二種族同士の戦争によつて関係に亀裂が入ってしまったのだ。

現在でも未だに関係は不良好のまま、アナザー族はノーマル族を襲い、ノーマル族はアナザー族を襲うと言う事案が起きている。

「だから、俺達を襲いに来たと」

「ピンポーン！…ユウト君だっけ？君いいね！気に入ったよ」

「ふざけてる場合か？」

「此方はお前に殺気を向けてんだぞ」

「殺気か…私も一応殺気向けてるんだけど、気づかない？」

「ハッ、笑顔が殺気？ウケるんだけど——」

ビュッ

「う、っ…！」

「ごちとらお前らに殺されたショックカー達の仇を討ちに來たんじゃコラ」

アナザーハルの発言に鼻で笑う女性に目に見えない速さで攻撃する。
口調が変わり、先程まで笑顔だった彼女の顔が別人のように変わり、殺気が伝わってくる。

「殺したお前らを」

ユルサナイ。

「来るぞー！」

彼女の放つ恐怖感に怯えずにナツ達は彼女の攻撃に備えて戦闘態勢に入ろうとするが、アナザーハルの連れのシヨツカー達によって抑えられる。

しかも魔法を封じる石“魔封石”を溶かして塗ったシヨツカー達に。

魔法が使えず、さらに力も数倍アップしたシヨツカー達に、ナツ達は手も足も出ずにもがきだす。

そんな無防備な彼等にアナザーハルの攻撃が入る。

「アナーザースパーク」

「ぐああああ!!」

詠唱し、アナザーハルが放つ雷魔法を受け、ナツ達は悲鳴をあげる。

ピカチュウの10まんボルトどころの話ではない程の威力だ。

小学生だからか何故か攻撃されないユウトは、魔封石塗りのシヨツカーに抑えられて何もできないままナツ達が攻撃される光景に思わず目を背ける。

「ぐっ……」

「ユウト君、君はこの悲惨な光景を見てどう思うかな？」

「ふぎ…：けんな…、仇討ちの為にここまでして…：度が過ぎてるだろ…」
「仇討ちだからここまでするんだよ？」

そう言い、彼女はナツ達をスパークで攻撃し続ける。

悲鳴がギルド内に響き渡る。

苦しむ者達の悲鳴が。

ユウトはこの悲惨な光景を何もできずにただただ見ているだけ。

自分は何もできないままアナーザールに苦しめられる仲間達の地獄絵図を永遠に見続けなければいけないのか？

そう、思いながら。

「ぐあああああ!!」

「あああああ!!」

「シヨッカー達に負わせた傷を、全て味わわせてやる!!」

「やめろおお!!」

「アナザーサンダー!!」

仲間達の上空から、スパークとは比べ物にならない程の雷が落ちて来る。

死んでしまうどころのレベルじゃない雷が彼等を襲う、

その時だった。

巨大な手がアナザーハルを握り、彼女を握り潰さんと力を入れる。

その巨大手の正体とは…

「マスター！」

「ウチの餓鬼共に、手を出すな…!!」

「チツ、老人ごときが邪魔を…!」スパーク“!!”

アナザーハルは巨大な手——マカロフから脱出する事に必死になり、ナツ達に降る筈のサンダーを消滅させ、代わりにマカロフの腕に力を緩ませようとスパークを打ち出す。

しかし…

「ぐっ……こんな雷なんて、効かぬわああ!!」

マカロフはそれを弾き飛ばしたのだ。

「スパークが…弾き飛ばされて……ぐっ！」

「良いか、アナザー族の少女よ。仇討ちをする貴様の気持ちは分かる。」

マカロフはだがな、と続ける。

「ウチの餓鬼共を殺させる訳にはいかねえんだよ！」

「シヨツカー達の仇を討つ為にお前らを殺すのは…」

「当たり前な訳ねえだろおが!!!」

「当たり前だ」と言う言葉を遮るように、マカロフは彼女を怒鳴り付ける。

仲間をこんな形で死なせる訳にはいかないと言う思いで。

「ここでユウトがアナザーハルに口出しをする。」

「シヨツカー達が全滅したからと言って、俺達の仲間に仇討ちして、さらには殺そうとするなんてな、度が過ぎてんだよ。」

「仇討ちなら自分が満足するまでやるんだよ」

「違う、自分が満たされるまでの間に自分が殺した人達の家族や親戚の未来を考えた事はあるか？」

「それは……」

彼は続ける。

「自分の行いで、世界の未来を悪い方向へ変えてしまうなんて、考えた事はあるか？」
「……」

「自分の行いを変えれば、世界を変える。：お前の人生はこれからじゃないか。」

「これから？」

「ああ。：シヨツカー達に出会って悪に染まってしまったお前の心の片隅から、良き心を取り戻すんだよ。」

「良き……心」

アナザーハルは胸に手をあてながらそう呟く。

悪の心の片隅にある“良き心”を取り戻す？

小さな欠片なのに、心を動かす事なんて出来ない筈。

そう思っていると、まるで心を読んだかのようにユウトが返事をする。

「小さな欠片でも、自分の心を変えたいと言う思いが強ければ強い程、人は変われる。」
「自分の心を変えたい…」

「悪から這い上がってみせろ、アナザー・ハル・メテウス。」

心が、動いた気がした。

心の片隅にある『良心』と言う欠片が広くなつていくような…

「ありがとう、ユウト君。…君のお陰で、変わる気がしたよ。」

「そっか、それなら良かった。…頑張れよ。」

「うん！」

——こうして、シヨツカー達との戦いは幕を閉じた。

ここで次の世界に行っても良いのだが、目標がもう一つ達成してない事を忘れていないか？

旅仲間、だ。

三つ目の目標を達成するまで、ユウトはこの世界に留まらなければならない。

ユウトのFAIRY TAILの冒険は、まだまだ続く。

To Be Continued...

第7話 連合

シヨツカー達の脅威から一週間の月日が経過した。

シヨツカー達の被害については復興の目処が立ち、住民達も落ち着きを取り戻した。

あれから、アナザーハルは完全とは言えないが良心を取り戻し、これ以降の街の襲撃はしないと誓い、シヨツカー達と共に街から去っていった。

この世界の敵は（悪い意味ではない）一掃され、フェアリーテイルに加入したユウトは、三つ目の目標である「仲間」を見つける為、この世界に留まっていた。

「次は何編か……ウエンデイいない、ガジルとジユビアがいる……って事は、次はニルヴァーナ編か？」

クエストの帰り、ユウトは次のイベントについてぶつぶつと呟きながら歩いていた。ギルドは新築、ギルドにエレメント4の鉄の滅竜魔導士のガジルと大海のジユビアがいる、その次の編であるニルヴァーナ編に出て来る少女がいない。

つまりこれからニルヴァーナ編イベントが発生すると言う訳だ。

「って事はFTに着いたらバラム同盟について話し合ってる筈。だから少しでも情報を得る為に早めに……」

「おーい、そこの君！」

不意に男の声が聞こえ、ユウトが男の方に振り向くと、そこには筋肉質の美男と彼が営業している果物屋が建っていた。

「なんか用ですか？」

「この『金のリング』、買ってかないかい？」

「その為にわざわざ呼んだんすか」

男は金色に輝くリンゴを手に持ち、買ってけと言わんばかりにユウトに見せてくる。若干紫色の模様のようなものが動き回ってるのを見て、2度と手に入らない代物かも知れないと買う気になり、財布を出す。

「あー…いくら?」

「100000J」

「高つけ。…まあさつき報酬で100万貰ったからいつか」

また稼げると思い、貴重な報酬金100万を全部使ってしまった。

もう少し買う個数を考えてだな…

〃金のリンゴ〃を 10 個手に入れた!

「…これって本当に使えるんすか?」

「食ってみれば分かるさ。…毎度あり」

「どーも」

ユウトは金のリンゴが入ったビニール袋を手に取り、果物屋を後にする。後でみんなに食べさせようと思いつつ、彼はギルドへと向かった。

ユウトが着いた時にはもうバラム同盟や闇ギルドについての会話は終了していたよ
うで、予想通り、オラシオンセイイス「六魔將軍」と連合を組んで戦う事が決定したらしい。

「やっぱし連合は避けられ無い、か」

「ねえユウト、何持つてるの？」

ユウトが連合を避けられ無い事に溜め息を吐いていると、金髪の女性、ルーシイが金のリンゴについて話し掛けて来る。

「ああ、これはリンゴだ」

「リンゴ?…:にしては金ピカに輝いてるけど」

「店員から特殊なリンゴだって言われて買ったんだよ。あ、1個いる?1000000J

「だけど」

「いや金取んのかい！しかも高いし！」

「はは…冗談。ほい」

「あんがと」

冗談をかましながらユウトはルーシイに金のリングを手渡す。

窓から差し込む太陽の光を反射して金色に輝くそれに、彼女は目を輝かせていた。

「すごい…塗装か金箔を貼ったとしか思えない程の光を放ってる…」

「なんか店員曰く『金のブロック』とクラフトしたとか言ってたよ」

「クラフト？何それ」

「さあ？」

先程の果物屋の店員が言う『金のブロック』、『クラフト』。

この世界に存在しない筈の物質と単語を知る彼は、一体何者なのか？

バラム同盟。

オラシオンセイヌ
〃六魔將軍〃

グリモアハート
〃悪魔の心臓〃

タルタロス
〃冥府の門〃

この三つの闇ギルドから構成される闇の最大勢力。

それぞれが幾つかの直属ギルドを持ち、闇の世界を動かしている。

今回連合を組んで倒す闇ギルドは三つの闇ギルドの内の一つ、〃六魔將軍〃。

たった6人だけで最大勢力を担う彼等が最近、行動を見せている事が定例会（ギルドマスター達が集まる会議）で議題に上がり、無視は出来ないと言う事で討つ事が決定したと言う。

無論、フェアリーテイルだけで討つとなると後々バラム同盟に狙われる事になる。

そこで、四つのギルドが連合を組むと言う事に。

フェアリーテイル
〃妖精の尻尾〃

ブルーベガサス
青い天馬
ラミアスケイル
蛇姫の鱗
ケット・シエルター
化猫の宿

四つのギルドから各々メンバーを選出し、メンバー同士で協力してオラシオンセイスを討つと言うのが今回の作戦内容だ。

「で、選出メンバーが俺、ナツ、ルーシイ、エルザ、グレイ、ハッピー……大丈夫なのか？ 本当に」

「マスターの命令なんだ、仕方ない。」

「仕方ないって言われてもなあ」

集合場所に向かう馬車内で話を聞いたユウトは、選出されたメンバーに少し不満を抱く。

問題児が何をしでかすか分からないので、不満を抱いても仕方ないだろう。

「結局何時ものメンバーなんだよね」

「その方が良い。今日は初の合同作戦。まずは同ギルド内での連携がとれているかが大切なさ。」

「ドラゴンスレイヤーもいるからね、何時ものメンバーの方が良い。」

馬車内で話をしていると、目的地の集合場所が視界に入る。

ハートの形が特徴の城とは、なかなか趣味の悪い場所だ。

「趣味悪いな、ここの」

「ブルーペガサスのマスターボブの別荘だ」

「彼奴か…」

「え、誰それ」

「そっか、ユウトは知らないんだったね」

「ああ。（髭生えてるオネエだよな…）」

ブルーペガサスのマスター・ボブ。

スキンヘッドでずんぐりとした体型のオネエ系の男性。

彼はかつて別人のようにイケメンだったのだが、何故あぁなってしまったのだろうか

か。

——そんな話をしていると、急に城の灯りが消え、赤いカーペットの中心に現れたスポットライトが3人の男性に向けられる。

「あれ、テイデンかミ？」

「フェアリーテイルの皆様、お待ちしておりました。」

「我等ブルーペガサスより選出されし者……」

「百夜のヒビキ」

「聖夜のイブ」

「空夜のレン」

「3人揃って、トライメンズ!!」

「何その特撮ものみたいな登場の仕方」

特撮のように登場したブルーペガサスから選出されたイケメン3人組。トライメンズ。ちよつと格好いいが、一方のフェアリー組はナツがまだ馬車の酔いでダウン、そして

グレイが服を忘れると言うダメダメな状況。

この差って一体…

「でも彼奴等ナンパしてますよ」

「逆…」

本当は彼等がモテても良いのにナンパって…逆じゃないのか？（そんな事は無いと思います。 by 作者）

ナンパシーンはカット。

すると、階段からキラキラと輝くような甘い声が…

「君達、その辺にしておけ」

「〃一夜〃様」

「一夜？」

「久し振り、エルザさん」

「お前が、まさか参加してるとは…」

エルザが震える程のイケメンとは一体…？

「マイハニー、会いたかったよ。貴女の為の一夜でえす」

「マイハニー!?!」

「なあエルザ、あの人、お前の彼女か何かか?」

「全力で否定する」

イケメン…、とはかけ離れたブサイクのブルーペガサスの一人、“一夜”。

ユウトの質問にエルザが全否定する理由も分かる。

で、彼の口癖が、

「金髪の君、いいバルファム香り”だ。」

「キモいんですが」

「私も彼は苦手なんだ。凄い魔導士なんだが…」

「オンオフスイッチを持つんだな、彼」

すると、女達を絡む一夜達にグレイが口を出す。

「オイ、クソイケメン共」

「あ？」

「あんまうちの姫様方にちよっかい出すのやめてくんねーかな」

「あ、男は帰って良いよ」

「「お疲れ様でしたあ！」」

「オイ！」

「こいつら面白えw」

フェアリー組とペガサス組の睨み合いにエルザが止めに出るが、一夜の髪の毛の匂いを嗅ぐ行為に顔を赤めながら彼を殴ってしまう。

扉に向けて吹き飛ばされた彼は、丁度集合場所に到着した銀髪の人間に頭を凍らされ、そのまま動けなくなる。

「貴様等は『蛇姫の鱗』ラミアスケイル上等か?…随分とご丁寧な挨拶してくれてさ」

「『リオン』?!」

「グレイ!」

「お前、『あれから』ギルドに入ったのか…」

「え、誰?」

「これも後で説明するよ」

「あんがと。(ガルナ島編に出てた奴等か)」

原作『ガルナ島編』に出演した『リオン』。

説明すると長くなるので原作を見て下さい。持っていない人は買って下さい。by
作者

「フン」

リオンは一夜の頭の氷を溶かし、そのままグレイ達の方へ投げ出す。

「イケッ」

「きやつ」

「あぶねっ」

「何しやがる！」

「先制攻撃したのはそつちだろ？」

「てか、うちの大将一夜に何してくれてんだ？」

「ひどい！」

「男は帰ってくれない？今すぐに」

「あら、女もいますのよ」

もこっつ、もこっつ

声が出た途端、赤いカーペットが膨れ上がる。

その直ぐ後、カーペットに顔が浮かび上がる。

「〃人形撃・絨毯カーペット人形〃！」

「え、あ、あたいしい!?…てか、この魔法…！」

「うふふ、この私を忘れたなんて言わせませんわ」

女性の声がした後、赤いカーペットから女性が姿を現す。

「そして過去の私を忘れて、愛の為に生まれ変わった私を記憶に焼き付けなさい」

「どっちよ!!」

「…もう知らないなんて言わないっす」

ラミアスケイルの“シエリー”。

彼女もリオン達と同じくガルナ島でナツ達と対面している。

ラミア組のメンバー達が集まり、連合軍同士の睨み合いがより一層鋭くなる。

彼等を止める者はいるのか？

「やめい!!!」

「うお、ビックリした」

「ワシらはオラシオンセイスを倒す為に連合を組んでいるのに、仲間同士で睨み合いとは…」

「『ジユラ』さん」
「ジユラ!？」

連合軍同士の睨み合いを止めた彼は、『岩鉄のジユラ』。
彼はイシユガル大陸（現在は他の世界が混じった統合世界の一部だが）上の最強魔導士が集う『聖十大魔道』の称号を持つ。

「ラミアのエース、か」

「残りはケット・シエルターの道中のみだな」

「道中と言うか、1人だけだと聞いてまあす」

鼻血を流す一夜がそう言うと、ユウト達は驚き出す。

「1人!? こんな危ねえ作戦にたった1人だけをよこすってのか!？」
「…どれほどやべえ奴が来るんだ?」

すると…

「痛っ…あの、遅刻してすみません」

「ん?」

転倒から起き上がった少女は、遅刻した事を謝罪し、服を叩いて、緊張しながら名前を名乗る。

「ケット・シエルターから来たウエンデイです。よろしくお願いします。」

「子供!」

「女!」

幼い少女、ウエンデイ。

その意外な人物に連合組が驚愕する中、ナツは…

「ウエンデイ…?」

と、名前に違和感を覚え、ユウトは…

「つしや、こいつ仲間にしたらろ」

彼女を仲間にさせようとしていた。

ウエンデイ。

彼女は何故、ケット・シエルターから一人でやって来たのだろうか？

オラシオンセイストとの対面の時が、近付いて来る。

To Be Continued...

第8話 六魔將軍現る！

「ケット・シエルターから来たウエンデイです。よろしくお願いします。」

「子供!？」

「女!？」

「ウエンデイ……?」

オラシオンセイス

六魔將軍を討つ為に組まれた連合軍に、ケット・シエルター化猫の宿から来た小柄で幼い少女、ウエン

デイ。

意外な人物の登場に驚愕するメンバーの中、
「ウエンデイ」と言う名前に違和感を覚えるナツ、そして仲間にしよんとするユウト。

全員がウエンデイに視線を向けていた。

「……これで全てのギルドが揃った」

「いや話進めるのかいっ!」

そんな中、話を進めるジユラにグレイが突っ込みを入れる。

しかし、バラム同盟の一角であるオラシオンセイスを討つ作戦に子供一人をよこすとは流石に無理があるのではないのか。

「こんな大がかりな討伐作戦にこんなお子様一人をよこすなんて、ケット・シエルターはどういうつもりなのかしら？」

「確かに。しかも女子」

シエリーは不満感を抱きながらそう口に出す。

ユウトは、彼女の言葉に共感した。

「あら、一人じゃないわ、ケバいお姉さん」

入口から白く小さな猫が喋りながら登場する。

どうやら彼女はウエンデイの付き添いようだ。

「〃シャルル〃ついて来ちゃったの!？」

「当然。アンター人じゃ不安で仕方ないもの。」

(そういやこいつもいたな。∴で、ハッピーはここで彼女に∴)

原作確認済みのユウトはシャルルの登場も記憶済みで、原作通りならとハッピーに視線を向ける。

予想通り、ハッピーはシャルルに一目惚れをしていた。

「や っ ぱ り」

「ねえルーシィ、あの子にオイラの魚あげてきてよお」

「切っ掛けは自分で作らないとダメよ」

ハッピーはルーシィにシャルルに魚をあげると頼むも、恋愛は自分で切っ掛けを作ろうと拒否した。

皆も、恋愛は切っ掛けを自分で作らないと駄目だからね! (b y 恋愛経験無し之作

者)

「あ…あの、私、戦闘は全然出来ませんが、役に立つサポート魔法いっぱい使えます。だから仲間外れにだけはしないでください。」

「そんなだから舐められんの、アンタは!」

「いや、仲間外れになんてするわけが無いだろう?」

「ああ、少々驚いたがそんなつもりは毛頭無いさ。よろしく頼むぞ、ウエンディ。」

仲間外れにさせられると思い、泣きそうになるウエンディを安心させようと仲間外れをする事を否定し、逆に彼女を連合軍の1人として歓迎する。

ここで仲間外れにしたら後の戦いで相当不利になると、フェアリーテイルの名誉が傷が付く。

傷を付けたら、そこからは想像したくもない。

「ウエンディ、安心しろ。…お前を非難する奴は1人も居ないさ。」

「ありがとうございます。…あの、名前を教えてくださいませんか?」

「おう、俺の名前はユウ」

「さ、お嬢ちゃんは此方へ」

「え、あの…」

「オイ!」

ユウトがウエンデイに自分の名を名乗ろうとするが、遮るようにトライメンズにウエンデイを取られてしまう。

「ナンパ共め…」

「ユウト殿、ウエンデイ殿の魔力にお気付きだろうか?」

「え?…ああ、馬鹿な俺でも感じ取れますよ。」

「あの娘、ただ者ではない香りバルファムがするぞ…」

ユウト達はウエンデイがただ者ではない事に気付く。

彼女が、*“あれ”*を持つ魔導士だと言う事に。

「ウエンデイ…ウエンデイ…」

「どうした? ナツ」

「いや、何処かで聞いた事ある名前だなと…うーむ…思い出してくれねーか？」
「知るか!!」

ナツはウエンデイの名前に聞き覚えがあると記憶を探しだす。

ナツとウエンデイの目が合うと、彼女はにつこりと微笑むのを見て、考えるのをやめる。

「さて、役者は揃ったようだから私の方から作戦内容を伝えましょう。」

「お、やっとか」

ウエンデイに対する会話の後、一夜の方から作戦を伝えられる。

「——と、その前にトイレバルファムの香りを…」

「オイ」

「そこには香りバルファムって付けるなよ…」

トイレの香りを済ませ、戻って来た一夜は、早速作戦内容を伝える。

「ここから北に行く」と「ワース樹海」が広がっている。古代人達はその樹海にある強大な魔法を封印した。∴その名は「ニルヴァーナ」

“ニルヴァーナ”。

かつて古代人達が「ワース樹海」と言う樹海に封印したとされる破壊魔法だ。

「ニルヴァーナ?」

「聞かぬ魔法だな」

「ジユラ様は?」

「いや、知らない」

「シャルル知ってる?てか魚いる?」

「結構」

“ニルヴァーナ”は古代人が封印したのだからここに居る中で知る者はほぼ居ない。

「古代人達が封印するほどのとてつもなく強大な破壊魔法と言う事だけは分かっているが……」

「どんな魔法かは分からないんだ。」

「オラシオンセイスが樹海に集結した理由は、ニルヴァーナを手に入れる為なんだ。」

オラシオンセイスが集結した訳はワース樹海に封印されしニルヴァーナを入手する為。

何とかしてもそれだけは阻止をしなければならぬ。

「我々はそれを阻止する為に、オラシオンセイスを討つのだ！」

「でも敵の数は6人、こつち12人：圧倒じゃね？」

「だけど侮っちゃいけない。その6人がまたとんでもなく強いのだ。」

ヒビキは魔法を使って、オラシオンセイスの6人の写真を空中に映し出す。

「毒蛇使いの魔導士、 “ゴブラ”」

鋭い目をした残忍そうな顔の男、 “コブラ”。

「その名からしてスピード魔法を使用すると思われる “レーサー”」

“ゴーグルを付ける鼻が長い男、 “レーサー”。

「天眼の “ホットアイ”」

“まるで顔に直接彫刻したのかと思う程のカクカクした顔面を持つ男、 “ホットアイ”。

「心を覗けると言う女、 “エンジェル”」

その名の通り、まるで天使のような外観の銀髪の美女、 “エンジェル”。

「この男は情報が少ないのだが、 “ミッドナイト” と呼ばれている」

ミステリアスな青年、 “ミッドナイト”。

「そして奴等の指令塔 “ブレイン”」

顔面に所々左右対称の線模様が付いており、まるで闇っぽく感じ取れる銀髪の男、 “ブレイン”。

「彼等はたった1人でギルド1つを潰せる程の魔力を持つ。我々は数的有利を利用する。」

相手は6人、此方は13人。

数的有利を利用する事で、討伐成功率がグッと上がる。

しかし、相手は1人ずつにギルド1つ潰せる程の強大な力を持つので、勝利するかどうかは努力とチームワーク次第である。

そんな強大な力を持つ彼等を倒すとなると、当然弱音を吐く者も…

「あ、あの…あたしは頭数に入れないで欲しいんだけど…」

「私も戦闘は苦手で…」

「ウエンデイ、弱音吐かないの!」

「まあ、無理も無いよなあ」

ギルド一つを潰せる力を持つ彼等を相手にするととなると女子にとって無理も無い。

しかし、彼女達にとって朗報が耳に入る。

「安心したまえ、我々の作戦は戦闘だけにあらず、奴等の拠点を見つけてくれれば良い。」
「拠点?」

「今は奴等を捕捉していないが、樹海には奴等の仮説拠点があると推測される。」

ニルヴァーナを手に入れる為に樹海に集まったオラシオンセイスは、ここに滞在する為の仮説拠点が建っていると推測する。

「もし可能であれば、奴等全員をその拠点に集めて欲しい。」

「どうやって?」

「殴つてに決まってるだろ!」

「結局戦うのな…」

ナツの好戦的意見に突っ込みを入れる中、エルザが作戦に対する疑問を聞く。

「で、集めてどうするのだ？」

その疑問を聞いた一夜は、空に向かって人差し指を指す。

「我がギルドが大陸に誇る天馬、〃クリステイナー〃で拠点もろとも葬り去るのだ！」

「おお!!」

「魔導爆撃艇?!」

人差し指を指した先には、ペガサスがモチーフとなったブルーペガサス所有の魔導爆撃艇、〃クリステイナー〃が浮遊していた。

これで拠点に集めたオラシオンセイスを、纏めて潰そうと言う作戦のようだ。しかしそれに対し、ルーシイは…

「てか、人間相手にそこまでやるか…?」

「そう言う相手なのだ。…いいか、戦闘になったら決して1人で戦ってはいかんど、敵1人相手に必ず2人以上でやるのだぞ。」

「え…」

それほど怖いと言う事を理解したようで、ルーシイの顔色が真っ青に染まる。
そんな彼女に対し…

「燃えて来たぞ、6人纏めてオレが相手してやるぞお!!!」

「おい、ちよ…待てよ!」

「作戦聞いてないだろ! ナツ!」

物凄くやる気になったナツに作戦内容が耳に入る事は無く、6人纏めて倒そうとその場から飛び出してしまふ。

それに続いて、他のメンバー達も動き始める。

「大丈夫かな…」

置いて行かれたユウトも、心配しながら彼等に付いていくのだった。

次元間世界

「レート様、ユウトについてなのですが…」

「なんだい？」

ユウトの一連の行動を監視していた次元間世界では、レインがユウトについて話し掛ける。

「彼、前世の記憶を無くした方が良いと思うんですよね…」

「それは僕も疑問視しているよ。…原作終了まで閲覧していた彼にとって、このまま記憶したままだと歴史を変え兼ねないからね…。」

前世でFAIRY TAILを原作終了まで閲覧していたユウト。

彼がこのまま歴史を変えるのでは無いのかと、次元間世界で議題となっている。

「記憶消去が望ましいか…?」

「あるいは記憶を保ったままにする…?」

「うーん…」

2人揃って考えた後、同時に答えが浮かび上がる。

「様子を見る!」

「で、良いよね?」

「で、良いですよね?」

「分かった」

「分かりました」

気が合うのでは無いのか?と言いたいのには分かる。

2人は様子を見るとふんで、各々の持ち場に戻っていった。

「見えてきた、樹海だ!!」

「待てよ、ナツ!」

「やーだねー!」

「1人で先走るな」

「みんな…足…速すぎ…」

一方、オラシオンセイイス探しをしていたナツ達は、樹海の目前に到着していた。他の者達も、次々とナツに引き続き樹海の目前に到着した。

「樹海漫画で見てたけど、生で見るとこんなに綺麗なんだなって感じ取れる…」

「何言ってるの?」

「いや、独り言。」

そんなこんな会話をしていると、上空が暗くなる。

その状況に一同、上を見る為はその場に止まる。

上空には、作戦に利用する為の飛行艇が姿を現していた。ペガサスをモチーフにしたそれは、絶大な巨大さと迫力さを物語っていて、メンバー達の目を輝かせる。

「魔導爆撃艇 ックリステイーナッ!」

「おお、素晴らしい!」

「あれが噂の天馬!」

作戦の為にこれから移動する天馬。

と、クリステイーナからいきなり噴煙が上がる。

「え?」

「そんな…!」

「クリステイーナが…爆撃された!」

次第に火は拡大し、浮遊していた飛行艇が噴煙を上げながら墜落。

木屑となつてしまったクリステイナの噴煙から、複数の人影が浮かび上がる。

「誰か出て来るぞ…」

「ひえー！」

「ウエンデイ！」

ザツザツ

足音を上げ、次第に煙に映る影の色が濃くなつて行き、正体を見せる。

6人の、将軍が。

『オラシオンセイズ
六魔将軍!!』

六魔将軍、現る!!

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d.
∴

第9話 V S. 六魔将軍

ザツザツ

近づく足音が段々と大きくなり、噴煙に映る複数の影が徐々に黒くなる。

そして、将軍が――

――正体を、現す。

『オラシオンセイイス六魔将軍!!』

強大な力を握る6人の将軍達の名――オラシオンセイイス六魔将軍の名前を呼ぶ。

「蛆共が…群がりおって」

と、オラシオンセイスの指令塔のブレインが辛辣な言葉を放つ。
それに続き、銀髪の女性が口を開く。

「君達の考えはお見通しだゾ」

「ジュラと一夜もやっつけたぞ」

「ドーだ」

「何!?!」

「ば、バカな!」

(しくじったあー!あの2人助けんの忘れてたあ!!)

場面は数分前に遡る。

「大丈夫かな…」

ユウト達が走って行くナツに続き、出入口から姿が見えなくなるのを残ったジュラと一夜は彼等を見送っていた。

「やれやれ」

「メエーン」

2人はドタドタと走る彼等に少々呆れるが、気持ちを切り替えて行動に動こうとする。

「何はともあれ作戦開始だ。我々も行くでしょう。」

「あ、その前にジュラさん」

「何だね」

出入口へと向かおうとする彼を、一夜が呼び止める。

「かの聖十大魔道の一人と聞いていますが…その実力はフェアリーテイルのマスターマ

カロフにも匹敵するのです？」

「滅相もない」

聖十大魔道であるジユラ。

彼の実力がフェアリーテイルマスターであるマカロフを越えているのかと聞いてくる一夜に、ジユラは汗をかきながら答える。

「聖十の称号は評議会が決めるもの。ワシ等は末席、同じ称号を所持していてもマスターマカロフと比べたら天と地ほどの差があるぞ。」

「ほう。」

マスターマカロフとの実力が天と地ほどの差があると答えたジユラに、納得した一夜が答える。

「それを聞いて安心しました。『マカロフ』と同じ強さだったらどうしようと思ってまして…」

一夜の意味深な発言を聞いた後、彼の周りに臭いが立ち込める。その匂いを嗅いだジユラは、あまりに刺激的な臭いに鼻を抑えてしまう。

「な、何だこの臭いは…!?!」

「相手の戦意を喪失させる魔法の香り…バルファム…だつてさ。」

「一夜殿!!これはいつ…」

ザンツ

ジユラが戦意を喪失している隙を見て、一夜は右腹を狙ってナイフを使って刺す。

刺された箇所^{箇所}に激痛が走り、思わず吐血してしまうジユラを見て、一夜は口角を上げながら身体中から泡を出し、2人の小人へと姿を変える。

どうやら小人達が一夜に変身していたようだ。

「一夜つて奴、エロい事しか考えてないよ」

「考えてないね!駄目な大人だね」

一夜に変身している間、小人達は彼の心を読み取り、破廉恥な事しか考えて無い事に物申しを言っていた。

「はいはい、文句言わない！」

「ピーリ」

と、銀色の髪的女性が彼等の元に現れる。

状況が全く掴めないジユラが、彼女に話し掛ける。

「こ、これは…?」

「あー、あの汚い男ねえ、コピーさせて貰ったゾ。お陰で貴方達の作戦は全部把握したゾ。」

「僕達コピーした人の」

「考えまで分かるんだー」

銀髪の女性——オラシオンセイスの一人であるエンジェルに続き、小人達が理由を説明する。

先程も言ったように、小人達はどうかやら変身している者の考えが理解できるようで、お陰様で連合軍の作戦を全て把握してしまったようだ。

——やられた。

と、ジユラは膝を付く。

「はーい！まずは2人仕留めたゾ」

「メエーン」

「無念……」

便所で茶色い物体を頭に乘せながら倒れる一夜と、聖十なのにあっけなく倒れるジユラ。

それを見て、今まで笑顔だったエンジェルが血相を変えてこう言う。

「邪魔はさせないゾ、光の子達。邪魔する子は天使エンジェルが裁くゾ。」

と言う出来事があった。

原作把握済みのユウトが何故助けなかったのかは置いておき、連合軍全員に2人が倒された事に動揺が走る。

「動揺しているな？聴こえるぞ。」

「仕事は速エ方が良い。それにはあんたら、邪魔なんだよ。」

「お金は人を強くするデスネ。良い事を教えましょう。世の中は金が全て」「お前は黙ってるホットアイ」

と、動揺を見透かす毒竜のコブラ、速さにこだわるレーザー、金が全てだと言い切るホットアイも、余裕な表情で連合軍を見据える。

それに対し、もう1人の男ミッドナイトは彼等に興味が無いのか浮遊する絨毯の上で爆睡していた。

「まさか、そつちから現れるとはな…」

エルザが彼等に会話をもち掛けようとしたその時、好戦的なナツとグレイが彼等に攻撃を仕掛けようと飛び出す。

「探す手間が省けたぜえー!!」

「あ、おい！」

それに対し、ブレインは冷静沈着。

此方に向かって来る2人にレーサーを向かわせる。

「やれ」

と命令矢先、既にナツ達の背後にレーサーが向かっていた。

2人は後ろを向くが時既に遅し、迅速なスピードで回転し彼等を攻撃する。

「モオタア！」

「ぐああっ!」

「うあっ!」

「ナツ! グレイ!」

攻撃され、心配するルーシイ2人。

…え? 2人?

「ん?」

「え?」

ルーシイ達は互いに顔を合わせる。

と、ルーシイが装備している鞭を取り出し、ルーシイに攻撃する。

「ばーか!!」

「な、何コレエ!?!」

恐らく攻撃した方はエンジェルがその光景を見て微笑していたので小人が変身した偽物と見て間違いは無さそうだ。

それを見て、見ても立っても居られないリオンとシエリーは2人で攻撃に動くが、ホットアイが魔法で足元の土を動かし、行動を阻止される。

「愛など無くとも金さえあれば!!…デスネ」

「きゃああっ！」

「な、何だ!?地面が…！」

続いて行動に移るトライメンズも、レーサーに攻撃されてしまう。

「あのレーサーって奴が厄介だな…確か氷の造形魔法も使用出来るって話だから使うか」

ユウトも攻撃に移る。

目標は厄介者のレーサー、倒せば少しは楽になるであろう。

「//^{アイスマイク}氷の造形魔法・ライフルスコープ!!」

照準をレーサーに定め、ライフルスコープで攻撃する。

「発射!!」

しかしそれは外れ、ユウトにレーサーが襲い掛かる。

「オレの速さを舐めない方が良いぜ」

(速い……!)

「モオタア!!」

「ぐわあっ!!」

ユウトはレーサーにそう言われた矢先、ナツ達と同じ攻撃パターンで攻撃され、悲鳴をあげる。

エルザは天輪の鎧に換装し、コブラに攻撃を仕掛ける。

「舞え!! 剣達よ!!」

無数の剣が彼に切り刻まんと刃を向けて振ってくるがまんまと回避され、エルザに余裕な表情を向けられる。

レーザーの攻撃を食らったナツだが直ぐに立ち上がり、睡眠中のミッドナイトに話し掛ける。

「お前何寝てんだこの野郎!! 起きろー!!」

ミッドナイトに目覚めのプレスを発射するが、火は手前で曲がりくねって当たる事は無く、何事も無かったかのように寝息を立てながら眠り続ける。

その光景にナツは驚愕する。

「え」

「よせよ、ミッドナイトは起こすと怖エ」

「んがつ」

そこにレーザーが登場。

注意喚起の後、風を纏った拳の攻撃でナツを吹き飛ばした。

六魔將軍の物凄い強大な力に連合軍は手も足も出ず、攻撃されるだけ。

氷漬けにされたり、地面を操って攻撃されたり、吹き飛ばされたり、迅速な攻撃をされたり。

岩の裏に隠れていたウエンデイはその光景を見ても居られなくなり、恐怖で震えて泣きそうになる。

一方、エルザがコブラ達と戦っている姿を見ていたブレインは、エルザに興味深くなる。

「ほう、これがエルザ・スカーレットか。さすがと言った所だな。」

悪戦苦闘していたエルザもとうとうやられてしまう時が…

「聴こえるんだよ、その動き」。

「!!」

ここでエルザが右首の違和感に気付くが時既に遅し、毒を持つ蛇に噛まれ、毒を注入させられてしまう。

毒は直ぐに効果が現れ、エルザの腕に力が入らなくなり、握っていた剣を手放してしまふ。

それを見て、コブラは悪巧みな表情で毒の説明をする。

「そいつの毒は直ぐには死なねえ。苦しみながら息絶えるが良いさ……」

その言葉を放った後、彼女はその場に倒れ、苦しむ。

これが、六魔將軍の強大な力。

聖十のジュラを含む連合軍でさえ、敵う事は無かった。ユウト達に、ブレインから止めの一撃が食らわされる。

「ゴミ共め、纏めて消え去るが良い。」

ブレインの持つ杖に集まる魔力は、他の5人とは全く桁違いの魔力が感じ取れる。大気が震える程の強大な魔法、あれを食らったら、死んでしまうのは確実だろう。ユウトの第2の人生も終了してしまう。

「終わり、か…へへ…」

「^{ダーク}常闇回^{ロンド}旋曲”…!!”

ブレインは何かに気付き、攻撃を止める。
彼が見た者とは…

「ウエンディ…」

岩の裏に隠れる、小さな少女、ウエンディだった。

To Be Continued…

第10話 天空の巫女

5話毎前回までのあらすじ

次元間世界により統合した二次元世界。

現実世界で混乱等の影響が発生している中、現実世界で死亡し、統合世界に転生した小学生ユウトは、一番最初に足を踏み入れた世界“FAIRY TAIL”にてナツ達と共にショッカー達を倒し、3番目の目標である仲間収集を達成する為に、現在ニルヴァーナ編で活躍中。

ニルヴァーナ編にて六魔将軍^{オラシオンセイイス}を連合軍と協力して戦うが、強大な力を握る彼等には到底敵わず、ブレインからの止めの一撃が食らわされる直前、ブレインは化猫^{ケット・シエル}の宿のウエインデイに目をつけた途端、彼の魔法が解けてユウト達は間一髪。

にしても彼は何故ウエインデイに目をつけたのだろうか…。

「……………ウエンディ」

「え？…え？」

ブレインがウエンディを見つけると、ユウト達に止めの一撃を食らわせる筈だった魔法を消し、彼女を見据えながら名前を呼ぶ。

ウエンディは今の状況が理解できないのと彼が何故自分を知っているのかと混乱し、涙で潤った目で彼を見据える。

その場にいた連合軍全員はざわつき、オラシオンセイスはブレインにウエンディとの関係があるのかと訊ねる。

「どうした、ブレイン？」

「知り合いか？」

「……………間違いない」

レーサーとコブラの質問を聞き流し、彼は間違いないと言い、彼女の別名を言う。

「『天空の巫女』」

「天空の…」

「巫女？」

「なにそれ〜！」

彼女を天空の巫女と呼ぶブレインに、連合軍は首を傾げる。

ウエンデイは天空の巫女と言う言葉にしやがみながら何だと口に出す。

ブレインは天空の巫女と確信すると、不適な笑みを浮かべながら独り言を言う。

「これは良いものを拾った。…来い。」

「きやあ!？」

「ウエンデイ！」

ブレインは魔法でウエンデイの身体を掴み、此方に引き寄せる。

ユウトは彼女を引き戻そうとウエンデイの所へ移動し、ナツもブレインを止めようと

すると…

「何しやがる、この…」

「金に、上下の隔て無し!!」

「うわっ!」

「がっ!」

「くあっ!」

「きゃあ!」

ホットアイがブレインの邪魔はさせんと土魔法を繰り出し、彼等の動きを止める。

一方で、引き連れられるウエンディをシャルルは手を伸ばすが、何故か同じく引き戻そうとしていたユウトとハッピーも一緒に連れて行かれる事態に。

「あ」

「あれ?」

「待ってください、俺も連れてかれるパターンですか?」

すると、魔法が彼等の転送を始めるのか、悲鳴を最後に彼等の姿が黒煙と共に消える。

「きやああああつ！」

「ナツ——！うわ——！」

「ちよつとおおお!!」

「ウエンデイ！」

「ハッピー！ユウト！」

ナツとシャルルは2人（十一匹）の名前を呼ぶが、姿が消えた彼等から返す声が聞こえる事は無く、彼等の呼び声が響き渡るだけだった。

転送が完了したと分かったブレインは、用無しとなったナツ達に魔法を繰り出す。

「うぬらにもう用は無い。消えよ!!」

「伏せろお!!」

間一髪だったが万事休す。

躲し切れない程の雨のように降ってくる弾幕に、ナツ達はその場でひれ伏せる。

しかしこの量を一齐に食らったら一溜まりも無い。

彼等に迫り来る弾幕。

と、そこに1人の男が現れ、弾幕に向けて魔法を詠唱する。

「『岩鉄壁』!!」

詠唱した直後、地面からよきによきと太棒が現れ、屋根となってナツ達から身を守った。

否、攻撃された筈のジユラが彼等を守ったのだ。

「ジユラ様!」

「おおっ!」

間一髪の登場に一同歓喜の声をあげる。

頭の異変の突っ込みも若干含めてはいるが…

「彼奴等は!?!」

魔法に直撃した土が崩壊し、その衝撃によつて発生した土煙によつてオラシオンセイアの姿が見えなくなつてしまふ。

ナツは急いで彼等が居るかどうか確認するが…

やはり土煙を利用してナツ達が見えない隙にその場から退散したようだ。

「完全にやられた…」

「彼奴等、強すぎるよ…」

その場に居る彼等がオラシオンセイアに完敗し全員が悔やむ中、シャルルは連れ去られたウエンデイを心配する。

「ウエンデイ…」

一方、リオンはエンジェルの攻撃を耐え抜いたジユラの無事を確認する。

「ジュラさん、無事で良かったよ」

「……いや、危うい所だった。」

「その傷……」

腰に巻かれた包帯が血で赤く染まっているのを見て、当時あの場にいなかった何も知らないリオンは心配する。

「今は一夜殿の『痛み止めの香り』^{パルファム}で一時的に抑えられてはいるがな。」

「オラシオンセイスメ、我々が到着した途端に逃げ出すとは……さては恐れをなしたな……」
「あんたボロボロじゃねーか!!」

一夜の格好付けて余裕な原動にグレイはボロボロの奴が言うんじゃないと突っ込みを入れる。

一夜は連合軍の者達にも痛み止めの香り^{パルファム}を充満させ、全員の痛みを和らげる。

「彼奴等……ユウトにウエンデイ、そしてハッピーを……何処だあー!!!」

「ナツ!!」

攫らわれてしまったユウト達を探そうと駆け出すナツを、シャルルがマフラーを掴んで引き止める。

——ハッピーと同じく背に羽を生やした状態で。

彼女を見たグレイ達は羽が生えている事に目を丸くする。

「羽?」

「猫が、飛んでる…!」

「これは、^{エーラ}翼^{エーラ}って言う魔法。ま、驚くのも無理は無いけど。」

「ハッピーと被ってる」

「何ですって!?!」

被つてると言われシャルルは若干ショックを受けながら怒り出す。

「…兎に角、ウエンディにオスネコ、紺色の男の子の事は心配ですけど、闇雲に突っ込んでも勝てる相手じゃないと分かったでしょう。」

「シャルル殿の言う通りだ、敵は想像以上に強い。」

シャルルの話にジユラも頷く。

「それに、」

シャルルは視線のみをとある方向に向ける。

その先にはコブラの毒蛇に噛まれ、腕を押さえながら苦しむエルザの姿が。

「エルザ、しっかりして！」

「そんな…痛み止めの香りバルファムが効かないなんて!!」

申し訳無さそうに一夜が言う。

彼の魔法は「痛み止め」が出来るだけであって、解毒にまでは至らない。

ルーシイ達もエルザを心配する。

「エルザ!!」

「…ルーシイすまん…ベルトを借りる…」

「え？」

エルザがそう言いながらルーシイのベルトを引き抜く。

そのベルトが引き抜かれた事によってルーシイのスカートがストンと落ち……

おっと、イケナイイケナイ…

ルーシイは顔を赤らませながらスカートを上げる。

で、エルザはベルトを腕にキツく縛り、歯の間にハンカチを挟み、胡座を組んで腕を差し出し、こう言う。

「——斬り落とせ」

『!?!』

なんと彼女は毒が回っている腕を斬り落とすよう指示したのだ。その思いきった指示にルーシー達は驚愕する。

「馬鹿な事言ってるじゃねえよ!!」

グレイが思いきった指示に怒号を上げるが…

「……分かった、オレがやろう。」

リオンは躊躇いなく腕を切り落とす用の剣を拾いながらそう言った。

「リオンてめえ!!」

「今、この女に死んでもらう訳には行かん」

確かに、毒はまだ全身を回った訳では無い。

全身に回る前に、毒の源である右腕を切り落とす事によって、100%ではないがエルザが死ぬ可能性は減少する。

少しでも生き残る為に、彼女はその選択を選んだのだろう。

そして、リオンがエルザの腕目掛けて剣を振り下ろす——のをグレイが氷で阻止した。

「貴様はこの女の命より腕の方が大事か？」

「他に方法があるかもしれないだろ？ 短絡的に考えるなよ。」

グレイとリオンが静かに睨み合う中、とうとうエルザに毒が回り始め、力尽きてその場に倒れてしまう。

「あ…」

「エルザ!!」

「不味いよ、このままじゃ体に毒が回って…!」

「——ウエンディなら助けられるわ。」

静かな声で言い放つのはウエンデイの相棒、シャルルだった。

「今更仲間同士で争つてる場合じゃないでしょ。力を合わせてウエンデイ達を救うのよ。…ついでにあのオスネコも」

ウエンデイが解毒の魔法が使えると知った者達は、目を輝かせる。

「あの娘コが解毒の魔法を使えるの？」

「凄いなあ」

「それだけじゃない。解熱や痛み止め、傷の治癒も出来るの。」

「あ、あの…私のアイデンティティーは…。」

更に傷の治癒も出来る事に一同は驚きを見せる。

一夜の悲しみの声も若干聞こえるが…

「治癒って、失ロストわれた魔法マジックじゃなくて？」

「まさか天空の巫女つてのに関係が？」

ブレインも口走っていた天空の巫女の意味、それは…

「あの娘は天空の滅竜魔導士、ドラゴンスレイヤー天竜のウエンデイ。」

その衝撃の事実には、全員驚愕。

なんとウエンデイはナツ、ユウトと同じ滅竜魔導士だったのだ。ドラゴンスレイヤー

「詳しい話は後！今、私達に必要なのはウエンデイよ。そして目的は不明だけど彼奴等もきつとウエンデイを必要としている。」

真剣な顔つきのシャルルの言葉に、全員も気を引き締める。

「と、なれば」

「やる事は一つ。」

「ウエンデイちゃんを助けるんだ。」

「エルザの為にも。」

「ハッピーとユウトもね。」

目的はウエンデイ達を取り戻す。

彼等の心が一つになるのを感じる。

全員、拳を突き合わせ、反撃の合図をする。

「おっし!!行くぞオ!!!」

「オオツ!!」

ニルヴァーナ編は遂に、反撃編へと入って行くのだった。

To Be Continued...

第11話 奴

ナツ達が拳を突き合わせた一方で、攫われたユウト達はと言うと：

連れ去られた場所はかつて、古代人の都だった場所。

その場所にある洞窟は、村の神事の際に、巫女が籠り神託を得たと言う。

「きやつ」

「うわっ」

「ぎゃわ」

3人はその洞窟内に投げ込まれる。

「乱暴に扱うな！女の子なんだぞ！」

彼等に叱るハッピーだが、ブレインに顔を握られて床に放り込まれる。

ユウトはウエンディを背に右手で庇いながら、オラシオンセイスを睨みつける。しかし、睨みに対して全く怖がらない彼等は、ウエンディについて話し出す。

「ブレイン、この女と餓鬼は何なんだ？」

「ニルヴァーナに関係してんのか？」

「そんな風には見えないゾ」

「そうか、売ってお金に」

「お前は黙ってろ」

ウエンディに対する疑問が上がる中、ブレインが口走る。

「餓鬼は付いてきただけだ。…女の方は天空魔法…言い換えれば治療魔法の使い手だ。」

その言葉に全員は驚愕する。

「治療魔法だと?!」

「ロストマジック
失われた魔法…。」

「これは金の臭いがしマスネ」

そんな中、ユウトが彼等に聞き出す。

「…何が目的なんだ？」

「〃奴〃を復活させるのさ。あの娘を使つてな。」

彼の言う〃奴〃とは？

「私、悪い人達には手を貸しません!!」

「同感。俺もそう言う事には協力しないんでね。」

ウエンデイの反論に、ユウトも共感する。

「貸すさ、必ず…」

ブレインはウエンデイを見下しながら言う。

「ウエンデイ、うぬは必ず、奴を復活させる。」

「させねえからな、絶対に」

ユウトの言葉を無視して、ブレインはユウトに視線を向ける。

「レーザー、奴をここに連れて来い」

「遠いなあ、1時間はかかるぜ」

「構わん」

レーザーは会話後すぐに、*“奴”*を連れて来る為、音速で*“奴”*の元へ向かった。

「コブラ、ホットアイ、エンジェル。貴様等は引き続きニルヴァーナを探せ」

「でもあの人が復活すればそんな必要は無いと思うゾ。」

「万が一と言う事もある。私とミッドナイトはここに残ろう」

「ミッドは動く気配が無いデスが…」

「じゃあねえ、行ってくるか」

「ねえ、競争しない？先にニルヴァーナを見つけた人が「100万J!!乗ったア!!デスネ」高いゾ」

楽しく会話しながらニルヴァーナを探しに向かうコブラ達を見送りながら、ウエンデイとユウトは話し合っていた。

「なあ、ニルヴァーナって何なんだ？」

「そんな、私に聞かれても分からないよ」

「だよなあ…（まあ知ってるんだけどさ）」

「うぬ等、ニルヴァーナがどんな魔法か知りたくないか？」

「……どんな魔法なんだ？」

ユウトの質問にブレインは邪悪な笑みを浮かべながら答える。

「——光と闇が、入れ替わる魔法だ。」

「——天空の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーつてき、何食うの？」

「空気」

「うめえのか？」

「さあ？」

「それ、酸素じゃないのか？」

空気（酸素）を食べると言う事は、一生魔力補給に困らないと言う事だ。それに伴って酸素濃度が薄くなってしまいうだろうが。

「ドラゴンスレイヤーつてそう言う所が共通してるんだよなあ」

「ユウトも氷食ってるしな。この間もかき氷100杯食ってたし」

「すげえよなあ」

かき氷の話の後、シャルルがウエンデイが連合軍に参加した理由を語りだす。

「あの子、あんたに会えるかもしれないってこの作戦に志願したの。」

「オレ？ユウトは？」

「男の子の方はあまり知名度が低かったから知らなかったみたい。…あの子、7年前に滅竜魔法を覚えてくれたドラゴンが、突然姿を消したらしいの。あんたならドラゴンの居場所知ってるかもって。」

この話はユウト以外全員共通している。

7年前の7月7日に、突如滅竜魔法を教えたドラゴン達が姿を消したのだ。

理由や原因、それに行方も不明。

ナツ達は消えたドラゴン達の行方を追うべく、各々のギルドにいる訳だ。

「〃天竜グランディーネ〃とか言ってたかしら。」

「オイ!!居なくなつたのって7月7日か!？」

「さあ？」

当然、シャルルはドラゴンと関係がない為、詳しい事は全く分からない。

「イグニールとガジルのドラゴンも、ウエンデイも7年前…んがっ!!」

考え事に夢中になっていたナツは、目の前にあった木の枝に気付かずに顔面を強打してしまふ。

「あれ？ユウトって育てられたドラゴン何て名前だっけか？」

「そーいや俺も知らねえな…後で直接聞いとくか」

そう会話した後、彼等はウエンデイ達を奪還すべく走り続けるのだった。

「そうか、お前ドラゴンスレイヤーだったのか」

「うん。ユウト君はドラゴンについて何か知ってる？」

「え？…えつと…」

ウエンデイの質問に言葉が詰まる理由、それは、ユウトは転生特典で滅竜魔法を与えられたので、ドラゴンの名前、そしてドラゴンが姿を消した日時等について、彼は全く知らないのだ。

しかし、ここで前世の記憶を思い出しつつ返答する。

「俺も7年前にドラゴンがいきなり姿を消してさ、行方も分からないまままで困ってるんだよ（前世に感謝っ！）」

「そうなんだ…やっぱり知らないか…」

「ごめんな、役に立たなくて」

「そんな事は無いよ！…寧ろ同じ7年前にドラゴンが居なくなっただって情報を掴んで嬉しいぐらいだよ」

「なら良いんだけどさ」

そういう会話をしていると、レーザーが謎の棺桶を持ちながら洞窟内へと戻ってきた。

「重てえ、これじゃスピードが全く出ねえぜ」

「ご苦労。主より速い男など存在せぬわ。」

(いるんだよなあ、海外の超能力家族に物凄い速い男の子が…)

ブレインの発言に心の中でユウトがそう突っ込む。

と、棺桶に対してウエンディは怖じ気付きながら両腕を握る。

「ひっ」

「棺桶!？」

「奴、っでもしかして死体なのか？」

ユウトの疑問を無視しつつ、ブレインは棺桶を封印する鎖を解錠していく。

「ウエンディ、お前にはこの男を直して貰う。」

「わ、私：そんなの絶対にやりません!!」

「そーだそーだ!」

「そーだそーだ! (便乗)」

ウエンデイの拒絶に続き、1人と1匹も共感するが、ブレインは拒絶を無視し、鎖を完全に解錠して棺桶を開ける。

「いや、お前は治す。…治さねばならぬのだ。」

棺桶の中身には、ブレインが言う「奴」であろう意識が無いまま拘束される青年がいた。

その青年を見て、ウエンデイは目を見開く。

「この男は『ジェラール』。かつて『ジークレイン』と名乗り評議院に潜入していた。つまり、ニルヴァーナの場所を知る者だ。」

「ジェラール?」

「ジェラールって、え?」

「ジェラール…」

「え、知り合いなの!?!」

ジェラールを目を丸くして見据えながら名前を呼ぶ彼女に、知り合いだと驚くハッピー。

ユウトは会った事も無い彼に首を傾げていた。

「エーテルナノを大量に浴びた結果、この姿になってしまったのだ。…元に戻せるのはうぬだけだ。……恩人…なのだろう？」

その男は、かつて『楽園の塔』編でエルザ達を苦しめたジェラール・フェルナンデスだった。

「ジェラールって、あの？」

「ハッピー、知ってるの？」

「知ってるも何も、コイツはエルザを殺そうとしたし、評議院を使ってエーテリオンを落としたりしたんだ！」

「…そうみたい、だね…」

「生きてたのか、コイツー！」

寂しそうにウエンデイは呟く。

ハッピーは意識が無いジェラールを強く睨みつける。

「この男は、亡霊に取りつかれた亡霊……哀れな理想論者だ。…しかし、うぬにとっては恩人であろう。」

「駄目だよ！絶対こんな奴復活させちゃ駄目だ！」

「聞いた所、コイツを復活していい所なんか一つも無い。…ウエンデイ、こんな哀れな男を復活させる事は無いぞ。」

ハッピーとユウトがウエンデイに説得するが、彼女は俯いたままだ。

彼女にとっては恩人。

ハッピーにとっては悪人。

復活させて良いのだろうか？と彼女は考える。

彼女の選択の長さに待ちきれないブレインは、手にナイフを取り出す。

「早くこの男を復活させぬか。」

ザツ!!

ブレインはナイフでジェラルルの腕に突き立て、鮮血が流れ出す。
それを見て、ウエンデイは泣きながら叫ぶ。

「やめてえー!!!」

泣き叫ぶウエンデイにブレインは杖を振り下ろすが、彼女を傷付けまいと咄嗟にユウトが彼女を庇い、背中に打撃を受ける。

「ぐっ」

「ユウト君!」

「大丈夫だ。…おいお前、女の子に手を出すんじゃないよ。」

ユウトは彼女を庇いながらブレインを睨みつける。

「たかが女一人対した事無い。」

「てめえ……！」

「…それより早く治せ、うぬなら簡単だろう」

「ジェラルルは悪い奴なんだよ!!ニルヴァーナだつて奪われちゃうんだよ!」

「…それでも私、この人に助けられた…。」

震え声で答える彼女の小さな拳の甲にポタポタと涙の雫が落ちる。

「大好きだった…」

「ウエンデイ…」

涙を流す彼女の目にはきつと、ジェラルルとの思い出が映されているんだろう。

そう思ったユウトはウエンデイの頭を撫でる。

「何か悪い事をしたのは噂で聞いたけど、私は絶対に信じない。」

「何言ってるんだ、現にオイラ達は…」

「きつと誰かに操られていたのよ!! ジェラルルがあんな事をする筈が無い!!」

思い出に囚われているウエンデイはジェラルルの悪行を強く否定する。

「お願いです! 少し考える時間をください!」

「ウエンデイ!」

ウエンデイはブレインに時間を要求する。

ブレインは考える時間を少しだけ与える事にするのだった。

「よかろう、5分だ。」

「…って事になってるんだよ」

《それは大変な事になりましたね…ウエンデイさんは今どうされているのでしょうか》

?》

「彼女、ジェラールに助けられた思い出があるらしくて、現在復活させるかどうか考え中。多分後数秒もすれば5分経つから決められるとは思うんだけど。」

《そうですね、分かりました。：あ、オラシオンセイスとジェラールについて少し此方で調べておきますね。》

「ああ、頼む」

ミントに通信機で話終えたユウトは、トイレから戻ってくる振りをしながら洞窟内へと戻ろうとしたその時：

「ハッピー!!ウエンディー!!ユウトー!!」

「ちよつと、敵がいるかも知れないのよ!?!」

ナツの呼び声を聞いたユウトは、ナツに視線を向けて両腕を上げ、振る。

「お、ユウト!」

(今敵いるから静かに!)

しかし、時既に遅し。

洞窟内にいる全員も呼び声に気付き、レーザーが洞窟内から飛び出して来る。

「うおっ…何今の」

ユウトを無視してそのままナツ達の方に音速で直進し、彼等を攻撃する。

「ぐああっ!!」

「ぐはあっ!!」

「ナツ、グレイ!」

「チツ、うぬは此方に来るんだ!」

「仕方ね…ええ?」

ブレインの呼び声に反応し、ユウトは洞窟内に向かおうとするが、彼の目には泣いているウエンディとハッピー、邪悪な笑みを浮かべるブレイン、寝息を立てるミッドナイトと、青年がもう一人。

「嘘…:だろ？」

「ごめんなさい…:」

「フツ、驚いたか。ユウトよ。」

「マジで復活させやがった…:」

目を丸くしながら彼は、*奴*の名を呼ぶ。

「——ジェラルル」

ウエンデイが復活させてしまった青年——ジェラルルの名を。

To Be Continued…:

第12話 ニルヴァーナ

「——ジエラール」

「選択肢に抗えなかったウエンデイは、結局ジエラールを復活させてしまった。

仕方の無い事だろう、ウエンデイの恩人である彼を復活させない訳にはいかなかったのだから。

ユウトにとっては見ず知らずの彼だが、彼によって与えられたエルザ達の苦しみを知っているユウトは、直ぐに身構える。

「俺はお前を見ず知らずだが、お前によって与えられたエルザ達の苦しみを知っている。」

「……………」

「申し訳無いが、お前をここで討たせて貰うっ！」

ジエラールに向かって飛びかかるユウト。

打撃しようと拳を強く握るが、突如上げられる雄叫びによってそれは緩む事となる。

「ジエラアアアル!!!」

「!?…ナツ!」

ナツが炎を纏う拳を握り、ジエラールに向かって飛びかかり打撃を試みるが、ジエラールから放たれる魔力によって吹き飛ばされ、同時に爆風によってユウトも吹き飛ばされる。

「うあああつ!!」

「くっ!」

「ナツっ!!ユウト!」

2人は壁に激突し、ユウトは爆風で吹き飛ばされた為か被害は背中を打撃しただけで済んだが、ナツは天井から崩れる瓦礫に埋まってしまう。

「相変わらず凄まじい魔力だな、ジェラール」

ブレインがジェラールに話し掛けるが、ジェラールによつて開いた足元の大穴に落ちてしまう。

「何!?!ぐおあああつ!!」

ジェラルルの凄まじい力に力尽きて気絶したウエンデイを抱えながらハッピーは号泣。

それに対して無反応で無言のままつかつかと洞窟を後にする。

「ジェラール!!何処だ!!」

「…彼奴なら行つたよ」

瓦礫からジェラルルの名前を呼びながら起き上がるナツに、ユウトは彼は既に洞窟を後にしたと伝えると、ナツは悔しそうに歯噛みする。

「あんにやろオー!!」

「彼奴が何者かは知らないけどね、今はウエンデイを連れて帰る事の方が重要でしょ？」

しかし出口を睨み続けるナツにシャルルは一喝する。

「エルザを助けたいんでしょ!？」

エルザを助けたい。

「分かってんよ!!行くぞハッピー!!」

「あいさ!!」

ジェラルルよりもエルザの治療を最優先する事を第一に、ナツはウエンデイ達を連れて脱出する。

「…俺は走って行けと」

エーラを持つ猫が居ないユウトは、彼等をここで待つ訳にも行かないので地面を凍らせてスケートのようにスイスイと着いて行った。

一方、取り残されたブレインはブツブツと呟いていた。

「計算外だ…いや、拘束具を外した私のミスか…。…しかし、以前の彼は私にここまでの敵対心は持っていないなかった筈だ…。眠っている状態でニルヴァーナの話を聞いていたとでも言うのか?」

ブレインはハツと思ひ至る。

「ジェラールめ、まさかニルヴァーナを独占する気か!?!…させぬ、あれは我々の物だ! 誰にも渡すものか!!」

彼は急がねばと言わんばかりにコブラに指令する。

「コブラ！聞こえるか!! ジェラルールを追え!! 奴の行く先に……ニルヴァーナがある!!」

通常、その声が聞こえる筈が無いが、コブラは特別耳が良いので遠く離れた声も聴こえるのだ。

「Ok、聴こえた。ついでにジェラルールの足音もな。」

その声を聴き、コブラは直ぐにジェラルールを追いかけて行つた。

一方、グレイは……

「なんて速さだ、野郎……」

「オレのコードネームは“レーザー”。誰よりも速く、何よりも速く、ただ走る。」

レーザーがグレイを音速で翻弄している間、頭上に飛んでいるナツ達の姿が見える
と、グレイ達はそれぞれ反応する。

「助け出したか!!」

「バ、バカナ!中にはブレインがいた筈だろ!?どうやって!?!」

「ブレインの目を盗んで脱出したんだよ」

地面を凍らせ、スイスイと歩きながらそう答えるユウトも合流する。

「クソ、行かせるかあ!!」

「させるかよ、//長距離狙撃氷銃”!!」

ユウトは造形魔法でスコープが取り付けられた銃を造り出し、レーザーに向けて発射する。

氷弾はレーザーの足に命中し、貫通までとは行かなかったが激痛でレーザーの攻撃は
当たる事は無く、ナツ達が墜とされる事は無かった。

「サンキュー、ユウト！」

「気を付けて行けよお!!」

ユウトに礼を行ってから、ナツ達はエルザ達の元へ一直線に飛び続ける。

ユウトも地面を凍らせてナツ達に着いて行くが、レーザーがユウトに近付いて攻撃を仕掛けるが、レーザーの先にグレイが立ちはだかる。

「アイスメイク…ランパート城壁”!!」

「ぐほっ!!」

氷で造られた城壁にレーザーは激突し、ユウトに近付けなくなる。

「グレイ…」

「ここは任せろ、ユウト。」

「だけど、今ので魔力を使ったんじゃ…」

「いいから行きやがれ」

グレイは氷壁越しに両手でユウトを庇う。

「ここは死んでも通さねえ!!行け!!エルザの所に!!」

「ああ、すまねえ…あんがと」

その言葉にユウトは礼を言いつつその場所から離れる。

止められたレーサーは怒りに染まりながらグレイに話し掛ける。

「貴様、2度もオレの動きを止やがって…」

「何度でも止めてやんよ、氷は命の“時”だつて止められる。」

そして、と彼は続ける。

「お前は永久に追いつけねえ。妖精の尻尾でも眺めてな。」

一方、ナツ達は空から地上に降り、ユウトと共にエルザ達がいる場所を探していた。

「エルザの所、分かるか？」

「分かんねえ」

「まあ仕方ねえよなあ」

エルザ達のいる場所に行けと言われたが、彼女等の場所が分からなければ辿り着けない。

このままさまよい続けていると、エルザの毒が全身に回ってしまうと言う事があるので時間があまり無いのだ。

「せめて、地図か何かあれば良いのに」

「そう簡単に見つかる訳……」

途方に暮れたハッピーの言葉にシャルルがそう答えた直後……

『ナツ君、ユウト君、聞こえるかい？』

「!?」

「この声…」

「僕だ、ブルーペガサスのヒビキだ。…良かった、誰にも“繋がらない”から焦っていたんだ。」

ユウトとナツの脳内にヒビキの声が響く。

「どうやら“念話”と言う魔法を使っているようだ。」

「何処だ!?!」

『静かに！敵の中に恐ろしく耳の良い奴がいるんだ。』

「コブラか…」

『そうだ。僕達の会話は筒抜けしている可能性があるから、君達の頭に直接語りかけているんだ。』

「成る程」

あまり大きい声を出すと彼等の会話がコブラに聞かれ、ユウト達の行動、作戦全てを知ってしまうと言う厄介な事になってしまう。

『ウエンデイちゃんは？』

「ここにいますよ」

『良かった！流石だよ』

ヒビキはウエンデイを取り戻せた事に安堵する。

ならば話は早い。

「これから、この場所までの地図を君達の頭にアップロードするから、急いで戻ってくれ。」

「何言ってる…」

『インストール100%。ダウンロード完了、地図を表示します。』

と言うアナウンスが流れた後、ナツ達の脳裏に地図が表示される。

これはヒビキの『アーカイブ古文書』だと思われるが、原作には無いアナウンスは多分ミントが喋っているのだろう。

「お、分かる分かる！」

「つーか元から知ってたみてえだ！…よし、今度こそ行くぞ！」

「あいさー!!」

「おー!!」

「もう、落ち着きが無いんだから…」

『急いで、みんな…』

数分後…

「到☆着」

「着いたー!!」

「ナツ！ユウト！みんな！」

到着を歓喜するルーシイの脇を通り過ぎ、ナツはヒビキの元へ向かう。

「どうなってるんだ!?!急に頭の中に地図が浮かんだり、声が聞こえたりしたぞ!?!」

(アナウンスはミントだぞ多分)

ユウトは心の中でナツにそう突っ込む。

しかし、今はそれどころでは無い。

「それより早くウエンデイちゃんを…」

「そうだ!! 起きろウエンデイ!! エルザを助けてやってくれー!!」

「落ち着いてナツー!」

ルーシイの突っ込みを挟みながら、ナツがウエンデイを起こしている間、ユウトはエルザに視線を向ける。

彼女は全身とまでは行かないが既に大半の毒が体に回っていて、死んでも可笑しくない状態と言っても過言では無いだろう。

しかしもう少し遅れていたら、エルザの命は無くなっていた所だろう。

「ひっ…!」

甲高い悲鳴が聞こえ、ユウトは声が聞こえた方に視線を向ける。そこには気絶から目を覚まし、必死に謝るウエンデイの姿が。

「ごめんなさい…私…」

「今はそんな事どうでも良いんだ!! 毒蛇にやられたエルザを助けてくれ!! 頼む!!」

土下座でウエンデイにそう頼み込むナツ。

他の者達もウエンデイにエルザの治療を頼み込む。

「オラシオンセイスと戦うにはエルザさんの力が必要なんだ。」

「お願い、エルザを助けて…!」

「お願い、ウエンデイ」

「ウエンデイ、頼む」

此処まで言われて拒否する訳が無いと、ウエンデイは承諾する。

「も、勿論です! はい! やります!」

「よしー！」

ウエンデイは早速エルザの解毒治療に取り掛かる。

(ジエラールがエルザさんに酷い事をしたなんて…)

そう思いながら、彼女は治療に専念する。

(それにしてもこいつ、心の声が全く聴こえねえ…心の声さえ聴こえれば後をつける必要もねえのに…：：：止まったぞ)

岩裏に隠れながらコブラはジエラールを監視していた。

彼が止まった先には、鎖に繋がれ、他の木とは違って光を放っている樹木が。

(まさかブレインの言った通り、ここにニルヴァーナが…)

ジェラルドは樹木に手を翳すと、樹木は爆発し、ビーコンのように上空にむかって光を放つ。

(ついに見つけた…オレ達の未来…!!)

「終わりました、エルザさんの体から毒は消えました。」

「お疲れ！」

毒が完全に消滅し、エルザの顔色が良くなっていくのを見て、全員、歓喜の声をあげる。

「おっしやあ!!」

エルザの回復を喜び、ナツ達はそれぞれ互いに手を合わせる。

「ルーシイ、ハイタツチだ！」

「良かったあ！」

「ユウトもハイタツチだ！」

「おう！」

「シャルル〜！」

「1回だけよ」

「ウエンデイ！俺とハイタツチだ！」

「オレも！」

パンツ！と、乾いた音が響く。

「ありがとな！」

「…暫くは目を覚まさないかもですけど、もう大丈夫ですよ。」

「凄いね、本当に顔色が良くなってる。これが天空魔法…」

「顔！顔！」

「…良いこと？これ以上、天空魔法をウエンディに使わせないで頂戴。」

シャルルは全員に注意する。

ウエンディの魔力をこれ以上使わせて欲しく無いからだろう。

「私の事は良いの。それより私…」

「ジェラルルを助けてしまった」と言おうとしたが、その前にヒビキが口を開く。

「後はエルザさんが目覚めたら反撃の時だね」

「だな」

「うん！打倒オラシオンセイス！」

「おー!!ニルヴァーナは渡さないぞお!!」

全員が気合いを入れている中、樹海から光の柱が上がる。

「何!?!」

「黒い光の柱…」

「まさか!？」

「あれは…」

——ニルヴァーナ。

ニルヴァーナ編は遂に、中盤戦へと突入するのであった。

To Be Continued…

第13話 もう1人の星使い

——ニルヴァーナ。

樹海から上がる黒い光の柱に全員、目を見開きながら視線を向ける。

「ニルヴァーナなのか!？」

「まさかオラシオンセイスに先を越されたの!？」

「発動したって事は、そう言う事だな」

全員が驚愕する中で、ニルヴァーナを見続けながらナツが呟く。

「あの光に…ジエラールがいる!!」

「ジエラール!?!…ナツ!ジエラールってどういう事!？」

「私の所為だ…私の…」

ジェラールが居る事を確信し、ナツはルーシイの質問を聞き流し、ニルヴァーナに向かって一直線に駆け抜ける。

それを聞いたウエンデイは自分の所為なんだと自責する。

「会わせる訳にはいかねえんだ、エルザには!!…彼奴はオレが、潰す!!」

ナツはそう呟きつつ、ジェラールが居るニルヴァーナの元へ一直線に向かって行った。

——エルザにその言葉が聞こえてしまっている事も知らずに。

一方、ニルヴァーナに視線を向けていたイヴとレンは…

「あの光、何だろう?」

指でニルヴァーナを指し示しながらイヴが言う。

レンは黒く染まった木を見て答える。

「見ろよ、あの不気味な『黒い木』から何かが流れ出てる。…あの光に吸い寄せられているんだ。」

「どういう事何だろう…?」

光から『黒い木』が吸い寄せられている…?

「まさかあの光の場所にニルヴァーナが!？」

「だとしたら誰かがもう見つけたって事!？」

「連合軍か、オラシオンセイスのどっちだ…?」

「とりあえず僕はウエンディちゃんの救出に専念するよ!」

「分かった、オレはあの光に向かってみる事にする。気を付けるよ!」

2人はそれぞれの場所に向かう為、それぞれ別れた。

「ナツを追うぞ！」

「ナツ、ジェラールって言って無かった？」

ナツの言葉が脳裏を過る。

ナツは確かにジェラールと言っていたが…

「説明は後だ！兎に角今はナツを…」

ユウトがルーシイに説明している暇は無いと追跡を急かそうとしたその時…

「あー!!!」

ユウトの言葉を遮るようにシャルルの叫び声が聴こえる。

何だ何だとユウトはシャルルの方に視線を向ける。

「エルザが居ない!!」

シャルルが見ている場所に横たわっていた筈のエルザの姿が見当たらないのだ。彼女はユウト達の目を盗み、何処かに行ってしまったのだろう。

「何なのよ、あの女！ウエンデイに礼も無しで何処をほっつき歩いてるのかしら！」

「もしかして、ジェラルルって名前聞いて……」

「さつきエルザ目開けてたから可能性はあるな。」

「じゃあ何で止めなかったのよ！」

「気付いたら居なかったんだよ、仕方無いだろ！」

ユウトとシャルルが言い争っている中、ウエンデイのマイナスな感情はどんどんエスカレートして行く。

「どうしよう、私の所為だ……私があの時ジェラルルを治した所為で、ニルヴァーナ見つかっちゃって、ナツさんや……エルザさんや……」

ぶつぶつとそう自責するウエンデイに、ユウトは落ち着かせようと駆け寄る。

「ウエンデイ、お前の判断は間違っちゃいない。…お前は恩人を助けたい思いで助けたんだろ？自責する事なんて一つも無いじゃないか。」

「でも、私が助けた所為で…」

「そうマイナスに考えるな。」

ユウトはウエンデイの頭に手を置き、その場にしゃがむ。

「さっきは復活なんかさせるなって言ったけど、過ぎた事はしょうがない。…過去は取り戻せないんだからな。」

「……………」

「過去は取り戻せない。けど、お前がもし彼奴を復活させて無かったら、お前は今頃、後悔と悲しみの涙を流しながら泣き崩れてただろうな。」

「後悔と、悲しみ？」

「ああ。彼奴が死んでしまったって言う悲しみと、復活させておけば…って言う後悔。

…でも、お前はジェラルルを復活したおかげで、その後悔と悲しみが無い。『今』を生きてるんじゃないか？」

「『今』…」

ユウトはウエンデイの頭に置いた手で、彼女の頭を擦る。

「お前はハッピーエンドを迎えられる事をしたんだ、自責する事なんか無い。…寧ろ喜ぶんだ。」

「喜べる状況じゃないでしょ」

「へへ、まあな」

ウエンデイの先程まで暗かった表情が明るくなる。

「…そうだ、ね。私がネガティブに考える事じゃ無いもんね。…ジエラールを復活させて良かったんだ。…何で自責なんかしたんだろ」

次第にウエンデイの目から涙が流れる。

「ありがとう、大事な事に気付かせてくれて。」

「礼は良いよ。…俺はただ落ち着かせようとしただけだよ。」

「格好付けピーマン」
「るせーな」

ハッピーの茶々にユウトが顔を赤らめながら否定する。
それを見て、ウエンデイは笑いながらその場に気を失う。

「ウエンデイ!!」

「…疲れただけ、心配は要らないよ。」

ユウトの言葉にシャルルは「そう…」と安堵する。

「これで一先ず安心だな。」

「最悪、僕が魔法を使って気絶させる所だったけど、ユウト君が落ち着かせてくれてとても助かったよ」

「いやいや、ただこのままだと危ないなと思ってやっただけだから、礼は良いよ。」

「また格好付けた」

「ハッピー後で覚えてろよ」

「ごめんなさい」

ハッピーとユウトのやりくりにルーシイ達は笑い出す。

その後、ヒビキがユウト達に話掛ける。

「それより、ナツ君を追い掛けなきゃ」

「そうだな。」

「ニルヴァーナも出てきてるしね。」

「行くぞー!」

『オー!!』

全員声を出し、ナツを追い掛けたつニルヴァーナへと向かう。

「で、ニルヴァーナって何?」

ユウトの訊きにヒビキが反応する。

「僕が説明するよ。…簡単に言えば…光と闇を入れ替える魔法だ。」

「光と…」

「闇を…」

「入れ替える!？」

驚きの反応をする彼女等にしかし、とヒビキは続ける。

「それはまだ最終段階。まず封印が解かれると黒い光が上がる。」

「あの光の柱か」

ユウトの言葉にヒビキは相槌を打つように頷く。

「手始めに、黒い光は光と闇の狭間にいる者を逆の属性にする。強烈な負の感情を持った光の者は、闇に落ちる。」

「ウエンデイの自責も?」

「ああ、『自責の念』は負の感情だからね。もしユウト君が落ち着かせて無かったら、ウエンデイちゃんは闇に落ちていたかもしれない。」

もう一度、ヒビキはユウトにありがとうと言うと、ユウトは相槌を打つ。

あのままユウトがウエンデイを落ち着かせて無かったら、ウエンデイは闇に落ちていただろう。

「ちよつと待つて!!それじゃ『怒り』は!?!ナツもやばいつて事!?!」

「何とも言えない…。その怒りが誰かの為ならそれは負の感情とも言い切れないし」

「それにエルザの為の怒りだと思われるから、多分彼奴が落ちる事は無いと思うけど…」

ルーシイの質問にヒビキとユウトが答える。

ナツの怒りは負の感情では無い（確証は無いが）と思われるので大丈夫だろうが、安心はできない。

此処までの話を聞いてハッピーは頭を抱える。

「どうしよう、意味が分からない」

「あんた馬鹿でしょ。」

「要するに、ニルヴァーナの封印が解かれた時、正義と悪とで心が動いている者の性格が変わるって事だ。」

「それが僕がこの魔法について黙っていた理由だ。人間は物事の善悪を意識し始めると思いもよらない負の感情を生む。」

——あの人さえ居なければ……

——辛い思いは誰の所為？

——何で自分ばかり……

「それらの負の感情全てがニルヴァーナによりジャッジされるんだ。」

要するにネガティブになりすぎると鬱になると言う事だ。

「そのニルヴァーナが完全に起動したら、あたし達みんな悪人になっちゃうの？」

「でもさ、それって逆に言う闇ギルドの奴等は良い人になるって事でしょ？」
「そう言う事も可能だと思う。」

ただ、とヒビキは続ける。

「ニルヴァーナの恐ろしさはそれを意図的にコントロール出来る点なんだ。」

「マジか」

「例えば、ギルドに対してニルヴァーナが使われた場合…仲間同士での躊躇無しの殺し合いや他ギルドとの理由無き戦争…そんな事が簡単に起こせる。」

「それってつまり…」

「ああ。一刻も早く止めなければ、光のギルドは全滅するだろう。」

そうなれば大陸中否、世界中が闇に染まってしまう。

しかもここは統合世界。

ヒーロー達がニルヴァーナによって闇に落ちてしまっただけはもはや誰にも止める事は出来ない。

「急ごう！」

そう考えると尚更早く止めなければいけないと考え、ユウト達はニルヴァーナへと向かう。

一方、ナツはジェラルルのいるニルヴァーナへと向かっていた。

「ジェラルル!!首洗って待つてろよー!!…ん?」

ジェラルルを追う途中、川に溺れて浮かぶ人を見つける。

その人をよく見てみると、なんと 그레이が川に浮かんでいたのだ。

「 그레이!?!…お前何やってんだよこんな所で!てかあの速えのどうなったんだ?」

ナツが 그레이にそう訊くが、彼が反応する様子は無い。

彼は本当に溺れてしまったのだろうか。

「お、おい……」

ナツはニルヴァーナを睨んで舌打ちをする。

急がなければジェラルルがその場を去ってしまうだろうと思っただろう。

「つたくよ、此方は急いでんだっつーの！……起きろ、馬鹿！」

ナツがグレイを起こすと、彼は罨にハマったなど言わんばかりの表情でナツを見る。

すると、水面からイカダが姿を見せ、木に巻いてあったロープが外れ、イカダが水流に流される。

ナツが乗り物嫌いと言う事を利用した罨のようだ。

「お……乗り……も……おぷ」

「かかったなナツ、確かお前の弱点は乗り物だ。」

「お、おま……」

グレイは氷で槍を作り、それをナツに向ける。

「あばよ、ナツ……死ね」

氷の槍がナツに振り下ろされる瞬間、氷の流れ弾によつて槍を手から離させ、攻撃を阻止する。

グレイは弾を撃つてきた方向に視線を向ける。

「あぶねえ、『アイススコープ』が無きや死んでたな」

「間一髪だったわね……」

ユウトの『超距離狙撃氷銃』により、グレイの攻撃を間一髪阻止させたのだった。

「氷竜のユウトか……ドラゴンスレイヤーとしての実力はかなりあるようだが、アイスメイクの実力はまあまあだな」

「何言ってるんだ、お前」

初対面のような反応に、ユウトは首を傾げる。

「グレイ、まさか闇に落ちたの？」

「…グレイから見たルーシイ。フェアリーテイルの新人、ルックスはかなり好み、少し気がある」

「はあ？な、何よ？」

グレイとルーシイのやり取りの隙を狙い、ハッピーはナツの救助に向かうが…

「フン」

カキンツ！

「ぎゃつ!!」

グレイの魔法によって氷漬けにされ、地面に落ちる。

「オスネコ！」

「ハッピーは何すんのよ!？」

「ハッピーは空を飛ぶ、運べるのは1人、戦闘力は無し…情報収集完了」

「情報収集？」

「それに、ルーシイは見た目によらず純情、星霊魔導士…へえ、星霊ねえ…面白い！」

グレイがルーシイに向かって魔法を放つが、それはユウトによって止められる。

「お前、グレイじゃないな」

「え？グレイじゃない？」

ユウトの言葉にルーシイが目を見開く。

「だって明らかに情報収集とか訳分からん事言ってるから分かるっしょ？」

「まあ確かに、怪しい気がするけど…」

「で、誰なんだ？」

すると、グレイの体から煙が上がり、煙が晴れると、姿がルーシイへと変わっているのだった。

「あ、あたし!!」

「君、頭悪いだろ？僕達が分かっている時点でルーシイさんに変身しても騙されないよ」
ヒビキは睨みながら偽ルーシイにそう言うが…

「そうかしら？あんたみたいな男は女に弱いでしょ？」

そう言った後、偽ルーシイは上着を脱ぎ、上半身を晒す。

「おおおお!!」

「俺はまだ小学生だ見てはいけない」

「きやああああ!!」

ヒビキは目を見開き、ユウトは自分の目を手で隠し、ルーシイの星霊であるサジタリ

ウスも目を見開き、ルーシイは絶叫する。

「星霊情報収集完了…へえ、凄いなあ…」

ニヤリと微笑する偽ルーシイに何かを察し、キュイイインとアイススコープをチャージする。

「サジタリウス、お願いね」

偽ルーシイがそう命令すると、サジタリウスがヒビキに向かって矢を発射するが、事前にチャージしたアイススコープによって粉碎する。

「ルーシイ、早急にサジタリウスを強制閉門するんだ！」

「え？」

「早く!!」

「サジタリウス、強制閉門!!」

「申し訳無いですからして、もしもし……」

ルーシイの強制閉門によって、サジタリウスが星霊界へと戻されるが…

「開け、人馬宮の扉… “サジタリウス”!!」

「お呼びでありますか、もしもし……って、あれ?」

偽ルーシイによってサジタリウスが召喚されてしまうのであった。

「えええっ?!」

向こうも呼べてしまうと言う状況にルーシイは目を見開く。

偽ルーシイは気絶したウエンディを運び、避難するシャルルに指を指す。

「あの飛んでる猫射ち殺して!」

「いや…しかし、それがしは…」

無理な命令にサジタリウスも流石に従う事はできない。

しかし無理矢理射たされてしまう可能性もある為、ルーシイは強制閉門を試みる。

「強制閉門!!」

「無理よ、あたしが呼んだ星霊だもん。」

「そんな…」

しかし、今いるサジタリウスは偽の方のサジタリウス。

本物が強制閉門する事は事実上不可能なのだ。

「早くあの猫射って!」

「うぐ…」

遂にサジタリウスの抵抗が難しくなり、偽ルーシイの命令に沿ってシャルルを射とうと弓を構える…その時だった。

「もう良いゾ。ニルヴァーナが発見されたからもうあの餓鬼の役目は終わってるゾ」

近いて来る足音と共に女性の声が聞こえる。

その声が聞こえた途端、偽ルーシイはそっか、と言った直後に煙と化し、変身を解いたであろう双子の小人に姿を変える。

それと同時に偽ルーシイによって召喚されたサジタリウスも星霊界へと戻される。

「ピーリッ！」

「ピーリッ！」

「はい、ルーシイちゃん、エンジェルちゃん参上だゾ」

「！オラシオンセイイスか！」

オラシオンセイイスの1人、〃エンジェル〃。

先程エンジェルの姿を見ていた為、直ぐにオラシオンセイイスの1人だと分かった。

「その子達は双子宮の〃ジェミニ〃。私が召喚したんだゾ。」

「お前が召喚した…と言う事は…」

「そう。私もルーシイちゃんと同じ星霊魔導士だゾ」

星霊魔導士のルーシイと同じく星霊魔導士のエンジェル。

次回、星霊魔導士同士の戦いが繰り広げられる！

To Be Continued...

第14話 星霊合戦

「私も同じ、星霊魔導士だゾ」

そう彼等に自己紹介をするのは、オラシオンセイスの1人、*“エンジェル”*。
彼女に対する反応は様々。

オラシオンセイスの1人と言う事もあつてか、威嚇する者。

双子の小人……*“ジェミニ”*を見る者。

そして、彼女が星霊魔導士だと言う事に驚愕する者がいた。

「あの、そのの小人達は？」

「この子達はさつきも言った通り双子宮の*“ジェミニ”*のジェミーとミニー。…他人に変身して、その人間の容姿や能力、更に思考まで全てコピーできる有能だゾ。」

「え？ジェミー？」

「ジェミー！」

「ごめん、デイ○ニーかと思つてて」

「???

エンジェルが得意気に説明すると、ユウトが何故かデイ○ニーのポケを入れる。
ミニーがいたから、と言う事らしい。

閑話休題。

「成る程、そいつ等を使って俺達の情報を収集してたのか」

「てか貴方、随分と偉そうな口叩くね、礼儀を知らないのかゾ？」

「う…」

凶星だ。

格好付けたいからとは流石に変な目で見られるから言いたく無い。

ここはどう解釈すれば…？

「ユウトが馬鹿だから」

「○す」

「あ…？」

「(づ)めんなさーご」

ルーシイの解釈に、ユウトはとても恐ろしい反応をするが、ルーシイがもつと恐ろしく反応をしてきたので直ぐに謝罪する。

(あれ?こんなに怖かったつけ?…とりあえず、ナイス解釈!)

「ルーシイちゃんキレた?」

「恐らくこれはルーシイちゃんの第2の人格だね」

「うっさい!…とりあえずエンジェルを倒すわよ!」

ルーシイは金色に輝く黄金の鍵を手に取り、川の水を利用し、星霊を召喚する。

「開け、宝瓶宮の扉…『アクエリアス』!」

詠唱後、水の中から瓶を抱えた水色のロングヘアーの人魚が姿を現す。

「みーんな巻き込んで良いからやっちゃって!」

「最初からそのつもりだよ!!」

「最初からって…」

彼女の能力で最初から全員を巻き込む気だったらしい。

ルーシイを見た後、アクエリアスは背後にいるユウトに視線を向ける。

「なんだいこの貧弱そうなガキ」

「初対面ですよね!!?」

「もの凄い貧弱なのよ」

「おーい、なに嘘を広めとんじやい」

「しかもそいつ、偉そうなんだゾ」

「後で説教が必要だね」

「勘弁してもう」

4人のやりくりの後、アクエリアスは抱えている瓶を持ち、振り上げる。

「全員纏めて、吹っ飛びなアア!!」

それに対し、エンジェルは冷静にジエミニを閉門し、星霊を召喚する。

「開け、天蠍宮の扉…」

「え？」

「天蠍宮」と言う単語に瓶を振り上げる所だったアクエリアスが反応し、手を止めた。

「スコープオン！！」

「ウイーアー！！イエイ！！」

召喚されたのは、蠍サソリの尻尾……型のキャノン砲？を持つ、髪色が紅白に別れているテ
ンション高めな男性の星霊、スコープオン。

女子の集団が出来そうな程のイケメンだ。

……そのスコープオンの姿を見たアクエリアスは、抱えていた瓶を下ろし…

「スコピーオおおん♡」

「はいっ!!?」

「乙女に、なつとる……」

アクエリアスは、先程までツンツンしていたのがまるで嘘のように乙女のような一面を見せる。

オーナーであるルーシイまでもが驚愕しているので、あの姿を見るのは初めてなのだろう。

「ウイーアー、元気かい? アクエリアス」

「私…寂しかったわ…ぐすぐす」

ルーシイはまさか、と思い、アクエリアスに訊ねる。

「まさか……」

「私の彼氏♡」

「ウイーアー、初めまして、アクエリアスのオーナー。」

「キターーー!!」

「リア充キターーー!!」

ユウトとルーシイが叫んだ後、アクエリアスが血相を変えて顔を此方に向ける。

「スコープオンの前で余計な事言ってみろてめえと、ついでに偉そうなガキ…お？水死体にしてやるからな…？」

「はい…」

「なんか俺の扱い酷くね？…まあとりあえず、はい…」

アクエリアスの恐ろしい表情に、ルーシイ達はビビって何も言えなくなってしまう。

その後、アクエリアスはまた態度を変え、スコープオンの元に戻る。

「ねえん♡お食事に行かない？」

「オーロラの見えるレストランがあるんだ。…ウィーアー、そう言う訳で帰っても良いかい？エンジェル」

「どうぞ」

「ちよ、ちよつと!!アクエリアス!!待って!!」

「…行っちゃった」

「いやー!!!」

スコープオンとアクエリアスは、2人仲良くしながらデートに行く為、星霊界へと帰ってしまった。

「星霊同士の相関図を知らない小娘は、私には勝てないゾ」

エンジェルはそう言い、ルーシィに攻撃するも、ユウトが阻止した為に攻撃が外れる。

「おつと…レディーに傷を付けるわけにはいかねえぜ」

「格好付けは良いけど、ありがと」

「最初のが余計ですね…。まだ星霊出せるか?」

「最強のアクエリアスが封じられたし…いや、もう1人いるじゃない!!最強の星霊が!!」

ルーシイは直ぐに黄金の鍵を取り出し、星霊を召喚する。

「開け!!獅子宮の扉!! “ロキ”!!」

「王子様参上!!」

眼鏡を着用したイケメンの男性星霊、 “ロキ” が参上した。

「レ…レオ…」

ヒビキが掠れながら彼の名前を溢す。

どうやら、彼との面識はあるようだ。

「お願い!!彼奴を倒さないとギルドが!!」

「お安い御用さ」

余裕を溢すロキ。

しかし、エンジェルは動じないどころか、笑みを浮かべていた。

「クス…大切なのは相関図だって、言っただけだった？」

そう言いながら、彼女は黄道十二門の鍵を取り出し、召喚する。

「開け、白羊宮の扉、 “アリエス” !!」

「ごめんなさい、レオ」

そうレオに謝る女性星霊、 “アリエス”。

召喚された彼女に、ユウト以外の3人が驚愕する。

「アリエス…」

「 “カレン” の、星霊…」

知らない人の為に説明すると、ロキは以前、 “カレン” という名の気性の激しい星霊魔導士に仕えていたが、カレンの素行の悪さが見るに堪えないと言う理由で、ロキは彼

女に契約の解除を求めるも、彼女は頑なに反省の態度を見せないの、ロキが魔法を封じ、彼女が反省するまで星霊を呼び出せないようにした。

それから月日が経っても反省しないまま、カレンは死亡してしまったと言う過去があった。

そう言う事もあって、ロキとアリエスは只ならぬ関係である為、ロキにとって、アリエスにとって、戦いづらい相手である。

「何であんたがカレンの星霊を!?!」

「私が殺したんだもの。これはその時の戦利品だゾ」

「あう」

エンジェルはアリエスの頭を叩きながら、自慢気にそう答える。

彼女を物として扱うエンジェルに、ユウトは僅かに表情を歪めた。

「折角会えたのに…こんなものって…閉じ」「みくびらないでくれ、ルーシイ。」っ…」

閉門しようとするルーシイの手を止める。

「例えかつての友だとしても…所有者オーナーが違えば敵同士、主の為に戦うのが星霊。」
「例え恩ある相手だとしても、主の為なら敵を討つ。」

2人は互いの顔を見合い、構える。

「それが僕達の…」「それが私達の…」

「誇りだ!!」「誇りなの!!」

お互いそう叫び、殴り合いが始まる。

——例えどんな関係であろうが、互いの誇りの為に、戦う。

「あつれ〜?やるんだあ?…ま、これはこれで面白いから良しとするゾ」
(違う…こんなの間違ってる…)

星霊を愛するルーシイにとって、とても辛い光景だろう。

そして…

「…流石に戦闘用のレオ相手じゃ分が悪いか…」

エンジェルが鍵を取り出し、2体目の星霊を召喚させる。

「開け、彫刻具座の扉…『カエルム』」

『カエルム』と言う名前の星霊を召喚したエンジェルは、戦い合うレオとアリエスに向け、カエルムに命令する。

「やれ」

合図と共にカエルムから光線が発射され、2人に直撃する――。

「アイスメイク…シールド 盾 “!!”」

直前、ユウトの造形魔法によつて造られた盾により、なんとか攻撃を回避。あと一步遅ければ、3人共カエルムの光線によつて貫かれていたであろう。

「チツ、餓鬼のくせに…」

「仲間まで巻き込もうとするお前こそ餓鬼じゃねえか」

「…煩い、アリエス閉門！」

エンジェルが閉門させた事により、消えていくアリエス。必死に手を伸ばすロキを見て、アリエスは微笑みながら…

「レオ、良い所有者オーナーに会えたんだね…良かった…」

そう言葉を残し、彼女は星霊界へと帰って行った。

「…お前、星霊をなんだと思ってるんだ？」

「何が? どうせ星霊なんて死なないんだし、いーじゃない」

その言葉を聞いたルーシイは…

「でも痛みはあるんだ…、感情だってあるんだ。…あんたそれでも星霊魔導士なのっ!?!」

“星霊” と言う無くてはならない存在を踏みにじる彼女に、ルーシイがそう叫ぶ。

ユウトも、エンジェルに語り出す。

「星霊は道具なんかじゃねえ、所有者オーナーに仕える関係だけど、信頼や尊重をしあつて、愛を持って接する…それが出来てこそ、 “星霊魔導士” だろ?…お前はただの “星霊を操る者” なんだ、分かるか?」

「煩い、煩い!! カエルム、撃ちまくって!!」

ユウトの言葉が届く事も無く、エンジェルはユウトに集中放火を食らわせる。

ユウトは彼女の攻撃に氷の盾で防ごうとするが、未熟である為、光線が氷を貫いて、後ろにいるロキに当たってしまった。

「ロキ!!」

「すまない……!」

ロキは彼等に謝罪した後、星霊界へと帰ってしまった。

直後、ルーシイが地面に膝をつく。

「あれ……?体が……」

「たいして魔力も無いくせに星霊をバンバン召喚するからだゾ」

ルーシイが魔力切れを起こしてしまった。

エンジェルが言った通り、魔力の消耗が大きい黄道十二門の星霊を次々と召喚したので仕方が無い。

エンジェルはジェミニを召喚した後、ジェミニをルーシイに変身させ、魔力切れのルーシイに向かって攻撃を仕掛けるが、ユウトが阻止。

「……は俺がなんとかする」

「ありがとう」

「丁度良いゾ、このままお前も殺されるが良いゾ」

剣型のカエルムを持つジエミニの攻撃を耐え続ける。

しかし、ユウトはまだ小学生。

徐々に魔力切れも近づき始める。

（徐々に魔力切れも近くなってきた……このままだと俺とルーシイがエンジェルに殺される……！）

ユウトの魔力が切れる……その時だった。

「アリエスを解放して。」

「は？」

ルーシイがエンジェルにアリエスの解放を要求する。

「あのコ…前の所有者に*オナ*いじめられてて…」

ジエミニは剣型のカエルムを振り上げ、ルーシイの腕を切り裂く。

「きゃあああああつ!!」

「ルーシイ!!」

傷口から走る想像以上の激痛にルーシイは大きく悲鳴をあげる。

「人にものを頼む時は何て言うのかな？」

「……お、お…願ノい………します………ロキレオと一緒に居させてあげたいの………それができるのは………あたしたち星霊魔導士だけなんだから…」

魔力切れでありながらも、ルーシイは星霊の事を想って、涙を流しながらエンジエルに頼み込む。

「……タダで？」

「何でもあげる…鍵以外ならあたしの何でもあげる!!」

「じゃあ、命ね。…ジエミニ、やりなさい!」

元々ルーシイの頼みなど聞きもしていなかったエンジェルは、ジエミニに命令する。

——が…

「ジエミニ?」

ジエミニは剣型カエルムを振り上げたまま、攻撃せずに震えていた。

「綺麗な声が…頭の中に響くんだ。」

——ママ、あたし星霊大好き!

——星霊は盾じゃないの!

——目の前で消えていく仲間を放っておける訳無いでしょ！

ジェミニの記憶には、星霊を大切に想うルーシイの数々の言葉が浮かんでいた。それらの記憶を見たジェミニの目から涙が溢れる。

「出来ないよ……ルーシイは心から愛しているんだ、ほくたち星霊を。」

ジェミニは涙を流しながら言い放つ。

ジェミニにとって、自分達……星霊を想うルーシイを殺せる筈がないのだ。

「ジェミニ……」

「消えろオ!!この役立たずがつ!!」

ルーシイを殺さなかったジェミニに憤怒したエンジェルは彼等を強制閉門させる。消えていくジェミニを見送るルーシイの元に、ゆらゆらとヒビキが近づいていく。直後、ルーシイの首筋を掴む。

「え？」

「ヒビキ、お前……！」

ヒビキは不敵な笑みを浮かべる。

もしかして闇に落ちたのでは無いのだろうか？

「まさか……!!闇に落ちたのかこの男!!あは、あははは!!」

「ヒビ……キ……」

彼が闇に落ちたと思われるその時、ヒビキの手が首筋から頭部に動き出す。

「じつとして。…古文書^{アーカイブ}が君に1度だけ、超魔法の知識を与える。」

彼がそう言った直後、ルーシイの脳裏に様々な情報が流入する。

「うあ!?!……こ、これ……何……!?!……頭の中に、知らない図形が……」

(危なかった……もう少して僕は闇に落ちる所だったが……君と星霊との絆が僕を光で包

んだ…君なら、この魔法が…)

「おのれエ〜っ!!カエルム、やるよ!!」

「させるか!!」

エンジェルがルーシイを攻撃しようとするが、ユウトの攻撃によって不発に終わる。

「今だ!!」

「頼んだ…ルーシイ…!」

2人の合図の後、ルーシイの口が開き始め、呪文が詠唱される。

「天を測り、天を開き、あまねく全ての星々。…その輝きをもつて我に姿を示せ…。…テ
トラピプロスよ…我は星々の支配者。…アスペクトは完全なり、荒ぶる門を解放せよ。」

エンジェルの周りが光に包まれる。

「な、何よこれ!?!ちよっ…!」

「全天88星……光る!——ウラノ・メトリア!!!」
「きゃあああああつ!!!」

ルーシイの放つ超魔法は、光を放ちながらエンジェルを撃破する。

「すげえ……」

「!?……え?……あれ?」

ユウトは光に感動し、ルーシイははつと我に帰る。

どうやら、彼女は超魔法発動時の出来事を覚えていないようだ。

「ルーシイ、お前すげえぜ!」

「え?……え?何?」

「さっきの『ウラ何とか』ってヤツ……覚えてないのか?」

「……気付いたらエンジェルがボロボロになって落ちてきたから……あ、そうだ!ナツ!」
「すっかり忘れてたわ……ハハ」

——と、その時。

ザバア!!

「!?」

「負け…ない…い…ゾ…。オラシオンセイス…は…負け…ない…!」

あれだけの超魔法を受けても尚、エンジェルはよろよろになりつつも立ち上がったのだ。

「彼奴…まだ動けたのか!？」

「もう体に…力が…!」

魔力がもう無い2人にとって、非常にピンチ。

もう彼奴には勝てないのだろうか…？

エンジェルはカエルムを構え、光線を発射する。

「一人一殺…朽ち果てろオ!!」

光線はユウトとルーシイに向かって進み、2人の身体を貫通――、

――すると思いきや、2人から光線が逸れ、横に立っていた木に直撃し、ナツが乗っている筏が流される。

どうやら、カエルムもルーシイの星霊を想う心に打たれ、わざと攻撃を外したのだ。

「は、外した…!?!」

「カエルムも星霊だからな、心打たれたんだらうな。…つて、ナツ!!」
「止めなきゃ!!」

ユウトとルーシイがナツを止めに筏に向かう。

一方、エンジェルは…

――私の祈り…天使のように…空に消えたい…

「——って、水の中かい」

空に消えたいのに水の中と言う納得の行かぬまま、気絶していった…。

To Be Continued…

※因みにユウト達は激流に吞まれました（無事です）

第15話 破滅の行進

5話毎前回までのあらすじ

ハッピーエンドを目指す為、統合世界に転生した小学生ユウト。

FAIRY TAIL編の世界で、彼は3つ目の目標を達成すべく、オラシオンセイアの討伐に参加。

その中の1人、エンジェルをルーシイの全魔力を込めた超魔法で撃破する。物語は愈々、後半戦へと足を進めるのだった。

「——ん？」

気絶していたユウトの意識が覚醒する。

目覚めた場所は樹海の中。

エンジェル戦後、ナツを筏から降ろそうとして、激流に流されてからの記憶が無い。

「滝壺に落ちて…気を失ったのか」

ユウトは周りを見渡すが、ナツとルーシイの姿は見当たらない。

「はぐれたなこりゃ」

ナツとルーシイとは別の場所に流され、2人とはぐれてしまったようだ。

原作のようにはいかな……

「——あれ？」

ユウトは何かの違和感を感じた。

「思い出せない」

ユウトはそう言い、記憶の中から“何か”を探し出す。

「思い出せない、思い出せない、“あれ”が思い出せない！」

——妖精の尻尾での思い出？

「違う」

——統合世界に入った理由？

「違う！」

——ミントと会った時の思い出？

「違う!!…俺が無くしたのは…」

—— “前世” の記憶が無くなったんだよ…

「何で？…何で無くなったんだ？頭を強打したから？俺が馬鹿だから？…何で…！」

『強烈な負の感情を持った光の者は…闇に落ちる』

『“自責の念”は負の感情だからね。もしユウト君が落ち着かせて無かったら、ウエン
デイちゃんは闇に落ちてしまったかもしれない』

「駄目だ、マイナスに考えるんじゃない…：…闇に落ちたらどうするんだ…？」

ヒビキの声が脳裏を過り、何とか闇に落ちずには済み、深呼吸をして冷静になる。

「…とりあえず、落ち着いてミントに連絡しよう。…彼奴なら何か分かるかもしれないな

い。」

ユウトは通信機を取り出し、ミントに連絡を入れる。

《はい、貴方の為のミントです！》

「…は？」

急に一夜を真似たような台詞に一瞬首を傾げるが、ユウトは直ぐに用件を伝える。

《冗談ですよ、冗談！》

「それどころじゃないんだ、前世の記憶が無くなったんだ、何か知ってるか!？」

《な、何ですか？いきなり…と言うか、知りませんよ！一応転生特典に入れてあるので前世の記憶は失われない筈ですよ!》

「なのに何で無くなるんだ!？」

《知らないですよ！落ち着いて下さい！ニルヴァーナが闇に落とすって言われませんでしたか!?!》

その言葉に、ユウトははっと正気に戻る。

「…すまねえ、落ち着いたら掛け直す」

そう言つて、ユウトは通信を切り、通信機を懐にしまう。

「はあ、駄目なんだな…俺つて。…行こう」

そう呟きながら、ユウトは光の柱の方に向かって歩き出す。

「…色変わつてね？」

光の柱の色が変化している事に気付く。

第一段階から第二段階へと進化したのだろうか。

「だとしたら早く向かわねえと…大変なことに——」

ユウトがニルヴァーナ阻止の為に走り出した瞬間、耳を劈くような暴音が訪れる。何だ何だとユウトは空を見上げ、その光景に目を見開いた。

生き物のような足を生やし、その足の付け根には巨大な都市?のような建造物が建っている。

簡潔と言えばタコだ。

で、そのタコが…

「ニルヴァーナの、最終段階…!」

遂に本格的に発動してしまった、と言う訳だ。

そうなってしまったからには目的は一つ。

「ぶっ壊すしか無いだろオ!」

小学生が何言ってるんだ、と思っっているかも知れないが、彼は“自責の念”を取り払う為に、強気になったのだ。

「まあ、とりあえず行ってみますか」

「着いた…」

あれから何十分経っただろうか。

動くタコ足をよじ登り、時に落ちそうになったり、時にはナツと思われる怒号が聞こえたので耳を塞ぎ、時には物を引っ掛けて下つたり、と、時間が物凄くかかってしまった。

「とは言え、まあ登れたから良しとして…」

ユウトは滅竜魔導士ドラゴンズレイヤーの特性の一つである嗅覚の良さを利用し、ルーシイ達の匂いを辿る。

近づいて行くごとに人の匂いが強くなり、それに複数人集合してるらしく、匂いが強力になる。

そして…

「おーい!!」

「お、ユウトだ!」

「おお!ユウト殿!」

「無事だったのね!」

「おかげさまで。∴いやー、別の場所に流されるなんて思いもしなかったなあ」

「あたしも、死んじやったかと思っちゃった」

「勝手に殺すなあ!」

ツツコミを入れるユウトに、ルーシイは「ごめんごめん」と謝り、何とか許して貰った。

「ナツは?」

「ナツならハッピーと一緒に上にいるよ」

「バトってる可能性あるな∴。さっきの怒号もそうだし。」

「あれうるさかったね」

「鼓膜死んだかと思った」

彼等がそうナツの話題を振っていると、ブレインに引き摺られてやって来た。

「あ、噂をすれば——つてか、どーしちゃったの!？」

「これ…乗り物だから…」

「…ネコ殿も無事か」

「ネコ殿!？」

そんな中、ユウトはブレインに視線を向け、会話を振る。

「何でナツ引き摺ってんの?」

「六魔も半数を失い、地に落ちた。…これより新たな六魔を作る為、この男を頂く。」

「あー、スカウトってやつだな」

「いつか本当に来るとは思っても無かったな…」

「ナツはあんた達の思い通りにはならないんだからね!」

「それについてはニルヴァーナがこやつを心を染めてくれる。…そしてこやつは私の手足となるのだ。」

笑いながら話すブレインに…

「なるか」

と、勢いをつけて、ブレインの腕に噛み付く。

「くっ、まだそんな力が!!」

「ぐほっ!!」

しかし、ナツの抵抗も虚しく、ブレインに叩きつけられ、起き上がる事なく倒れた。

「大丈夫なのか？」

ナツの弱った状態にジユラは心配するが、ユウトは苦笑を浮かべながら応じる。

「ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士は乗り物に極端に弱いから保証は出来ないね」

「あれ？でも何でユウトは大丈夫なの？」

「まだ半人前って事じゃね？」

「失敬な」

ユウトが何故乗り物酔いしないのかは置いて、今はナツの件だ。

「早く……こいつ……倒し……て……コレ、止めてくれ……」

吐き気を堪え、所々途絶えながら告げるナツに、グレイが応じる。

「お前の為じゃねーけど、止めてやんよ！」

その言葉を聞いたブレインは、笑いながら答える。

「はっ、止める？このニルヴァーナを？……出来るものか。……この都市は間もなく第一の目的地……」

ケット・シエルター
—— 化猫の宿に到着する。 ——

ブレインが言い放った言葉に、ユウト達は目を見開く。

「ウエンデイとシャルルのギルドだ…」

「何で？」

ハッピーとユウトの言葉に、ブレインは口角を上げるだけだ。

「目的を言え。…貴様は何故ウエンデイ殿のギルドを狙う？」

殺気を当て、ブレインにそう質問するジユラ。

しかし、ブレインの表情に恐怖は無く、ニヤリと口角を上げながら語りだす。

「超反転魔法。その効果は一瞬にして光のギルドを闇に染める程の絶大さを誇る。…楽しみだな、地獄が見れるぞ？」

「エグいな…」

「こいつ、許せない……！」

そう挑発じみた言葉を放つブレインに対し、怒りを募らせるルーシー達。その後ろから強力な魔力の波動を感じ取り、背筋を凍らせる。グレイ達は後ろにいる波動の根源に、恐る恐る視線を向ける。

「聞こえなかったか？ 目的を言え、と」

波動の根源はジユラ。

体内に宿る魔力を放出して、ブレインに対する威圧を放っていたのだ。しかし、ブレインの表情には怯える様子は見られず……

「うぬのような雑魚に語る言葉は無い!! 我は光と闇を審判する者なり、ひれ伏せえ!!」
そう叫ぶブレインに、ジユラは溜め息を吐いた。

「……困った男だ、まともに会話も出来んとはな……」

「消え失せろ、蛆共が」

ブレインが挑発した直後、ジユラは彼に指を差し、背後へと吹き飛ばした。その衝撃で背後に建つ建造物が破壊される。

これが、聖十大魔道の称号を持つ者の力なのか。

「立て、ケット：シエルダー化猫の宿を狙う理由を口から吐くまでは寝かさんぞ」

ブレインをも超える気迫を放つジユラ。

その姿にユウト達は、足をすくませていたのだった。

To Be Continued...

第16話 発射

「…立て、ケット・シエルター化猫の宿を狙う理由を口から吐くまでは寝かさんぞ」

ブレインをも超える気迫を放ちながらそう言い放つジユラに、ユウト達は足をすくませていた。

「も、もしかしてこのオッサン…」

「滅茶苦茶強い…!?!」

「これが、聖十の称号を持つ者の力…!」

ブレインは瓦礫をどかし、口に付いた血を拭う。

「成る程な、少々驚いたが…聖十の称号を少々見くびっていたが、やはり伊達じゃないと言う事か…」

冷静さを取り戻し、ブレインは立ち上がり、立ちそびえるジュラを見据える。

ケット・シエルター

「化猫の宿より近いギルドはいくらでもある。わざわざ其処を狙うからには特別な目的がある、そうだろうか？」

「これから死ぬ者が知る必要は無かろう。…ダーククロンド常闇回旋曲」

「…岩鉄壁」!!」

ブレインの持つ杖から魔法が放たれ、ジュラに襲いかかる。

しかし彼は冷静に土を固くした壁で防御する。

が…

「かかったな、ダークカブリチオ常闇奇想曲」!!」

先程の魔法は囷。

防いでいるジュラの背後に回り、ブレインは魔法を放つ。

しかし、ジユラはまるで読んでいるかのように岩を背後に曲げ、防御しようとするが…。

「無駄だ！ ダークカプリチオ常闇奇想曲”は貫通性の魔法、このままその岩ごと貫いてくれるわア!!”

ブレインの言った通り、ダークカプリチオ常闇奇想曲”は岩を貫き、そのままジユラを貫かんと襲いかかる。

「ふん!!」

しかし、彼は瞬時に岩を曲げ、魔法の接触部分を地面に叩きつけ、魔法の進行方向を空へと曲げる。

それに驚くブレインの隙を突くように、操っていた岩壁を壊し、ブレインの方向へ破片を飛ばす。

「ぐお、がつ、はぐ……な、何だ、これは…!?”

破片はブレインをまるで磁石に集まる金属のように集まり、全身を岩で閉じ込め…

「『霸王岩砕』!!」

「うあ、あ、あ、あ!!!」

全身を覆っていた岩を爆破し、ブレインはボロボロになり、その場に倒れた。

「道理でリオンがさん付けで呼ぶ訳だ…」

「てかこいつ六魔のボスだろ!?それを無傷で倒すとか、凄すぎだろ!」

「あたし達勝っちゃった!」

ジユラの強さに全員、驚愕の反応をする。

それもその筈、ブレインはオラシオンセイスのボスの存在。

そのブレインすら圧勝してしまう程の力を、ジユラは持っているのだから。

「…さあ、ウエンディ殿のギルドを狙う理由を言え」

ジユラはブレインに歩み寄り、質問を繰り返す。
しかし、ブレインの口から質問の答えが出る事は無い。

「ま……まさか、この私が……やられる……とは……ミッドナイトよ……後を頼む……六魔は決して、倒れてはならぬ……6つの祈りが消える時……あの方が……！」

「あの方？」

“あの方”と言う気になる言葉を言い残して、ブレインは気を失う。

そして気を失ったと同時に、ブレインの顔面にある模様のラインの1つが消滅した。

「ん??」

「どうしたの??」

「……今こいつの顔にある模様の1つが消えたように見えたんだが」

「不気味な事言わないでよお」

確かに、最初にブレインに会った時から顔面の模様が少なくなっている気がする。

ルーシイ達は気の所為と言う事にしたものの、後々になって、その模様の真相を知る

事になるが、それはまだ当分の話…

「みなさーん！大変です！」

「やっぱりこの騒ぎはあんた達だったのね」

背後から幼い子供の声が聞こえ、ユウト達は後ろを振り返る。

そこには、青色の髪を揺らしながら駆け寄って来るウエンデイと、呆れた顔をしてやって来る白猫のシャルルの姿が。

「ウエンデイ!？」

「大変って、どうしたんだ？」

ユウトがウエンデイにそう問いかける。

ユウト達の前に立ち、ウエンデイは泣きそうな顔で答える。

「この都市、私達のギルドに向かっているかもしれないんです！」

「…らしいが、もう大丈夫だ」

ウエンデイの言葉に、グレイは微笑みながら答え、グレイはウエンデイから視線を外し、ブレインの方に視線を向ける。

ウエンデイも追うようにブレインに視線を向ける。

「え？……ひやつ!?……この人って、オラシオンセイスの…？」

「そうだけ。」

気を失うブレインの姿を見て、驚くウエンデイの訊きに、相槌を打つようにユウトが答える。

「それに、ヘビ使いも向こうで倒れてるし」

グレイの言うヘビ使いとはコブラの事であろう。

コブラもナツに撃破され、此処にグレイがいると言う事は、レーザーも撃破したと言う事。

順調に撃破しているオラシオンセイス。

それを理解し、ウエンデイの表情に明るみの笑みが浮かぶ。

「それじゃあ…」

「恐らく、ニルヴァーナを操つてたのはこのブレインよ。それが倒れたって事はこの都市も止まるって事でしょ？…ね、ユウト？」

「んまあ、そうだな。」

ルーシイにそう返事するユウト。

しかし、彼は少なからず疑問を抱いていた。

——変だな、このまま伏線未回収のまま終わるのは可笑しすぎる。

——ブレインの顔の模様の意味…そして、そのブレインが言っていた「あの方」
“つてのは一体誰なんだ？”

ユウトの脳裏に数々の疑問が浮かび上がる。

確かに、ブレインの言っていた「あの方」と言うのは、恐らくオラシオンセイスの”

本当のボス」と言う意味を差しているのではないのだろうか？

「…ユウト君？」

ぶつぶつと呟くユウトに、ウエンデイが心配の声をかけるも、すぐさま「大丈夫」と返す。

（ま、それらについて後程考えるところか…）

「でも気に入らないわね、結局、ケット・シエルター化猫の宿が狙われる理由は分からないの？」

「まあ深い意味はねえんじやねえのか？」

怪訝そうな表情を浮かべるシャルルに、グレイがそう告げた。

「気になる事は多少あるが、これで終わるのだな」

「お、終わって…ねえよ…早く、これ…止め…うぷ」

「ナツさん、まさか毒に侵されて…!？」

※毒× 乗り物酔い○

「全くオスネコもだらしないわね！」

「あい…」

シャルルの辛口な言葉にハッピーは弱々しくそう答えるのだった。

ユウト達はニルヴァーナによって改心したホットアイ改め「リチャード」から聞いた「王の間」と言われる場所へと向かっていた。

ここでニルヴァーナを制御していると云っていたのだが…

「どうなってやがる…」

「何これ…」

「む…」

「マジで此処が王の間って場所なのか？…何一つそれらしき物が無いんだけど!？」

ユウト達が目の当たりにした光景は、操縦席が無く、またそれらしき魔法陣も見当た

らず、ただただ何かが破壊されたような跡しか残っていなかった。

「どうやって止めればいいのか?」

「制御する魔法陣すらねえからな…」

「そもそもブレインを倒せば止められるかと思つてたぜ…」

グレイ達が操縦席を探している間、ユウトはその場に座り込む。

「お前も探せよ、ユウト!」

「疲れたんだよ、さつき魔力切れになりかけたし」

エンジェル戦の時、ルーシイの護衛に大量の魔力を消耗したユウト。疲れるのも致し方無い。

一方、ウエンディはナツの解毒に回っていた。

「どうしよう?解毒の魔法をかけたのに、一向に治らないなんて…」

「ナツは乗り物酔いに弱いんだよ」

「情けないわね……」

溜め息を吐き、呆れた声でそう言うシャルルの前のハッピーの言葉に、ウエンデイはピンと来たのか……

「ハッピー、さっきのもう一度言ってもらっても良い？」

「え？ナツは乗り物に弱いって……」

「ありがとう」

ウエンデイはハッピーにお礼を言って、とある回復魔法で試してみる事に。

「乗り物酔いならバランス感覚を養う、この魔法が効くかも……」
「トロイア」

ウエンデイは詠唱し、ナツの体に手を翳す。

すると、ナツの顔色が段々治っていき……

「うお！おおおおつ！！平気だ、平気だぞ！！」

乗り物酔いが平気になったのが余程嬉しかったのか、まるで子供のように飛び跳ねるナツを見て、ウエンデイは微笑んだ。

「良かったです、効き目があつて」

「すげえなウエンデイ！その魔法是非教えてくれ！」

「天空魔法ですし無理ですよ」

ナツはウエンデイに教えて貰うように頼むが、天空魔法と言う事で無理だと言う。

しかし、興奮が収まらない彼は、ルーシイに船や列車の星霊を呼び出すように頼んでいた。

それを見ていたユウトはクスクスと笑いながら「良かったな」と呟いていた。

「止め方が分からねえんだ、見ての通りこの部屋には何もねえ」

グレイはナツに事情を伝える。

「そもそもなんだけどき、その情報って嘘なんじゃ無いのか?」

ユウトがそう問いかけるが…

「リチャード殿が嘘をつくとは思えんからな…」

ジュラによってそれは否定される。

全員が制御装置の事に入り浸っている中…

「止めるとかどうとか言う前に、もっと不自然な事に誰も気付けない訳なの!」

「…どう言う事?」

シャルルの言葉にハッピーが首を傾げ、問いかける。

その質問にユウトが答える。

「…操縦席は無い、王の間には誰も居ない…そして、ボス的存在であるブレインを倒して

も尚動き続けるニルヴァーナ。」

「まさか、自動操縦か!?!:既にニルヴァーナ発射までセットされて…!」

グレイの言葉にユウトは相槌を打つ。

「恐らくそうだろう。…ブレインを倒しても止まらなかったからな……此処に何もねえし」

ユウトの憶測に、ウエンデイの目に涙が浮かび上がる。

「私達の…ギルドが…」

「大丈夫、ギルドはやらせねえ。必ず守ってやる!」

ウエンデイのギルドを必ず守ると言うナツの言葉に、ユウトは立ち上がって…

「絶対に守って、皆が笑えるハッピーエンドを見せてやる。…それまで涙は取っとけ、な？」

ユウトの笑顔に、ウエンディは涙を拭い…

「はい！」

と、笑みを浮かべた。

「でも、止めるって言ってもどうやって止めれば良いの？」

「ぶっ壊す」

「またそーゆー考え!？」

「あ、良いねそれ」

「子供が言う事じゃありません」

「あ、俺子供なのね」

「てか、こんなバカでけーもんどうやって壊すんだよ」

正論。

ナツの考えも悪くは無いがいかんせん巨大な建造物を一瞬で壊せる筈が無いのだ。

「…やはりブレインに聞くのが早そうだな」

「そう簡単に教えてくれるかしら？」

「…もしかして、ジエラールなら…？」

ウエンデイがぼそりとそう呟き…

「…私、ちょっと心当たりがあるので探してきますね！」

「ちよつとウエンデイ!? 待ちなさいよ!!」

ウエンデイはそう言うと、何処かに飛び出し、シャルルも後を追うように飛び去って行った。

ユウトも彼女を一人にしてはマズイと判断し、追いかける。

「俺もちよつと行ってくる！」

「はあ!?!」

「ちよ、ユウト!?!」

ユウトはルーシイ達の声に止まる事は無く、「後頼むわ」と言い残し、そのままウエンデイを追いかけて行つた。

「…見失つた」

ユウトはウエンデイを追いかけていたものの、彼女は小柄な体型で、しかも足も少し速いので見失つてしまい、さらには迷つてしまふと言う、そんな状況だ。

「戻りたくても戻れねえし、いねえし…」

匂いを辿ろうとしても余程遠くへ行つてしまつたのか、匂いすらしなかつた。まさに絶望的である。

「探せば見つかると思うし、探してみるか…」

ユウトがウエンデイを探そうと来た道を戻ろうとしたその時だった。

「…ん？何だ？」

地鳴りが起こり、周辺の建造物が揺れ始める。

地震だろうか、それとも…

「…発射か」

地面から離れている上空での地震はまず有り得ない。

…となると、発射の確率が非常に高い。

「…ヤバいつ！」

—— 一方、ケット・シエルター化猫の宿では…

「マスタあー…」

「ひえ〜」

「もう終わりだ…」

ギルドに所属する“ニルビット族”達の目の前には、発射される直前のニルヴァーナが。

ケット・シエルターのギルドマスター、“ローバウル”の元に集まり、訪れる死に怯えるニルビット族の者達。

しかしローバウルは冷静沈着にいた。

「何をうろたえるか。…これがワシ等の運命。なぶら重き罪の制裁。」

「善意よ、滅びるが良い!!」

「やめてえー!!」

「ニルヴァーナ、発射だア!!!」

遂に発射されたニルヴァーナ。

ケット・シエルターの運命、そしてニルヴァーナを発射する男の正体とは!?

To Be Continued…

第17話 阻止

「ニルヴァーナ、発射ア!!」

男の合図と共に、ケット・シエルター化猫の宿に向けてニルヴァーナが発射される。発射された巨大な光線は、そのままギルドに直進。

このままではギルドに直撃する――

――と、思われていたが。

突如何者かにニルヴァーナの足を攻撃され、光線は軌道を外し、被害は片耳だけで済んだ。

ユウト達は上を見上げ、攻撃した方に視線を向ける。

「あれは……!」

「魔導爆撃艇、クリステイーナ 天馬!？」

オラシオンセイスによつて無惨に撃墜された筈の魔導爆撃艇、クリステイーナ 天馬が上空を飛行していた。

どうやらあの飛行艇がニルヴァーナの足を攻撃し、軌道を外したようだ。

『聞こえるかい!?!…誰か、無事なら返事してくれ!』

「ヒビキか？」

「わあ!」

ヒビキが掛けていると思われる念話が聞こえる。

『エルザさん?…ウエンディちゃんも無事なんだね』

「俺も無事だ!」

『ユウト君も無事で良かった!』

『私も一応無事だぞ』

『先輩も!』

それぞれ、お互いの安否を念話を通じて確認した後、エルザが質問を訊く。

「…どうなっているんだ？確かクリステイーナは撃墜された筈じゃ無かったのか？」
『壊れた翼をリオン君の魔法で補い、シエリーさんの人形撃と、レンの空気魔法エアマジックで浮かしているんだ、因みにさっきの一撃はイヴの雪魔法さ』

魔法を利用してクリステイーナを復活させ、さらには砲撃するとは、なかなか賢い者だ。

しかし、魔力がもう限界の人が動かしていると、飛んでいられる時間も、もう僅かしか残されていないだろう。

『僕達の魔力ももう限界で、残り僅かしか飛んでいられない。…だが最後にこれだけは聞いて欲しい！…漸く、古文書アーカイブから見つけたんだ！

——ニルヴァーナを止める方法を！』

ヒビキの説明はこうだった。

ニルヴァーナを支える6本の足、その付け根にある魔水晶ラクリマが大地からの魔力供給を制御すると言ったものだった。

その6つの魔水晶ラクリマを同時に破壊する事により、ニルヴァーナの全機能が停止するのだと言う。

次のニルヴァーナ装填完了までの20分をタイミングと見て、アーカイブ古文書でエルザ達の脳にタイミングをアップロードし、ヒビキが念話を切断しようとした時…

『——無駄な事を…』

念話に謎の声が割り込む。

「誰だ!？」

「この声…」

「ブレインって奴だ!」

念話を「ジャック」する声からしてブレインと言う事が分かる。

しかし、何かの違和感を感じる。

「…ブレインにしちゃ、印象的な声と違うような気がするな…」

『…オレの名はゼロ。六魔将軍のマスターゼロだ』

『マスターだと!?!』

オラシオンセイスの“マスター”の登場に、連合軍は動揺する。

『まずは褒めてやろう、まさかブレインと同じ“古文書”^{アーカイブ}を使える者が存在していたとはな…。…聞くがいい!!光の魔導士よ!!オレはこれより、全ての物を破壊する!!』

ゼロが高らかにそう宣言し、続ける。

『手始めにてめえらの仲間である3人を破壊した。…滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}”に”氷の造形魔導士”、”星霊魔導士” ああ…それと猫もか』

ゼロはナツ達を破壊したと言う事を告げる。

「何!？」

『ナツ君達が…!?!』

「クソツ…!」

「そんなの嘘よ!!」

ゼロの言葉にエルザは震えながら拳を強く握り、ウエンデイは悲痛な表情を浮かべる。

『てめえら、魔水晶ラクリマを同時に破壊するとか言ってたなア？オレは今、その6つの魔水晶ラクリマのどれか1つの前に居る！ワハハハハ、オレが居る限り、6つの魔水晶ラクリマを壊す事は不可能だ!』

そう言い放った後、ゼロは念話を切断した。

『ゼロとの念話が途切れた…』

(ゼロに当たる確率は1/6、しかもエルザ以外だと勝負にならんと見た方が良いか…)

「とりあえず、6つの魔水晶ラックリマを破壊しに…」

向かおう、とユウトが言う前にシャルルが待ったをかける。

「待って、6人も居ない…！魔水晶ラックリマを壊せる魔導士が6人も居ないわ!!」

「わ、私…破壊の魔法は使えないです…ごめんなさい…」

ウエンディは申し訳無さそうに言う。

ウエンディが戦えないとなると、その場にいるエルザとジェラルのみとなるが…

「此方は2人だ、他に動ける者は!？」

「俺は魔力が…」

ユウトは魔力が空の為、行動出来ないと判断した。

——残り4人。

《私が居るではないか。…縛られてるが…》

《一夜さん!!》

念話に響く声、一夜が名乗りを上げた。

——残り3人。

《まずい…もう、僕の魔力が…念話が…切れ…》

ヒビキの魔力も限界だ。

念話が切れるのも時間の問題だろう。

その時、リオン達の声が念話に響く。

『グレイ、立ち上がれ…お前は誇り高きウルの子だ、こんな奴等に負けるんじゃない』
『私…ルーシーなんて大嫌い…ちよつと可愛いからって調子に乗っちゃってさ、バカで
ドジで弱っちいくせに…いつも…いつも一生懸命になっちゃってさ…死んだら嫌

いになれませんわ、後味悪いから返事しなさいよ』

涙を流しながら告げるシエリー。

嫌いになりながらも、ルーシイの事を認めている…そんな感情が伝わる。

「ナツさん…」

「オスネコ…」

「ナツ…」

《ナツ君…》

「——起きろよ、ナツ!!俺達の声が…!!」

響くユウトの叫び。

…それに続くように、

『——聞こえてる!!!』

「荒い息と共にナツが返事をする。

続いて、念話に2人と1匹の猫の声が響く。

『6個の魔水晶ラクリマを……同時に……壊す……!』

『運の良い奴は、ついでにゼロも殴れる……でしょ?』

『あと18分。急がなきゃ……シャルルとウエンデイのギルドを守るんだ……!』

その声に安堵するユウト達。

息を吐いたヒビキがナツ達の脳裏に語りかける。

『もうすぐ……念話が……切れる……頭の中に僕が送った地図がある……各魔水晶ラクリマに番号を付けた……全員がバラけるように……決めてくれ……』

『1"だ!!』

『2"!』

『3"に行く……ゼロと当たりませんように』

『私は4"へ行く……此処から一番近いと香りバルファムが教えている』

「教えているのは地図だ」

『そんなマジでツツコまなくても…』

エルザのマジなツツコミに落ち込む一夜。

「私は〃5〃に行く」

『エルザ!? 元気になったのか!?』

「ああ、お陰様でな」

エルザは解毒してくれたウエンディを見る。

視線の先に居るウエンディは「いえいえ」と首を横に振る。

「オレは…「お前は〃6〃だ」!?」

『誰か居るのか!?!』

『今の誰だ!?!』

声を出そうとしたジエラルをエルザが止めて、代わりに答える。

「ナツはまだお前の事情を知らん…敵だと思っている、声を出すな」

ひそひそとエルザはジェラールにそう伝えたのを最後に、プツン、と音を立てて念話は途切れた。

「…途切れましたね」

「ああ。魔力の限界だったんだ、仕方ない。」

その後、付近にいたユウトと合流し、ゼロが居る場所についてエルザが語る。

「恐らくゼロは〃1〃番にいる」

「ナツさんが選んだ所だ…!」

「そんな事どうして分かるのよ?」

「彼奴は鼻が良いからな、分かかって〃1〃番を選んだ筈だ」

「だったら加勢に行こうよ!皆で戦えば…」

拳を握りながら叫ぶウエンデイをユウトは見つめ…

「大丈夫、彼奴なら出来る。ナツを信じようぜ？」

と、不安気なウエンデイに微笑みながら答えた。

「…さて、私達も持ち場につくとするか」

「…そうだな」

エルザがそう指示し、ジエラールの方を振り返る。

「……………ナ……………ツ……………」

「……………ジエラール？」

頭を抑えながらぶつぶつと呟くジエラールを見て、エルザは声をかける。

彼からは「何でもない」と返答し、何処かへ歩いて行った。

「…彼奴、もしかして？」

ユウトの脳裏にある予感が浮かび、彼に声を掛けようとした瞬間、ウエンデイに先を越されてしまう。

「ジェラルル、具合が悪いの？」

頭を抑えるジェラルルに、ウエンデイは心配の声を掛ける。

「いや…君は確か、治癒の魔法を使えたな？」

「……………」

彼の質問にウエンデイは相槌を打つ。

「…ゼロと戦う事になるナツの魔力を、回復させられるか？」

「……………それが…」

ウエンデイが続きを言おうとするが、代わりにシャルルが声を荒げながら返答する。

「何バカな事を言ってるの!! 今日だけでウエンデイが何回治癒魔法を使ったと思ってるのよ!! これ以上は無理よ!! 元々この子は——」

「そうか、ならばオレがナツの魔力を回復しよう」

「……え？」

俯いた顔を上げ、ウエンデイは首を傾げる。

「……思い出したんだ、ナツと言う男の底知れぬ力……希望と言う名の力を、な。…君はオレの代わりに、6番の魔水晶ラックリマを破壊してくれ。」

「でも、私……」

ジェラルドのお願いに表情を歪めるウエンデイ。

そこに、ユウトが会話に参加する。

「……俺も手伝おうか？」

「…ユウト君？」

「確かお前はさつき念話にいた…」

「ユウトだ。…初対面か分からんけど」

「…何処かで会ったことあるの？」

ウエンデイがそう訊くと、ユウトは「ほら、さつきの洞穴で」と答え、納得させる。それから彼はウエンデイの方に顔を合わせ…

「ウエンデイ、確かにお前にはこのお願いには葛藤するかもしれない。だけど、お前は竜迎撃用の魔法を持つ^{ドラゴンスレイヤー}滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}だ。……魔水晶^{ラクリマ}を破壊するには序の口だろ？」

ウエンデイは天空の^{ドラゴンスレイヤー}滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}だ。

ナツと同じく、攻撃に特化した魔法である。

しかしナツとの力とは天と地ほどの差があるウエンデイにとって、少し無理がある話である。

「でも…」

「…お前なら絶対出来る。……“天”を喰うんだ。」

ユウトはそう言い放った後、一瞬間は空いたものの、俯きながらも直ぐにウエンディから返答が告げられる。

「……………分かった、やってみます」

「よし、それでこそドラゴンスレイヤーだ。…ジエラルル、俺もウエンディとここに付いてっっても良いか？」

「…ああ、だが大丈夫か？…お前も魔力が無い筈じゃ…」

ジエラルルから投げ掛けされる心配の声に、微笑みながらピースサインを作り…

「心配すんな、大丈夫だ」

そう言って、2人は“6”番魔水晶^{ラックリマ}へと向かって行った。

ジエラルルは小さな後ろ姿を見て、

「彼奴、小さなナツみたいだな…」

そう呟いていた。

そして20分後、同時に6つの魔水晶ラクリマが破壊され、さらにはナツの活躍によってゼロも倒され、ニルヴァーナは停止。

——オラシオンセイイス六魔將軍との戦いは、幕を閉じたのであった。

To Be Continued…

第18話 知らされる事実、受け入れる現実

——あれから少しの時間が経過した。

ニルヴァーナは崩壊し、六魔のマスターであるゼロをも倒して、これでもう終わりだと思つてたけど……

——ジエラールが評議院に捕まった。

あと六魔の1人のホットアイ……「リチャード」つて言つた方が良いか。……が捕まった。

……まあリチャードの場合は六魔の1人つて事もあつたから仕方が無いんだけども、ジエラールも捕まった事には驚いたよ。

俺が統合世界に行く前に色んな罪を犯したらしくて、それで捕まつたんだ。

……勿論皆反対したよ、俺も評議院の3人か4人はぶん殴つたけど、今では物凄い罪悪

感が…

エルザが何とか止めてくれたから収束はついたけどね…

——話は変わるけど、俺は今、ケット・シエルター化猫の宿がある村にいる。

ニルビット族の人達にも挨拶したりしたけど、優しく接してくれて、何だか有り難かった。

服も新しくなったし（猫柄だけど）。

因みに元々着ていた服は汚れを落とし、また着用する為に以前購入したキーホルダー式ポケット型チェストに収納しておいた。

モンスターボールみたいで縮小したりするから便利だわ。

因みに以前購入した金リングも入っていて、いつか食べようと思い、そのまま保管しておいた。

——ま、とりあえず全員収集なんで、行くとしますかね。

ユウト達はケット・シエルター化猫の宿のマスター、ローバウルによって広場に収集される。

「妖精の尻尾、青い天馬、蛇姫の鱗、そしてウエンデイにシャルル。…よくぞ六魔將軍を倒し、ニルヴァーナを止めてくれた。地方ギルド連盟を代表して、このローバウルが礼を言う。ありがとう、なぶらありがとう。」

ローバウルは感謝の言葉を伝え、一夜が前に立つて敬礼をする。

「どういたしまして、マスターローバウル!! 六魔將軍との激闘に次ぐ激闘!! 楽な戦いではありませんでしたが、仲間との絆が我々を勝利に導いたのです!!」

「さすが先生!」

「ちやつかり美味しいとこ持って行きやがって」

「てか彼奴、ユウトより活躍してないよね?」

「情けねえよなあ」

そう言つて、ユウトのいる方向に視線を向けるグレイとルーシー。

視線に気付いたユウトは彼等にピースサインを見せる。

「この流れは宴だろー!!」

「あいさー!!」

ナツの声に続き、一夜達が踊り出す。

「一夜が」

「一夜が!?!」

「活躍」

「活躍!!」

「それ」

「「ワツシヨイワツシヨイワツシヨイ!!」」

ブルーベガサス
青い天馬の謎の踊りを始める。

(うわ出た、学校に良くいそうな調子乗るバカ集団…)

と、言いつつ…

「ワツシヨイワツシヨイ!!」

この有り様である。

「さあ、ケット・シエルター化猫の宿の皆さんもご一緒にイ!？」

「あ、それ!」

『ワツシヨイワツシヨイ!!』

「ワ…」

お祭りムードの一夜がケット・シエルター化猫の宿の全員を誘い、踊る。

しかし、彼等が踊る事は無く、其処にはただただ風が吹く音がするのであった。

「皆さん、ニルビット族の事を隠していて、本当に申し訳ない。」

ローバウルが謝罪し始めた。

「そんな事で空気壊すの?」

「全然気にしてねえのに、なあ?」

「俺も気にしてないが…」

ナツ達の意見にウエンデイも同意。

「マスター、私も気にしてませんよ?」

しかし、ローバウルの表情が変わる事は無く…

「皆さん、ワシがこれからするお話をよく聞いてください。…まず始めに、ワシ等はニルビット族の末裔などではなく、ニルビット族そのもの。…400年前、ニルヴァーナを作ったのは、このワシじゃ」

「マジか!?!」

「何!?!」

「嘘…!」

「400年前?!」

ローバウルから告げられる事実には、全員が驚愕する。

ナツは目を見開き、何も言わずにポカーンと彼を見据えていた。

「400年前……世界中に広がった戦争を止めようと、善悪反転の魔法、ニルヴァーナを造り出した。……ニルヴァーナはワシ等の国となり、平和の象徴として一時代を築いた。……しかし、強大な力には必ず反する力が生まれる。闇を光に変えた分だけ、ニルヴァーナはその「闇」を纏っていった。」

「……………」

「……バランスを取っていたのだ。人間の人格を無制限に光に変える事など出来なかった。……闇に対して光が生まれ、光に対して必ず闇が生まれる。」

ローバウルの言葉を聞き、グレイは「そう言われれば確かに……」と呟いていた。

「……人々から失われた闇は、我々ニルビット族に纏わりついた。」

「そんな……」

目を伏せるローバウルの脳裏には、400年前の地獄絵図が映し出されていた。

「地獄じゃ。…ワシ等は共に殺し合い、全滅した。」

『…っ』

その言葉に、ユウト達は言葉を発せなかった。

…その様子を見ていたミントでさえも。

「生き残ったのはワシ一人だけじゃった。…いや、今となつてはその表現も少し違うな。我が肉体はとうの昔に滅び、今は思念体に近い存在じゃ。…ワシはその罪を償う為…また、力無き亡霊^{ワシ}の代わりに、ニルヴァーナを破壊出来るものが現れるまで、400年もの長い間、ずっと見守つて来た。…そして今…ようやくやく役目を終えた。」

例え肉体が無くなつても、ずっと此処で、ニルヴァーナを破壊する者を待つてたのか。

「俺達が、ローバウルさんの使命の終止符を打つたつて訳か…」

「………そ、そんな話……！」

…その時だった。

ウエンデイ達の目の前にいた化猫ケットシエルターの宿のメンバー達が皆、次々と姿を消していったのだ。

「マグナ!? ペペル!? 何これ…!? みんなっ!」

「アンタ達!」

ウエンデイとシャルルが驚きを見せているのに対し、消えていく人々の顔には、明るい表情が浮かんでいた。

「どうなってるんだ!」

「次々に人が…!」

「…騙っていてすまなかつたな、ウエンデイ、そしてシャルル。…ギルドのメンバーは皆……ワシの作り出した幻じゃ」

「……え?」

「何だとオ!」

「人格がある幻だ?!」

「何と言う魔力なのだ…!」

ローバウルの言葉に全員が驚愕する。

先程まで普通の人間と同じく、ユウト達と挨拶を交わしていた筈。

それ等が幻だったとは…

「ワシはニルヴァーナを守る為に、この廃村に1人で住んでいた。…7年前、1人の少年がワシの所に来た…」

『この子を預かってください』

「少年のあまりに真っ直ぐな眼にワシはつい承諾してしまった。…1人で居ようと決めてたのにな…預けられたウエンディはワシに、此処がギルドなのかと訊き、ワシはギルドだと伝え、幻の仲間を作り、彼女にギルドだと思込ませたのだ。」

「…ウエンディの為に造られたギルドって事か」

「ケット：シエルター」
「化猫の宿」、それは少女に寂しい思いをさせない為にと造られた、幻のギルドだったのだ。

「そんな話、聞きたくないよ……！」

知らされる事実、そして受け入れる辛い現実には、ウエンディは涙を流しながら耳を塞ぐ。

「ウエンディ、シャルル……もうお前達に偽りの仲間はいらない」

ローバウルはユウト達に指を差し……

「……本当の仲間がいるではないか」

微笑むローバウルの体が消えかけていく……

「お前達の未来は、始まったばかりだ……あと、ユウト君……」

「?はい?」

ローバウルに名前を呼ばれ、ユウトは目を合わせる。

「…先程拾った玉を、君に譲ろう」

「玉、ですか?」

「うむ。…この融合した世界を冒険する君にとつて、とても大事な物だ。保管しておいて欲しい」

そう言つて渡された玉には、赤い炎の色に染まり、暖かいような感じがしていた。

と云うか…

「え?何で統合世界の事を知ってるんすか?」

「…と、もう時間は無いようじゃ」

「ええ…」

「……それじゃあ皆さん、本当にありがとう。…ウエンデイとシャルルを、頼みます」

その直後、ローバウルの体は完全に消滅し、同時にウエンデイの右肩の紋章も消えた。彼女は膝をつき、大声で泣いた。

悲痛な叫びが響く。

余程、辛かったのだろう。

そんな彼女に、一人の少年が歩み寄る。

「別れって言うのは辛いよな…喪失感もあつて…でもその辛さは仲間が埋めてくれるんだぜ?…だからさ——、」

紺色の少年の言葉に、涙を流す彼女が振り向く。
少年は、口角を上げ、こう言った。

「——来いよ、俺達の所へ」

それは、統合世界を冒険する小学生ユウトと、仲間が居なくなった少女、ウエンディとの物語の始まりであつた。

To Be Continued...

第19話 終焉、そして…

数時間後、ユウト達は連合軍と別れた後、樹海を離れ乗船して帰路についていた。

「ああ、船って潮風が気持ちいいんだなあ…乗り物って良いもんだなー!!」

「そろそろ“トロイア”が切れますよ」

「おぷう」

子供のようにはしゃいでいたナツに掛かっていた“トロイア”の効果が切れ、一瞬にして弱体化してしまう。

「も、もう一度かけ…て…おぷ」

「連続すると効果が薄れてしまうので」

「そんな奴放つとけよ」

「あはははっ!」

盛り上がっていたナツ達に対し、ユウトはローバウルから授かった玉を見据えていた。

『この融合した世界を冒険する君にとって、大事な物だ。』

「…大事な物、か」

そこに、金髪の女性、ルーシイが歩み寄る。

「どうしたの、ユウト？」

「ああ、さつき貰った玉がなんだろうかなあつて思つて」

「…魔水晶ラクリマとかじゃねーのか？」

「俺にとつて大事な物つて言つてたからな、多分それは無いかも」

「…そう言えば、融合した世界がなんちゃらこんちゃらつて言つてたけど」

ルーシイがローバウルの言葉を思い出し、そう呟いた。

統合世界の冒険者の事実を訊いて来たのだ。

…ここで事実を隠蔽しても良かったのだが、短い間ではあったものの、彼等は信頼できるとは思えない。

仕方なく話しておこうと、ユウトは口を開いた。

「実は俺、この世界とは違う世界に存在している人間なんだ」

「違う世界…?」

「この世界のように魔法は使えないし、魔導士ギルドとかドラゴンとかも存在しない世界に俺は居たんだ。」

現実世界、それはこの世界のようにクエストを受けて金を稼ぐ世界とは無縁だ。

学校と呼ばれる施設で勉強し、社会に出て金を稼ぐ世界。

勿論魔法なんて概念が無ければ、ドラゴンも居ない。

そんな何も無い世界に、ユウトは誕生した。

「何でこの世界に来たの?」

「…俺の不注意によって、あの世界で死んで、融合した世界を救う為につて、統合世界と呼ばれる、他の世界と融合した世界に、俺は転生したんだ。」

「統合世界?」

「転生?」

「いずれ分かるよ」

ユウトは「ハッピーエンドを迎えたい」と言う理由でこの統合世界の返戻を目指し、この統合世界に転生した。

「兎に角、俺は仲間を探してこの世界に来たんだ。……誰も仲間に来れなかつたけどよ」

3つ目の目標も達成出来ないまま、FAIRY TAIL編この世界から出てしまうのか。
何としてでもそれだけは避けたい。

「頼むツ……誰か一人、俺の仲間になってくれないか?…無論、無理には言わないが、頼むツ!誰か……」

土下座して頼み込むユウト。

沈黙が現れ、誰も仲間になんてなってくれやしない。

そう思い、諦めて立ち上がるうとしたその時…

「……でよければ」

「……え？」

「私でよければ、ついていくよ？」

沈黙を破り、ユウトにそう告げる幼い少女の声に、ユウトは顔を上げる。

…声の正体は、フェアリーテイル妖精の尻尾に入る筈の少女、ウエンデイだった。

「ウエンデイ!?!」

「え、待つて、ギルドは？」

「ギルドには勿論入ります。…けど、一度闇に落ちかけた私を救ってくれたユウト君の借りをいつか返したいから」

彼女は一度、ニルヴァーナによって自責の念に囚われ、闇に落ちかけていたのだ。そんな彼女を救い出したユウトの借りを返したいと言うのだ。

「ウエンデイ…」

「…だから、出来る事があれば、私は貴方の冒険について行きます。…駄目？」

ウエンデイの問いに、ユウトは表情を明るくし、彼女の手を握る。

「勿論さ!!…これから俺と一緒に冒険しよう!ウエンデイ・マーベル!!」

「はい!!ユウト君!!」

統合世界を冒険する仲間が加わり、戦力も大分上がった。…サポーターではあるが…

「…と言う訳だ、ウエンデイは俺が貰う、良いよな?」

「…あ、ああ、勿論だ」

「ユウトは信頼出来るからな、良いだろう」

「サンキュー！」

グレイとエルザの言葉に、ユウトは礼を言う。

しかし、先程もルーシーが言った通り、ギルドの問題も浮上する。

そこで…

「…ウエンディの代役を連れて来ようと思う」

「代役？」

「ああ。」

この先、この世界に何が起きるか分からない。

その対策として、代役を用意する事に。

で、その代役と言うのが…

「……アナザー族って覚えてるか？」

「うん、あのハルって奴みたいな奴等でしょ？」

「ご名答。…で、そのアナザー族の者が、居たんだよ、もう1人」

「!?!」

アナザー族の者がもう1人居たと言う言葉に、ナツを除いた全員が驚愕する。

「居たのか!?!」

「ああ、それもアナザーウエンデイさ」

「私!?!」

まさかのアナザー族のウエンデイと言う事にウエンデイ本人が驚愕する。

「アナザーハルより全然頼れる奴だよ、…多分もうそいつはギルドに着いていると思うよ」

「待て、本当に頼れるんだらうな」

「会った時から仲良くしてくれたから、多分罠とかでは無いと思うぜ。…て事で、フェアリーテイルは任せる。」

ユウトはウエンデイの腕を掴み、船の端に立つ。

「また、会おうな……ナツ」

そう言い残し、ユウトとウエンデイは海へとダイブしたのだった。

「ユウト、ウエンデイ!？」

「別れ方にしちや中途半端だな、オイ」

「だが『また』会おうと言っていたからな、彼奴は必ず戻ってくるだろう」

また来るのであれば、中途半端な別れ方にも一理あるような気が。

で、ユウトに対して怒りを募らせていた白猫、シャルルは…

「ちよつと、私置いてかれたんだけど!？」

「…これからはアナザーウエンデイのパートナーになるって事じゃない？」

「絶対慣れないわ」

アナザーウエンディへの不満を抱えるシャルル。
慣れてくれればそれはそれで良いのだが。

——一方、ユウト達は

「つぶは！…海つてしよつぺえな」

「だね…あれ？シャルルは？」

「連れて来んの忘れた」

「はいい!？」

事実、忘れられていた。

長年の相棒であるシャルルをこの世界に忘れてしまった事に、ウエンディは驚く。

「すまねえな…でも必ず此処に戻って来るから、その時また連れて来れば良いだろ？」

「そうだけど…大丈夫かなあ」

ウエンディはシャルルに対する心配を抱えるが、必ず此処に戻って来ると言うユウト

の言葉に、多少疑ったものの、今はユウトについていく事に。

「…それじゃ、行きますかね」

「えっと、次なる場所は？」

「それは陸に上がってからじっくりと考えるとしよう。…今は」

「え？……きやあ!？」

「鮫から逃げるぞお!!」

そこが海と言うこともあつてか、鮫が2人の匂いを嗅ぎ付けてやって来たのだ。

食い尽くすと言わんばかりに襲い掛かってくる鮫から逃げながら、ユウト達は次なる世界へと足を進める。

——次なる世界、地底へと。

「——あれ、ユウトは？」

「ユウトなら冒険に出たよ、ナツ」

「はあ!？」

W a r s o f C h a r a c t e r s F A I R Y T A I L 編 終

次章予告

「…イビト山にて行方不明事件多発？」

「嘘」

「え」

「うわああああ!!!」

「きやああああ!!!」

「貴方達、誰？」

「よっしや分かった、お前の名前は……!」

「拙者は侍にござる」

「…何で制服着てんの？」

「タコ!？」

「ゾネス…!」

「ぼくが必ず、みんなを、世界を、救ってみせる!!」

*決意が、みなぎった。

次章 “undertale” 編

…キャラクター達の物語は、次なる世界へと足を進める。

To Be Continued…

u n d e r t a l e 編

第20話 好奇心から始まる物語

5話毎前回までのあらすじ

二次元世界が融合した世界、*“統合世界”*。

統合世界は様々な場所に影響を起こし、混乱状態へと陥っていた。

そんな中、三次元世界——現実世界から転生した小学生、名をユウト。

彼は統合世界を元に戻すべくその世界に転生し、前回、1つ目の世界を完遂した。

3つの目標を達成し、新たに加わった仲間*“ウエンディ”*と共に、次なる世界へと足を踏み入れるのだった。

——とある喫茶店、サングラスを着用し、優雅に珈琲に砂糖を入れ、口に一口流し込む紺色の少年と、新聞を見ながら呟く青色の少女。

こう見えて、彼等は統合世界を冒険する所謂「冒険者」達。
今日も彼等は、世界を冒険していた。

「珈琲には砂糖5個がお似合いだな」

「ブフツ…子供みたい」

「つせーな…てかお前も10個入れてるくせに、よく言えるよな」

「私、甘党なので」

「甘党ねえ…」

甘党の話題を話していると、新聞を見ていたウエンデイがとある一面を見つけ、呟く。

「『イビト山行方不明事件』?」

「ん?どした?」

「…これ見て」

彼女はユウトにその一面を見せる。

その一面には、四角い黒地に大きな字で『イビト山行方不明事件』と書かれ、その

イビト山”だと思われる山の写真が載せられていた。

「行方不明か…可哀想に」

「その人の家族や警察も必死になって捜索してるけど見つからないんだって」
「ふーん…」

と、ユウトは冷めきった珈琲を飲み干し、その場に立ち上がる。
急な行動に驚いたのか、周りの人達の視線がユウトに注目する。

「…俺等で探せるんじゃないかね？」

「え？…でも必死に探しても見つからないって…」

「…その為の此処だろ？」

ユウトは得意気に自分の鼻を指で軽く叩く。

そう、ドラゴンスレイヤー “滅竜魔導士”の特性の1つである “鼻の良さ” を使うのだ。

ウエンデイも ドラゴンスレイヤー “滅竜魔導士”なので、その特性を生かして捜索ができる。

しかし、彼女は疑問を抱える。

「え、本当にするの？警察の人とかに怒られない？」

「…変装だよ」

——イビト山

警察官の服装に変装したユウトとウエンデイは、警察官にバレる事無く、無事にイビト山に潜入成功。

茂みに隠れた2人は、イビト山中間地点の茂みに隠れていた。

「——ねえ、本当に大丈夫なの？」

「大丈夫だって、さつきも警察官にバレなかったんだし」

「そうだけど…」

ユウトの言葉に不満を抱えるウエンデイ。

確かに、ユウトの勝手に行方不明者を捜索するとはいえ、賛成すると言っていないウエンデイを強制的に連れてまで行動するのは、いくらなんでもやり過ぎではないの

か。

第一、警察や捜索隊に任せておけば良い事なのにも関わらず、何故ユウトは捜索したいと言いつつたのか。

「何でユウト君は捜索したいなんて思ったの？」

「……好奇心だよ」

「好奇、心？」

「そう。好奇心。」

なんと彼は貢献とかの理由ではなく好奇心と言いつつたのだ。

「ほら、小学生って行方不明者の顔ってどんな顔かなあつて気になるじゃんか？…分かる？」

「余りにも君って酷いね」

「それは自分でも自覚はしてますが…兎に角、まずは探してき、顔見ながら引き渡そうな？」

「苦笑いしか出来ないけど…しょうがない、やるよ」

「サンキュー」

ユウトの気持ちに同情出来ないウエンディだが、仕方なく彼と共に行方不明者を捜索する事に。

勿論彼女は好奇心とかでは無く貢献の為だが。

——それから、彼等は必死になって行方不明者を捜索した。

始めに生き埋めの可能性がある土の中から、林、そして頂上から…と怪しい場所は手当たり次第探したものの、なかなか見つからない。

しかも滅竜魔導士ドラゴンズレイヤーの特性を活かしても、だ。

「匂いがしない…?」

「可笑しいな、聞いた情報だとこの山で行方不明になった筈だが…」

「場所移動、とかかな?」

「この山の周りは街なんだ、場所移動していたらとつくに付近の住民とかが通報してる」

イビト山の周りは住宅が建ち並ぶ街。

この場所から場所移動をして、姿を目撃した通行人が通報しているのだが、現時点で事件は解決せずにいる状況だ、場所移動は有り得ない。

「じゃあ何で…匂いがしないって言うの?」

「……………」

ユウトが考えていると、ふと老人と幼い少女が話しながら横を通り過ぎる。

「…この山って何で登ったら帰って来られないって言われてるの?」

「ん?…それはね、〃山の麓にある大きな穴〃があるからなんだよ。」

「…其処に入ったらどうなっちゃうの?」

「お婆ちゃんも入ったらどうなっちゃうか知らないんだ」

「ええ…? 知りたいのに…」

その会話はまるで、ユウトとウエンデイに、行方不明者の居場所の答えを教えるかのようだった。

その会話を聞いたユウトは老人に話し掛ける。

「すみません、その『穴』の居場所、教えて貰えますか？」

「?…は、はい…」

老人は突然、話し掛けられた事に少々驚きを見せていたが、ユウト達をその場所まで案内した。

「…()です」

「デカっ!？」

「はえー…」

連れて来られた場所には、物凄く大きな洞穴があり、2人はその巨大さに唾然としていた。

しかも底が見えず、誤って落ちたりしたら即死は免れないだろう。

「では、これで」

「あ、ああ…ありがとうございます」

ユウトは道案内をしてくれた老人に礼を言い、再び視線を洞穴に向けた。

「…ねえ、ユウト君」

「…分かってる、匂うな」

穴から漂う匂い。

しかし、その元は底が見えない奈落の穴。

生きている可能性は奇跡が起きない限り低いだろう。

「とりあえず、警察に通報するか」

「うん、そうだね」

と、ユウトが警察署に向かうその時だった。

生えている木の根が彼の足を引っ掛けたのは。

しかも運悪く、ウエンディもユウトの肩にぶつかり、バランスを崩してしまい…

「嘘」

「え」

「うわああああ!!」

「きゃああああ!!」

悲鳴と共に、奈落の底へと消えていった……。

To Be Continued…

第21話 いせき① 記憶喪失と花

—— 今日、ぼくと同じ人間達が地上から落ちて来た。

—— 2人の人間が。

—— ぼくと同じで、好奇心を抱いたまま落ちてきたのかな？

—— 金色のお花の上に落ちたから死んではないとは思うけど…

—— ぼくが落ちてから3日が経つけど、みんな心配してるかなあ

—— あれ、みんなって誰？……と言うか、

——ぼくって誰？

「……ん……」

気を失っていたウエンデイの意識が覚醒する。

「……(ハハ)、は……?」

ウエンデイが周りを見渡す限り、一面石で出来た洞窟のようだ。

先に進む道もあるようだが、先が暗闇に包まれていてよく見えない。

「せめて灯りを照らす魔水晶ラクリマがあれば良いのに……」

彼女はポツリとそう呟いた後、頭上の穴に顔を向ける。

10 m程の高さから落ち、幸運にも金色に輝く花畑がクッションになり、今こうやつ

て生きている訳だ。

しかし、今はそんな事を考えている暇は無い。

「どうやって戻るの?」

そこなのだ。

此処から壁の凸凹を利用して登ろうとしてもそんなスキルなんて無く、ましてやその高さまで届かないのだ。

梯子やロープも持っている訳でも無い。

「一体、どうやって戻れば…」

「——お、気が付いたか」

「!…ユウト君!」

突如、暗闇から姿を見せたユウトの声に彼女は驚きを見せた。

どうやらウエンディより先に目が醒めたようだ。

「いつ起きたの？」

「さつき。…お前起こしても起きないから心配したんだぞ？」

「ごめんね、心配させて」

「良いよ良いよ、今こうやって起きたんだし」

「ありがとう……ん？」

ユウトの背からひよこんと少女が顔を出したのを見て、ウエンディは首を傾げる。

それを見たユウトが答える。

「ああ、この子か。…目が醒めた後にこの洞窟を探索したら倒れてて」

「倒れてた?…にしては元気そうだけど」

「ポケットチエストに入ってた『金のリンゴ』を食べさせたら回復して、今は元気になってる」

FAIRY TAILの世界で購入したアイテム『金のリンゴ』。

そのリンゴには回復能力が付いているおかげで、倒れていた少女を救う事が出来たのだ。

しかし、その反面…

「…少し気にかける点があつて」

「気にかける点？」

ウエンデイが首を傾げる。

「ああ、彼女、過去を聞き出そうとすると『覚えていない』としか答えなくてな。」

「過去を覚えてないって、記憶喪失か何かって事？」

「多分……と言うか、そうだろうな」

彼女は恐らく、ユウト達と同じく地上から落下した人間。

そうだとしたら、落下して、地面に当たった衝撃で記憶喪失をした。

…と言えば辻褄が合う。

「…名前も覚えてないの？」

「らしい」

「じゃあなんて呼べば良いの?…ユウト君連れてくるんでしょ?」

「何で分かんのだ…まあそうだな、この子をどう呼ぶか…」

腕を組み、考え込むユウト。

数秒の沈黙を挟み、少女の仮名が決定する。

「分かった、今日からお前の仮名は『ミンティア』だ」

「…なんでミンティア?」

「…ほら、その…そう言う感じがするじゃん?…なんかキャンディみたいな」

必死に説明するユウトを見て、ウエンディは苦笑した後…

「…分からないけど、とりあえずはその呼び名で良いよ。ユウト君の好きで」

「おう。…でことでミンティア、これから冒険するけど良い…って、何処行った!?!」

「ミンティアちゃん!?!」

2人の目を盗んで何処かへ消えてしまったミンティア。

一体、何処へ消えてしまったのだろうか…

「はあ、はあ」

——
怖い。

落ちてきた人間達が、怖い。

急に冒険とかに誘おうとするし、ミンテ何とかがって名前付けられるし。

何なの、もう

*ハロー！

?…花が喋って…

*ボクはフラウイ。

*おはなのフラウイさ！

フラウイ？

おはなつて事は知ってるけど…

*キミは…

*この ちていのせかいに おちてきた ばかりだね？

こくん、と頷いた。

*そつか じゃあ さぞかしとまどつてるだろうね。

*このせかいのルールもしらないでしょ？

ルール？そんなのあるんだ。

*それなら ボクが おしえてあげよう。

*じゅんぴはいい？

*いくよ！

フラウイがそう言った直後、世界が暗くなつて、ぼくの体からハートが飛び出して来た。

「そのハートはね キミのタマシイさ キミという そんざいそのもの といつてもいい」

タマシイ…心臓つて事かな？

「はじめは すごくよわい…けど L V がたくさんあがると どんどんつよくなれるんだよ」

“L V”？

「“LV”っていうのは LOVE つまり “あい”のことさ！ キミも LOVE がほしいでしょ？」

あい…欲しいな

「まってね… いま ボクが LOVEを わけてあげるから！」

ウインクした…ちよつと可愛いかも

「このせかいではね LOVEは こんなふう… しろくて ちつちやな… なかよしカプセル”に入れてプレゼントするんだ」

「それじゃあ いくよ？ さあ カプセルを いっぱい いっぱい ひろつてn」
「ミンティア！」…なんだい？」

あれは…さつき…

「ミンティア!」

*…なんだい?

ユウトとウエンデイが門を潜り抜けると、そこには探していたミンティアが、まさに今、金色の花に攻撃されようとしていた。

ユウトは咄嗟にミンティアを抱えて、白い弾を躲した。

*なに? キミ なんで ボクのじやまを するんだい?

「…花が喋ってる?」

*まあいい もういつかい いくね?

「…させるか!」

ユウトの反応を無視して喋る花の攻撃を躲すが、回避しきれなかった弾がユウトの脚に直撃し、ダメージを与える。

「いッ……！」

「ユ、ユウト君！」

「……！貴方、足に傷が……」

白い弾が直撃した脚の傷から、凄い量の鮮血が流れ出す。それもすぐに血溜りが出来てしまう程の量が。

「……大丈夫だ……！これくらい何とか……！」

「——バカだね」

「……あ？」

金色の花の声に、ユウトは低い声で反応するが、それに表情を変える事は無く、花は続ける。

「このせかいでは ころすか ころされるかだ こんな ぜつこうの チャンスを のがすわけ ないだろ！」

そう言った直後、ユウトとミンティアの周りを白い弾が囲む。

「なかよしカプセルが…」

「ミンティア、これは弾だ。…なかよしカプセルなんかじゃない。…間違いなく俺らは 今から…」

「しね」

ユウトの声を遮るようにストレートにそう吐き捨てる花。

直後、2人を囲んでいた白い弾がゆっくりと距離を縮ませる。

——もうダメだ。

そう思い、ユウトが死を覚悟し、目を瞑った……その時だった。

ギヤツ

不意に花の声が聞こえたので、ユウトは閉じていた目をゆつくりと開ける。

その先に広がっていたのは、吹き飛ばされる花と、ワンピースのような服を着用している女性——否、山羊が佇んでいた。

「なさないわね… つみのないこどもたちを いじめるなんて…」

「?」

「こわがらなくてもだいじょうぶよ わたしは トリエル このいせきの かんりにん
です」

「管理人…? 此処の?」

山羊——トリエルが相槌を打つ。

「まいにち ここを みまわって おちてきたコが いないか かくにんしているの
ニンゲンが このせかいに きたのは ほんとうに ひさしぶりだわ しかも 3に

んも いるなんて」

状況が分からないのか、ユウト達がその場で固まっているのを見て、トリエルは話を進める。

「さ いきましよう！ いせきを あんない してあげるわ」

彼女がそう言った後、世界に色が戻り始める。

*こつちよ。

そう言い、彼女は門を潜る。

その後を追うように、ミンティアが門を潜った。

「…大丈夫なの？ 脚の方は…」

「金のリングがあるから大丈夫だ。…俺達も行くか」

「うん」

ユウトとウエンデイも、門を潜り、いせきへと向かった。

To Be Continued...

第22話 いせき② パズルとエンカウント

——いせき

「うわあ」

「デイスイズパープル!!」

「何故に英語?…あ、ミンティアちゃん」

ミンティアは紅色の落ち葉の前に輝く光に触れていた。

「これ、なんだろう?」

* (そびえたつ いせきを まのあたりにして ケツイが みなぎった)

* (HPが まんタンになった)

ミンティア L V 1 ユウト L V 1 ウエンディ L V 1 8 : 3 3
 セーブしました

(…セーブ?…ま、いつか)

「セーブ」と言う言葉に疑問を浮かべるが、気にする事はせずにトリエルに付いて行く。

*3人とも はやく こっちに

「あ、すみません」

「悪い」

「ごめんなさい」

待たせてしまったトリエルに謝り、3人は先に進んだ。

…階段を登り、植物が生えている壁の中心の門を潜ると、閉ざされた門が聳え立つ部屋が。

床には6つのボタンが、壁には1つのレバーが設置されている。

*さあ あなたたちは きょうから ここで くらすのよ。

「暮らすのか…」

*いせきの しかけについて おしえて おくわね。

彼女がユウトの言葉を聞き流しつつそう言うと、設置されたボタンを決められた順番に押し、レバーを下ろす。

すると、閉ざされた門が開き、次の部屋へ行けるようになった。

*ここには たくさんの「パズル」があるの。

*しんにゆうしやを げきたいする むかしからの ぎじゅつよ。

「古代の技術ってスゲー!!!」

「ちよつと声が大きいよ」

「ごめんね、ミンティアちゃん」

*ふふ。

*はなしを もどすけど へやを いどうするときには パズルをとかないと いけないわ。

*だから よくみて なれておいてね。

「「はい!!」」

大きな声で返事をし、3人は次の部屋へ向かった。

*このさきへ すすむには ただしいスイッチを おさないと いけないの。

「所謂パズルってやつだね?」

*ごめいとう!

*でも ちゃんと しるしを つけておいたから だいじょうぶよ。

そう言って、彼女は先に進み、ユウト達はパズルを解きつつ、この部屋を調べ始める。看板には「かんばんの まえで ◎をおすと よめる」と書かれており、石板には「ひとたび道を定めたら心を変えることなかれ。」と書かれていた。それに従い、パズルを解いて行き、次の部屋へ。

「にしても、平和だなあ」

「敵がないからね…」

「このまま敵とか出て来ないで欲しいな」
「だな。」

そう会話を交わしつつ、3人は次の部屋へ。

次の部屋ではパズルは無く、マネキンが立ち聳えているだけだった。

*あなたたちはニンゲンだから モンスターに おそわれることもあるでしょう。

*そんなときに どうすればいいかな？

「ぶちのめす」

「バカ」

バトル脳なユウトに突っ込む2人。

それを見て、トリエルは笑いながら答える。

*ちがうわ。

*モンスターに そうぐうすると “バトル” が はじまるの。

*バトルちゆうは モンスターと なかよくおしやべりをするのよ。

*そうやって　じかんをかせいで　わたしの　たすけを　まってるね。
「助けなんかいらん」分かりました」

ユウトの言葉を遮るようにミンティアは答えた。

*ためしに　そのマネキンに　はなしかけて　ごらんなさい。

トリエルはそう告げ、次の部屋への門を遮るように立つ。

その命令に従い、ミンティアとウエンディはマネキンに触れた途端、世界が暗転し、ミンティアの体から「タマシイ」と呼ばれるモノが飛び出した。

*マネキンが　あらわれた。

そうアナウンスが聞こえると同時に、ミンティアの手元に4つのボタン（『たたかう』『どう』『アイテム』『みのがす』）が表示される。

ミンティア自身が選択しろと言う意味だろう。

「ねえ」

「ん、何？」

「これってどうすれば良いの？」

「?…えつと…これって、どれ？」

「このボタンだよ」

「ボタン？」

ミンティアの問いにウエンディは首を傾げる。

彼女には、ミンティアの言うボタンが見えないのだから。

「…私には何も見えないから、ミンティアちゃんが決めてみて？」

「…分かった、やってみる」

「役に立てなくてごめんね？」

「いーのいーの！大丈夫！」

ミンティアは得意気にそう言った後、手元のボタンに手を触れた。

* マネキン | ATK 0 DEF 0

* わたのハートに ボタンのひとみ

* かがやいちまった よろこびに

「……………」

* マネキンは いまにもたおれそうだ。

ミンティアは『ごうどう』を押し、話し掛ける。

「マネキンさん、こんにちは」

* マネキンに はなしかけた。

* ……

* かいわは はずまなかつた。

「返事ぐらいしてやれよなあ…」

アナウンズにそう突っ込むユウト。
聞き流し、アナウンズを続ける。

*トリエルは うれしそうだ。

*YOU WIN!

*OEXP とOゴールドを かくとく!

アナウンズが終了し、世界に色が戻り、嬉しそうなトリエルの声が聞こえる。

*そう! それでいいの!

*じょうずに できたわね。

トリエルに褒められたミンティア。

少し嬉しくなりながら、次の部屋へ進んだ。

「此処で戦うのはよせ、か…」

「苛ついても我慢、してくれる？」

「んー…だけど此処は統合世界だぞ？…この世界の敵以外は倒させてくれるかい？」

「もう、ユウト君つてばバトル脳なんだから…：…良いよ。ただし、絶対に殺さないでね。」
「極力手加減しまーす」

此処、統合世界ではFAIRY TAIL編と同じく、この先数多く、ショッカー達のような敵が現れる事があるだろう。

しかし、この世界のルールに乗っ取りながら倒していかなければならないと、ユウトはそう誓ったのだった。

——世界が暗転した。

遂に敵が現れたね。

*フロギーが おそつてきた！

カエルか、可愛いなあ。

出来るだけ戦殺さずわずに、最初は『こうどう』、からの*ぶんせきだ。

*フロギー | ATK 4 DEF 5

*カエルも つらいよ。

カエルも、辛いんだね。

ぼくも、なんだか分かる気がするよ。

あ、トリエルさんに睨まれて逃げてった。

少し、可哀想だな。

*YOU WIN!

*OEXP とOゴールドを かくとく!

世界に色が戻り、ぼくはトリエルさんと手を繋ぎ、一緒に針山を進んで行った。

「げ、針山!？」

「刺さったら痛い、処の話じゃ済まないみたいだね…」

「それ以上、死が待ってるぜ……ん？」

ユウトが石板に気付き、朗読する。

「*西の間は 東の間の青写真 ……? どう言う事だ?」

「あ、分かった、左の白い道が右の針山を通るヒントになってるんだよ!」

「なるほど! ……やるなあ、ウエンディは」

「えへへ、まあね♪」

ユウトの褒めに喜び、2人はヒントを基に針山を進む。

ウエンディの予想通り、針山は道の通りに進むと針が引つ込む仕組みになっていた。針山を進み終え、2人は長い道のりを会話をしながら歩く。

「……そう言えば、ミラさん達、心配してるかなあ」

「誰？その人」

不意にその話題を振られ、聞き覚えの無い人物の名前にウエンディは首を傾げる。

「妖精の尻尾の……まあ、看板娘みたいな人だよ。……その人と、あと、ドレアー氏とかもか」

「ギルドに帰らないまま此処に来ちゃったもんね……」

「次帰って来るまで長引きそうだけど、絶対帰ってやるからな！……待ってるよ、フエアリーテイル!!」

右手の拳を挙げ、絶対に帰ってみせると、彼はそう誓った。

第2の故郷、妖精の尻尾へ。

——長い道のりの末、先に進んでいたミンティアがその場に立っていた。

まるで、誰かを待っているように。

「よつ、ミンティア」

「ユ、ユウト『兄』!?!」

「兄だあ?」

ミンティアのユウトの呼び方に疑問を浮かべる。

それを見て、彼女はユウトに分かりやすいように解釈する。

「あ、ぼくつて、人を呼ぶ時にそのままの名前で呼ぶとなんか嫌なんだ。…だから『兄』とか『姉』つて付けてるんだけど……嫌?」

「別に良いぜ。…人の呼び方は人それぞれって言うしな。」

「ありがとう。…じゃあ、貴女はウエンディ『姉』で良い?」

「良いよ♪…改めてよろしくね、ミンティアちゃん♪」

「俺もよろしくな、ミンティア。」

「うん!ユウト兄!ウエンディ姉!」

3人はお互いに微笑みながら挨拶をした。

まるで、永遠の友達が出来たかのように。

「——で、そのケータイを渡されて、トリエルに待っていると」

「うん。…で、このまま彼女を待っていていようか迷ってたけど、やっぱりユウト兄達と一緒に行動しようかなと思ってる」

「大丈夫？ユウト君が危ない行動を取るかもしれないよ？」

「お前な…」

苦い表情をするユウトに「冗談だよ」と笑いながら返し…、

「…でも本当に待ってなくて良いの？」

「大丈夫！このまま待っててもママに会えないかもしれないし」

ユウトがミンティアの言葉に違和感を覚え、待ったを掛ける。

「ちよつと待て、お前今トリエルの事「ママ」って呼んだか？」

「うん。…さつき手を繋いだ時、まるでママのような温かみを感じたんだ。」

「マジか…あの催眠術出来たのか…！」

「流石にそれは無いでしょ…」

ユウトのボケにウエンデイが笑いながら突っ込み、微笑の表情を浮かべながらミンティアに話し掛ける。

「そっか、ママに会えると良いね♪」

「うん！」

「じゃあそのママに会いに、先に進むぞお！」

「オー!!」

3人はママトリエルに会いに、次の部屋へと足を進めたのだった。

To Be Continued…

第23話 いせき③ 探索と白いお化け

落ち葉がある部屋に来たユウト達。

そのまま3人は落ち葉の上に浮かぶ金色に輝く光に向かおうとするが、ユウトが何かを見つけたらしく、彼はミンティア達にそのまま待つように告げ、別の部屋へと向かう。ミンティアはそのまま光に向かい、それに手を触れる。

* (おちばを カサカサいわせて あそんだら ケツイが みなぎった)

* (HPが まんタンになった)

ユウト LV 1 ウエンディ LV 1 ミンティア LV 1

11:45

おちばのやま

セーブしました

(セーブって文字気になる…)

セーブと言う言葉に疑問を持ちつつ、ミンティアは床に腰を下ろした。少しの間の沈黙が現れるが、それを打破したのはウエンデイの質問だった。

「ねえ、ミンティアちゃんって何歳なの？」

「10。ウエンデイ姉は？」

「私は12だよ。ユウト君と同じ小学生？ってやつみたい」

「小学生か……」

「そういえばぼくも、小学生だったな……」

「?なんか言った？」

「何でもないよ」

ミンティアの呟きに反応したウエンデイの問いにミンティアは笑って誤魔化す。その笑いは、何か悲しみのようなモノが混濁しているような、そんな笑いだった。と、そこに部屋から出て来た紺色の少年がやって来た。

「ごめんごめん、待った？」

「ううん、大丈夫だよ」

「そっか、良かったあ」

もしかしたら心配して怒っているのでは無いのかと思っていたのか、ユウトの言葉に笑顔で返すウエンディを見て、彼はホッと安堵する。

「ねえ、あの部屋で何やってたの？」

「ん？…あ、飴を取って来たんだよ」

「飴？」

「ああ、歩いてる時とかに味わおうかなあと思って」

「やった♪ありがとう♪」

「いやあ、照れますねー」

ウエンディに喜ばれ、顔を赤らませながらそう口にするユウト。

因みに、その様子を見ていたミンティアに引かれていたのは気付いていないようだ。

「さて、此処でずっと居る訳にもいかないし、行きますか」

「はい♪」

「分かった」

座っていたウエンディとミンティアはその場から立ち上がり、ユウトと共に先に進んだ。

この先、3人は岩のパズルに挑んだ。

重い岩を協力して押し、時には穴に落ちたり、時には喋る岩に苦戦し、無事にクリアして行った。

次の部屋の休憩ゾーンで、疲れ切ったユウトはその場に大の文字で寝転ぶ。

「疲れたあ……！」

「どうなってるの……？岩が重いかと思ったら私達子供でも行けたし、岩は喋るし……」

「魔法でもかかってんだろ？物に魂を吹き込む魔法とか」

「そんな魔法持つ人一人もいませんよ……？」

と、会話を交わすユウトとウエンデイの一方で、ミンティアはテーブルの上に乗るチーズの横に輝く金色の光に手を触れていた。

* (いつかネズミは すあなからでて チーズを かじるかもしれない…)
* (そうおもったら ケツイが みなぎった)

ユウト LV 1 ウエンデイ LV 1 ミンティア LV 1

18:18

ネズミのあな

セーブしました

“セーブしました”と言う文字を確認し、会話する2人を横目にネズミが出入りできる程の小さい巣穴を覗く。

視線の先は暗くて何も見えないが、ネズミがいる事、それは感じ取れた。

(ネズミさん、チーズが欲しいのかな…?)

ミンティアはそう思うと、すぐにテーブルの上にくっ付いているチーズを小さくちぎり、その欠片を巣穴の前に置いてみる。

すると、巣穴からネズミが顔を出し、巣穴の前に置いてあるチーズの欠片を手に取り、ミンティアの方に顔を向けた。

それにミンティアは満面の笑みで返し、ネズミは「ありがとう」と言うようにチュウと鳴き声を鳴き、巣穴の奥に消えて行った。

「喜んでくれて良かった…」

「ん?どした?」

「ううん、なんでもないよ」

ふとミンティアの口から漏れ出した声、それに反応したユウトに彼女はそう誤魔化す。

と、次の部屋を見ていたウエンデイが戻って来た。

「ユウト君、なんか先に進めないよ」

「?どう言う事だ?」

「なんか白いお化けさんが道を妨げてて…」

「お化けさんだあ？」

ユウトはウエンデイの言うお化けを確認する為、先に進む。
そこにはウエンデイの言葉通り白い幽霊が道を妨げていた。

「マジか…これは厄介だな…」

「どうするの、ユウト兄？」

「うーん…」

ユウトは腕を組み、*『』* どうかして退かせる方法は無いのか？*』* を焦点に考える。

「まず戦闘は避けられないよな…」

「多分そうだよね…」

「だけどウエンデイは兎も角、ミンティアにも怪我を負わせたくないんだよな…」

「ぼくなら大丈夫だから、戦うか戦わないかはユウト兄が決めて」

「……分かった。とりあえず話しかけてみる」

ユウトは道を妨げる白い幽霊に近付き、話題を振る。

「やあ、お化け君。今日は良い天気だね」

*グーグーグー…

「…落ち葉で寝てるのかい？」

*グーグーグー…

「……ちよつとそこ退いて欲しいんだけど、退いてくれる？」

*グーグーグー…

「ああ、もう苛つく!!もう無理矢理退かしてくれるわ!!!」

「ええ!?!」

怒りが爆発し、大声で叫ぶユウトの言葉にウエンデイ達が驚愕した瞬間、世界が暗転した。

*ナプスタブルークが やってきた。

「ちよつと…無理矢理つて…」

「だつて苛つくんだもん！」

「いや、子供みたいに駄々を捏ねられても…」

痼癩を起こすユウトを横目に、ミンティアは冷静に *ぶんせき を押す。

*ナプスタブルーク — ATK 10 DEF 10.

*ユーモアのセンスはないようだ…

「ウケるでしヨ？」

「ウケるの…かな？」

と、その時、ミンティアに向けてナプスタブルークの涙が飛沫する。

それをユウトは水で造形した剣で防御するが、なんと当たった部分の水が一瞬で溶け出したのだ。

「げ、酸かよ！危ねえ」

「ありがとう、ユウト兄」

「おう、だけど全部は防げないから、そこは出来るだけ自分で回避してくれ」
「うん」

*エクトプラズムの においが ほのかに ただよっている。

「口説いてみるね」

ミンティアはコマンドを入力し、口を動かす。

「キミまで ゆううつに なっちゃうヨ…」

「そんな事…」

その時、ミンティアの目の前に灰色い文字があらわれる。

ごめん… なんか ぜんぜん

やるき でないヤ…

「やる気出して…!」

ミンティアはそう呟くが、彼が反応する様子は無い。
しかも、再び寝たフリをし出したのだ。

*ナプスタブルークは ねたふりを している。

「励ましてみる…?」

「やってみ。…あの子相当ネガティブな感じするからな」
「うん」

ミンティアはコマンドを入力し、笑顔を見せながら口を動かす。

*ナプスタブルークに がまんづよく ほほえみかけた。

「ハハ…」

彼は愛想笑いを浮かべた後、涙の飛沫を飛ばす。

それをユウトは氷盾で阻止し、極力ミンティアに掛からないように努力する。

*ナプスタブルークは すこしだけ げんきに なったようだ。

確かに最初より笑みを感じるようになって来たような気がする。

しかしまだ彼から本当の笑みを感じる事は出来ない。

今度は彼を脅してみる事してみる。

*ナプスタブルークを こわいかおで にらみつけた。

「べつ二… いいヨ… どうゾ…」

少し可哀想に思えて来るとミンティアは小さく呟き、ユウトが彼の涙の飛沫を防ぐ。

*ナプスタブルークは すこしだけ… (以下略)

「コマンドは全部打ったけど…さっきの脅しは少し可哀想に思えてきたから励ますね？」

「優しいな…お前」

*ナプスタブルークに ちよつとした じょうだんを いった。

ミンティアの冗談が少し面白かったのか、ナプスタブルークの表情に笑みが浮かんだ。

「ハハハ…」

(中略(飛んで来た飛沫を防ぐだけなので))

*ナプスタブルークを もうすこし げんきづけることが できた。

ミンティアは励ましを選択しようとしたその時…

*ナプスタブルークは なにかを みせたい ようだ。

と、アナウンスされたので3人はナプスタブルークに注目する。

「ちよつと まつてネ…」

すると、なん流した涙が彼の頭に集まり、なんと紳士がよく着用するハットの姿に変えたのだ。

「え…!？」

「すげえ…」

「わあ…」

「〃ヒヤリハット〃 つて いうんだ… どウ…？ おもしろイ…？」

ナプスタブルークがワクワクしながら反応を待つが、〃ヒヤリハット〃を見た3人の反応は…

「面白いと言うより…凄いなあ」

「うん、これは感動するね…」

「凄いや、ナプスタさん」

「ええ…」

感激の反応をされ、ナプスタブルークが涙を流した後、世界に色が戻った。

*いつもネ… だれにも あいたくないカラ この いせきに いるんだけど

ネ…

*でも… きよえはネ いいひとたちに であつちやツタ…

「俺ら…あんまり良い事して無いと思うけど…」

* “ヒヤリハット” を かんげきして くれたカラ…

「ああ…」

ユウトの疑問にナプスタブルークが返し、彼はそれに納得する。

*あ、ごめんネ…

“じぶんがたり”が クセで…

*…ジャマだよネ。いま どくネ。

そう言い残し、彼はすうー…と消えてしまった。

「さようなら。ナプスタさん」

「…なんかさ、ナプスタって奴」

「？」

「最初は道を妨げてて退かせるだけで良いと思ってたんだけどさ、また会いたくなっただけだ」

「また会えるよ、いつか」

「…そうだな。それまで、さよならだ。」

ユウトはナプスタブルークがいた落ち葉に手を振り、笑顔を浮かべて仲間達と共に、先へ進んだのだった。

To Be Continued…

第24話 いせき④ 襲来と夢

「スパイダードーナツねえ…」

「スパイダースイーツそくばいかい」なるものが開催されている部屋から出て来た3人。

試しにスパイダードーナツとスパイダーサイダーを購入したものの、それを見た瞬間に、彼等は青ざめた表情を浮かべていた。

「なんか…色が…」

「しかもこのサイダー、クモが丸ごと入ってる…」

「まあでも、持つてるだけマシだと思っからな…預かるよ」

そう言いながら手を差し出し、ウエンデイとミンティアはスパイダーサイダーとスパイダードーナツを手の平に乗せ、キーホルダーチェストに収容する。

「2度と見たくないな……」

「ははは……んじや、行きますか——!?」

先に進もうと足を動かそうとしたその時、ユウトは背後に迫る気配を感じ取り、すぐさま振り返る。

が、振り返るのが少々遅かったのかユウトの身体に何かが接触する。
が、痛みは感じず、身体に付着したのは液体——否、紫色のインクだ。

「インク?」

「ユウト君、後ろっ!」

「!?……うおっとお!」

赤い髪を揺らし、女が背後を狙って打撃をユウトに食らわせようとするも、ウエンデイが先に気付いたおかげで寸前で躲し、怪我をせずに済んだ。

ユウトをはじめ、ウエンデイにミンティアもその女を睨み付ける。

「誰だ?」

「フツ…私ヲ知ラヌ人間ガ存在シテイルトハネ…マァイイ。」

攻撃した者の容姿としては、髪は赤色で吸盤らしき物が付いている。

顔面は黒の大型サングラスを着用していて、左目が赤く発光している。

身体は機動力を重視する為かは分からないが、腰や胸元にのみ服を着用している為、肌の露出は多い。

そんなスタイルが良いタコの擬人化のようにも見える彼女は、自身の名を名乗った。

「私達ハ、〃タコゾネス〃ト呼バレル突撃兵ダ。」

「タコゾネス…？どっかで聞いた事あるな…」

聞き覚えのある単語。

しかし今はそれを考えている暇は無い。

「何故俺達を狙う？突撃兵？つてのなら他の悪い奴等を狙うのが筋じゃないのか？」

「事情ガアルンダ。オ前ラガ知ル必要ノ無い事情ガネ!!」

タコゾネスは血相を変えて此方に蹴りを入れる。
ユウトは攻撃を躲し、隙を狙って彼女の腹に拳を入れるが…

「ソナナ攻撃デ私ヲ倒ス？面白イ子供ダネッ！」

「ぐっ」

もう一方の足がユウトの顔面を襲う。

ユウトの筋力は前世より少し上がってはいるが、やはり吹っ飛ばすまではいかないようだ。

「ユウト兄…」

「大丈夫だ…お前はコマンドを使って時間を稼いでくれ…」

「コマンド…？」

ミンティアは手元を見るが、「ごうどう」と言うボタンは見当たらない。

それに、この世界では敵とエンカウントする場合に起こる世界の暗転も、タコゾネスと戦う時だけ起こらないのだ。

「コマンドなんて無い——」

「ぐあっ!!」

「ユウト兄っ!」

ミンティアの言葉を遮るようにユウトの悲鳴が響く。

「ユウト、トカツテ言ツタカ?…オ前ハ何カ勘違いヲシテイルヨウダ。」

「勘違い…?」

顔を足で踏みながらタコゾネスがそう告げる言葉にユウトは首を傾げる。

「“この世界の敵とエンカウントしたら必ず倒さない”ト、オ前ハソウ決意シテイルヨナ?」

「当たり前だ…!モンスターの身体に傷を付けて喜ぶ馬鹿がいるかよ…!」

「オ前ハ、ソノモンスターガ襲来シタ時ノ共通点ヲ、知ツテイルカ?」

「共通点…?」

この世界のモンスターとエンカウントすると必ず起こる共通点。

その問いにユウトは首を傾げ、それを見たタコゾネスは呆れながら回答する。

「『世界ノ暗転』、ジャナイノカ？」

「世界の暗転…ああ、そう言えばそうだが、それがどうし……」

その時、彼は気付いた。

目に映っている光景は紫色の壁と床。

それを背景に頬を踏む足と赤い髪。

つまり、彼女はモンスターでは無い。

シヨツカーと同じ、統合世界の敵だと。

「気付イタカ。ナラ、才前ハ私ヲ安易ニ倒セル筈ダヨネ？」

「ああ、分かっている。…俺を可愛がってくれた罪は大きいぞ？」

ユウトは水で剣を造り出し、口角を上げながらタコゾネスに水色に透き通る剣先を向

ける。

「知ってる？力は無くても武器を持てば強く見えるってな？」

「小サイ子供ニ勝テナイ突撃兵ハ存在シナイノサ。」

「お、言うじゃん？…その口、引き裂いてくれるよ」

ニツと笑うユウト。

それを見て、偶然にも同時にウエンデイとミンティアの口からこう漏れ出す。

「怖い」

……と。

「——タコはタコらしく大人しく海で泳いでろ」

「コンナ…子供ニ負ケルナンテ…」

氷剣の峰打ちで伸びるタコゾネスに剣を向けながら、ユウトはそう吐き捨て、彼女も

小学生にやられる自分を悔やみながら、気を失った。

「凄いなユウト君、タコゾネスさんに峰打ちだけで勝負するって」

「女を斬るなんて想像した事もない。∴それに、彼女の白い肌に血一滴流したら嫌だし」

「優しいんだね、ユウト兄」

「んー、優しいと言うか、心遣いってやつだよ」

気絶状態のタコゾネスを横目に、3人は会話をしながら先へ進んだ。

先に進むと、特定のボタンを押すタイプのパズルが彼等の前に立ちはだかる。

途中で拾った「いろあせたりボン」をミンティアに装備させ、謎の人参「ベジトイド」と、孤独好きな「ミルゴス」と戦いつつ、試行錯誤で正解のボタンを着実に押していき、無事パズルをクリアしていった。

家がある部屋。

その庭？にある葉が落ちきった黒色の木に、ユウトとミンティアは注目していた。

「葉っぱが落ちきってる…」

「しかも黒いとは、縁起が悪いぞ…」

瞬間、家から何者かが現れる。

ミンティアとウエンデイはまたタコゾネスなんじやないかと身構えるが、ユウトは彼女達とは逆に身構えず、そのまま立っていた。

「誰…?」

「大丈夫だ、タコゾネスじゃない。」

ユウトの言う通り、玄関から出て来たのはタコゾネスでは無く、紫色の服を着た山羊——トリエルだ。

彼女は焦りながら携帯を取り出し、ミンティアに通話を掛けるが、此方を見ると携帯をしまつて此方に向かい、ユウト達の身長を考えてしゃがみながら話し掛ける。

*まあ! あなたたち だけで ここまで きたの?

*ケガはない?

トリエルはユウト達に怪我の心配をするが、ウエンデイが「大丈夫ですよ」と返すと、彼女はホッと安堵し：

*それなら よかったわ。

*さあ こつちへ いらっしやい。

*かいふくして あげましょうね。

*ずっと ほったらかしにして ほんとうに ごめんなさいね。

「良いんですよ。」

ウエンデイはトリエルに微笑みながらそう答える。

*でも…

「ほら、こうやって無事に来れたんですから。心配しなくて大丈夫ですよ、トリエルさん。」

*…。

*あなたって けっこう やさしいのね。

「優しいだなんて、そんな…（照）」

「なんだよ、ちよつと照れてんじゃねえか…」

「うるさいよ…?」

2人がそんな会話をしていると、トリエルは立ち上がり…

*さて…

*あなたたちには ひみつにしておこうと おもつただけれど…

*さあ こつちへ いらつしやい!

と、言い残し、彼女は玄関に消えていった。

「お前結構、好感度上がるんじゃない?」

「うるさいね…あれ? ミンティアちゃんは?」

「ここだよー!」

ミンティアが手を大きく振る。

どうやら、彼女はトリエルと会話している途中に輝く光に触れていたようで、丁度良いタイミングで終わり、此方へと向かって来る。

「さてと、トリエルも待つてるだろうから行こうかね」

「秘密って言つてたけど…」

「もしかして、ぼく達にとつて嫌な話とか？」

「流石に無いだろ」

そう会話をしながら、彼等は家の中へ入った。

中に入ると、鼻に入る甘い香りと共に遺跡のような外観とはまるで違つた景観が広がる。

木材で出来た床、白い壁、地下に繋がる階段を囲む柵、花瓶に飾られている花…

まるで、普通の一軒家の内装のような感じで、よく再現出来ている。

そして、ユウト達を出迎えるトリエル。

彼女は微笑み、彼等に話し掛ける。

*いいにおいでしよう？

*サプライイズ！

「サプライイズ？」

*バタースコッチシナモンパイをやいたのよ。

*あなたがきてくれた おいおいにね。

「わあ」

「最高じゃないすか」

ユウト達が来た祝いにパイを焼いてくれるトリエルに、彼等は喜びの表情を見せるが

…

*ここでのたのしく くらして もらいたくて…

(ん？暮らす？)

彼女の発言にユウトは首を傾げる。

何故かこの家にユウト達が暮らす事になっているのだ。

勿論それは無理な話だが、喜んでいる彼女を悲しませまいと彼は口を慎んだ。

* さあ はいってはいって！ ほかにも みせたいものが あるの。

微笑みの表情を見せながらそう言うと、彼女は右手にある部屋の前に向かう。彼等もトリエルに付いて行き、トリエルの横に立つ。

* ここが…

* あなたたちの おへやよ。

* きにいつてもらえると いいけれど…

「うん！ ぼく、絶対気に入るよ！」

ミンティアが子供のようにそう返し、ユウトとウエンデイも同じように笑みで返す。

* まあ！ うれしいわ…：…あら？ こげくさいわね…

* たいへんだわ！

* ゆっくりしていつてね！

と、言い残して彼女は台所へと走り去り、ユウト達は部屋へと入る。

部屋に入るとそこは、まるで子供部屋のような空間だった。

2つ置かれたベッド、全く興味をそそられない玩具が沢山入った箱、その後ろのベッドの脇に置かれた白と茶色の人形、タンスの上に置かれた埃かぶった空っぽの写真立て……

そして、クレヨンで描かれた花の絵……

間違いなく此処には子供が住んでいた。

死んだのか、行方不明になったのは知らないが、此処には子供が住んでいて、突如居なくなつてから彼女は孤独となり、ユウト達子供を見て嬉しくなつたのだろう。

だとしても、彼女には申し訳ないがユウト達には統合世界を元に戻すと言う宿命があるのだ。

此処で住むわけには……いかないのだ。

「だけど、眠くなつてきたな……」

「疲れたもんね……寝る？」

「ぼくも……疲れた……」

3人は其々ベッドで横になり、目を瞑る。同時に、襲う睡魔によって彼等の意識は途切れる事となった。

ミンティア side

——これは、夢？

——ここ、昔、ぼくが住んでた家だ。

——今でもハッキリと覚えてる。

——あれから、引越しちゃったから…

——？…あれは、お兄ちゃん？

——なんで、お兄ちゃんが…？

——!?…お兄ちゃん!? 何処行くの!? お兄ちゃん!!

——「フリ……………?」

「——っは!?!」

寝ていた筈のミンティアが起き上がる。

悪夢でも見ていたのか、呼吸を立てながら。

「お兄ちゃん……………」

彼女はそう呟く。

昔ミンティアに優しくしてくれた、あの兄を。

「？」

ミンティアは右手にある3つのパイに視線を向ける。

彼女達が寝ている間、トリエルが置いてくれたのだろうか。

今食べても良いだろうが、今食べてはいけないような…そう彼女は感じ取る。

「ユウト兄…ウエンディ姉…」

2人の名を呼んでみるが返事は無く、寝息を立てて眠り続けているだけだ。

自分は早く起きすぎてしまったのだと思うと睡魔が襲い、再び横になって彼女は眠った。

「……………ティア」

少年の声が聞こえる。

「起きろ、ミンティア」

「ユウト…兄…?」

「先に進むぞ」

「え…?」

寝起きで頭が回らない。

が、先に進むと言う声が聞こえ、彼女は思わず声を漏らす。

「先に進むって…此処に住まないの?」

ユウトにそう尋ねる。

ミンティアの声にユウトは頷き、答える。

「俺達には事情があるんだ、此処で立ち止まってる訳にはいかない。」

「それに、ミンティアちゃんも帰る場所があると思うし…」

「帰る…場所？」

確かに自分は帰る場所——自宅に帰らなければならない。

自分は記憶が無くなっている筈、記憶が無くなっても、普通なら早く自宅に帰りたいと思う筈だが…

何故か、帰りたくないと思ってしまうのだ。

その思いで、ミンティアは俯く。

何も知らないウエンディは、彼女の姿を見て首を傾げるも、すぐにユウトと共に準備を進める。

「トリエルには悪いが、俺達は進む。」

「もうママには言つてあるの？」

「私から「帰りたいです」と伝えたら、トリエルさん、地下に飛び出しちゃつて…」

そう。

ミンティアが眠っている最中、起床したウエンディはトリエルに「帰りたい」と伝えていたのだ。

伝えた途端、彼女は、「*ここで まっていなさいね。」と告げ、地下へと走り去っていったのだ。

地下に何があるのかは知らないが、そこに辿り着かない限りは先に進めないようだ。

「じゃあ地下に行かなきゃいけないって事？」

「そうしない限りは先に進めないだろ？ 此処で立ち止まってたら帰る場所にも戻れないんだ、嫌だろ？」

「……そうだけど……」

また俯いてしまう。

何故こんなにも後ろめたい気持ちが入み上げて来るのだろうか。

「何にせよ、行くしかないんだ。…行くぞ」

「…うん」

その言葉には、何か怒りと悲しみが混濁したような気持ちが感じ取れたような気がした。

彼もきつと分かっているのだろう。

トリエルは優しいのだ。

短い付き合いなのに、彼女はこんなにも優しくしてくれて、パイなんかも焼いてくれる。

そんな彼女と別れなんてしたくないと思っただけでも、この世界を守る為にも、先に進まなければならぬのだ。

仕方の無いことなのだ。

「この地下に降りると、此処に戻れないような気がする…」

「ああ、分かっている。…覚悟は、出来てるよな？」

ユウトがそう尋ねると、2人は相槌を打つ。

「先へ、進もうか」

To Be Continued…

第25話 いせき⑤ 望みたくない戦闘

階段を降りてみると、家とは全く違う、一面紫色に囲まれた一本道が視界に映る。何も無い通路。

けれど此処を進むしか方法は無いと、彼等は進んだ。

道を進んで行くと、紫色の服を着用した山羊の女性の後ろ姿があった。

彼女は歩く事なく、その場に立っている。

近づいてみると、彼女は彼等に気付いたのか、後ろ姿のまま語る。

*「おうち」にかえるほうほうを しりたいのね？

彼女の言葉に子供達は頷いた。

*このさきに いせきのでぐちが あります。

*そのむこうは ちていのせかい。いちどでたら もう なかへもどれません。

ユウトが（此処も地底のような…）とツツコミを入れるが、声に出すのはやめておいた。

彼女は続ける。

*これから わたしは その でぐちをこわします。

*もうにどと だれも ここから いなくならないように。

子供達の事を思う優しい彼女にとって、“別れ”と言うモノは辛いものである。辛いからこそ、彼女は出口を破壊するのか。

彼女は部屋に戻るように告げるが、無視して先に進み、また彼女の後ろ姿が移動を止めたので、近づいてみる。

*ここに おちた ニンゲンは みな おなじうんめいを たどる…

*わたしは このめで なんども みてきました。

*ここへ きて…

*ここを でていつて…

*そして しんでしまう。

*あなたたちは なにも しらないの… この いせきから できれば…
*あなたたちは かれらに…、アズゴアに… ころされてしまうわ。

いせきから出て、地底の世界に入ると「アズゴア」と言う人物に殺害される。
その場面を幾度見たであろう彼女にとって、どれだけ辛いものか。

—— 殺されて欲しく無い。

—— ユウト達を守りたい。

その思いで、彼女は出口を破壊する…そう決断したのだ。

でも、ユウト達にとって、殺される殺されないは覚悟の上。

部屋に戻れと言う告げにも抵抗し、先に進まなければならぬのだ。

*…とめても ムダよ。

*これが さいごの けいこくです。

そう言い残して、彼女は進んだ。

最後の警告。

先に進むか、戻るかでこの先の未来が決まる。

彼女には申し訳無いが、ユウト達は先に進む方を選ぶ。

曲がり角を曲がると、いせきの出口であろう門の前に、トリエルが佇んでいた。

ユウト達の足音を聞き、彼女は呆れたような声を掛ける。

*どうしても　でていくと　いうのね…

「俺達は先に進まなければならぬんだ、だから通してくれないか。」

「トリエルさん…」

「お願い…」

3人はトリエルに通してくれと頼む。

それを聞いたトリエルの反応は…

*そう…

*あなたたちも　ほかのニンゲンたちと　おなじなのね。

彼女の言うニンゲン達と同じ運命を辿っているユウト達を見て、トリエルはそう眩く。

そして、彼女は彼等に言い渡す。

*なら のこるしゆだんは 1つしかない…

*わたしを なつとくさせて ごらんなさい。

「納得？」

*つよさを しようめい するのよ。

それはつまり、彼女はユウト達に戦^{エンカウント}闘しろと言っているという事だ。
しかし、ミンティアはそれを望まなく…

「嫌だ、ママと戦いたくない！」

「ミンティア…」

無理もない。

ミンティアにとってトリエルは母親のようなもの。
戦闘してトリエルを倒せなんて、考えられないのだ。

*いまさら なにをいつているの？

*あなたたちが、ここからでたいと いったのでしょう？

「でも、ぼく…」

俯く。

戦わなければならないのは知っている。

でも戦いたくない気持ちで一杯になり、戦う気が無くなってしまう。

足がすくんでしまう彼女に、ユウトは声を出した。

「…いつまでも甘えるなよ」

「え…？」

「もしお前がこのまま戦わないとしたら、俺達は永遠にこのいせきに残りっぱなし、地上へ出れないんだよ。…お前だって、本当の母親がいる訳だしな。」

ミンティアもトリエルの言うニンゲンの類の1人だ。

今は思い出せないかもしれないが、彼女の本当の母親は地上に居て、もしかしたら彼女はミンティアを待っているのかもしれない。

地上に出られないまま、偽物トと言う仮面リを被エった母親ルと隠棲するのかわ？
それとも、此処で戦って地上に出るのかわ？

「全てはお前が決める。戦うのか、戦わないのか。」

「ぼくが……決める……」

「そうだ、お前が決めるんだ。……お前に全てが掛かっている。」

ユウト達の未来を背負った選択を迫られたミンティア。

彼女は何と答えるのかわ……？

「ぼくは……地上に出たい。ユウト兄達の未来もかけて。」

*ケツイが みなぎった。

世界が、暗転した。
戦うと、彼女は決めたのだ。

*トリエルに ゆくてを ふさがれた！

「それでこそミンティアだ。やるぞ。」

「…うん。」

「…OK。」

全員、トリエルと戦うと決意し、身構える。

*ぶんせき

*トリエル | ATK 80 DEF 80

*「これは あなたを まもるため」

彼女の白い手から炎が飛び出し、ミンティアに向かって飛来するが、ユウトとウエンデイが彼女をガードした為に、ミンティアにダメージを出さなくて済んだ。

*トリエルは たいどが よそよそしい。

さて、何をすれば良いのだろうか。

ミンティアは手始めに「*はなす」を押し、トリエルに話し掛けようとするも、適当な話題を思い付かなかった為、これは不発に終わった。

*トリエルは まほうこうげきを じゅんびしている。

「たたかうは流石に無いとして…話し掛けるもダメ…だとすれば何をすれば良いんだろう？」

「もう一度話し掛けてみる、とか？」

「でも、適当な話題無いし…——あ、そうだ」

彼女はふと何かを思いついたのか、「*にがす」コマンドを入力してみる。

「……」

彼女は何も言わないまま、いつものように魔法攻撃を繰り返すが、ミンティアにはこれが正解のような気がしたのか、変化があるまで「*にがす」コマンドを入力する。

「……」

「*にがす」

「……」

*トリエルは　めを　あわせようとしな

「*にがす」

「……？」

さつきまで黙っていたトリエルが彼女の行動に疑問視し始める。

*トリエルは　たいどが（以下略）

「*にがす」

「なにを しているの…?」

先程まで黙っていたトリエルが口を出す。

その後何も言わないまま、魔法攻撃を繰り返して行く。

「クソつ、炎と氷は相性が悪いっ…!」

「私が全力でサポートするから、お願い、耐えて…!」

トリエルの炎魔法。

それはユウトの氷の魔法と相性が悪く、防ごうとしても防ぎきれないのだ。

ウエンディが彼のサポートに回るも、ユウトの魔法はまだ未熟と言う事もあり、盾は段々と溶け始めているのだ。

「このままだと、ミンティアに炎が…!」

「ぼくは大丈夫だから、もう少し耐えてっ!」

「もう少し……？……もしかして、正解に辿り着いてるの？」

ミンティアはウエンデイの問いに頷く。

*トリエルは　めを　あわせようとしなない。

「*にがす」

「たたかうか　にげるか　しなさい！」

トリエルはミンティアの行動に苛立ったのか、彼女に向かって怒鳴り声をあげる。

「ママに傷つける事なんてできない。」

トリエルの表情が変わったような気がしたが、彼女はすぐに目を逸らし、魔法攻撃を準備する。

「*にがす」

「ちからを しようめいするのでしょう？」

「*にがす」

「たたかうつもりがないならにげて！」

「逃げる気は無いよ」

ミンティアはトリエルの命令に抵抗し、ひたすら「*にげる」を押し続けた。

「やめなさい」

「ぼくはママともっと居たかった。」

「そんなめでみるのは やめて」

「でも、ぼくにはぼくの本当のママがいる。」

「にげなさい！」

「嫌だ!!」

ミンティアの声が響き、トリエルは表情を変える。

「ぼくにとって、貴方はママだ。でも、地上ではぼくの帰りを待っている本当のママがい

るんだ。」

「……」

ミンティアの本当の母親。

彼女はきつと、地上でミンティアを待っているであろう。

「本当のママは、きつとぼくを心配してる。」

「……」

ミンティアを心配しているのだろう。

地底と言う深い穴に落ちたミンティアを。

「……だから、ぼくを……ぼく達を、通らせて……？」

「……わかってるわ。ほんとうは　あなたのおやが　こいしいのよね？でも……」

*……

アナウンスが黙り込み、トリエルも魔法攻撃をやめ、ミンティアに視線を向ける。

「おねがいだから おへやに もどって」

「お前…人の話を…」

「ユウト君…、だめ」

ウエンディは人の話を聞けと言おうとするユウトを止め、2人を見る。

「あなたのおやが あなたをまっけているとしても…、けっきよくは、アズゴアたちにころされてしまうのよ…」

「そんな事は分かっている…」

「だったら…、おへやに もどってちようだい？」

「それはできないよ…ママ…」

トリエルの言葉に出来ないと伝えるミンティア。

アズゴアに殺される事は覚悟の上、本当の母親に会いたい、その思いで。

流石のトリエルもミンティアを連れ戻す事は出来ない判断したのか…

「…わかったわ。」

世界に色が戻り、トリエルは続ける。

*どうしてもいくと　いうのなら…

*わたしは　もう　とめません。

「通してくれるの…?」

*そうよ。

*でも　いちど　このとびらの　そとに　でたら…

*にどと　ここへは　もどらないこと。

*それだけは　どうか　わかってちょうだいね。

トリエルの言葉にミンティアは頷くと、彼女はユウト達を抱きしめる。

「うおっ」

「トリエルさん…」

其々異なった反応をするが、ミンティアは何も言わないまま、俯く。
そして、彼女は立ち上がり…

*さようなら わたしの だいじなこたちよ…

そう言い残し、彼女はその場を立ち去る――

「ママっ!」

*…?

ミンティアの呼び声が聞こえ、トリエルは此方に振り返る。
ミンティアはトリエルに微笑みながら、こう言った。

「ありがとう」

と。

——門の扉を開けると、長く続く一本道が広がっていた。その長い道を淡々と歩き、奥の部屋へと入る。

奥の部屋には、見た事のある金色に輝く花が咲いていた。その花は、彼等に向かつてこう喋った。

*なるほどね。

*かんしんしたよ。

「何?」

*キミたち　じぶんでは　うまくやった　つもりでしょ?

「は?お前何言つて…」

*でも　このせかいでは　ころすか　ころされるかだ。

「無視すんなよ…」

無視をする花——フラウイーを、ユウトは苦い目で睨み付けた。しかし彼はそれに動揺する事なく、話を続けた。

*たまたま じぶんのルールがつうよう したからって いいきになるなよ。

*たったひとり の いのちを すくったからってさ。

「デメツ…」

「ユウト君、抑えて…」

ウエンデイの止めによって、ユウトの込み上げる怒りを抑え、フラウイの話聞く。

*フフフ…

*さぞかし いいきぶん だろうね。

*キミたちは こんかい だれも ころさなかった。

「殺す訳無いよ…？」

ミンティアの言葉を聞き流し、彼は続ける。

*だけどさ もしも さつじんきに でくわしたらどうする？

*そいつに なんども なんども ころされて…

*とうとう ところが くじけたら？

*そのときは どうするの？

*イラだちに まかせて そいつを ころしちゃう？

*それとも このせかいを かんぜんにみすてて…

*…ボクに しいさせてくれる？

「は？なんでよ」

*なぜなら ボクは このせかいの みらいを になう プリンスだから。

「キモ」

*ころ して いい？

「何でもない、続ける。」

ユウトの続ける発言に、フラウイは咳払いをし、続ける。

*まあ しんぱい しなくていいよ。

*キミを ころして ちかから うばう つもりはない。

*それより もっと たのしいことを やるつもりさ。

フハハハハ!!!

フラウイは大きく嗤い、地中に姿を消した。

「まあ、そのたのしいことは俺が凍らすけどね」

「無理でしょ」

「うるさいなあ」

会話を交わし、フラウイが消えた真後ろの門に視線を向ける。
この門を開けると、本格的な地底世界の冒険が始まる訳だ。

「さて、行きますか。…何にしろもう引き返せないからね」

「うん。」

「行こう。」

Next ^次の ^場Stage ^所へ。

To Be Continued…

第26話 スノーフル① 極寒の地

いせきを攻略し、次なる場所へと続くこの門。

これを潜ると、もういせきへは戻れない…そんな感じがする。

しかし、此処で躊躇している暇なんて無い。

ユウトは門の扉に触れ、扉を開けた。

扉を開けると、いせきとは全く違った白銀世界が視界に広がる。

同時に、凍えるような寒さが子供達を襲う。

まるで、冬真っ盛りだ。

「うう…寒っ」

「さつきまで全く寒さなんて感じなかったのにね…」

「これって、もう戻れないの？」

ミンティアは背後の門の扉を開けようとするが、固く閉ざされているようで開けられ

ない。

トリエルが言った通り、後戻りは出来ないと言う事だ。

「取り敢えず、進んでみよう。それしかない。」

「大丈夫なの？何か襲ってきたらとか…」

「その時はその時。行くよ。」

高さがある林に囲まれた雪道を歩く。

何か襲ってくるのでは無いか？そう身構えつつ、3人は進む。

そして、雪道に落ちている枝の棒切れを跨いだ…その時…

ガチャンツ

「!？」

不意に背後の閉ざされていた筈の扉が開く音がし、ミンティアとウエンデイはビクツと驚く。

そんな2人とは違い、驚きもしなかったユウトは彼女らを見て…

「…幽霊かな？」

と、子供じみた茶々を入れる。

それにゾツとした2人はお互い抱き合い、震えだしながらユウトを見る。

「お、お化け…？」

「本当に…いるの…？」

「いやあ、どうだろ？」

ユウトは首を傾げながらそう告げ、ガタガタと震えるウエンデイ達を横目に歩く。

「ちよつと…ユウト君？」

「置いていかないでよ…！」

「早く来いよー、幽霊が来るぞお」

「いやああああ!!!!」

「幽霊」と言う言葉に反応し、彼女らは逃げるように走る。

その様を見たユウトは、「マジになりすぎだよ…」と呟き、2人を追いかけた。そして、簡易的な門に囲まれた橋の前にユウト達が到着した後……

後ろから、足音が聞こえた。

「っ……!!」

(え、マジで幽霊すか?)

足音に顔面蒼白になるウエンデイとミンテイア。

それを見て、マジで幽霊かと驚くユウト。

……3人に、低い声が掛かる。

*おい ニンゲンども。

*はじめ あうのにあいさつもなしか?

*こつちをむいてあくしゅしろ。

「こつちに振り返ろ」と命じられ、ユウトはゆつくりと、男の方に振り返る。

小柄な男は此方を振り返るのを確認すると、ユウトに手を差し伸べる。

ユウトも男に恐る恐る手を差し伸べ、手を握った…その時…

ブウウウウ

「…は？」

不意に手から聞こえる下劣な音に唾然とする。

男は微笑みながら、ユウトに話しかける。

*ハハ…ひっかかったな。てに ブーブークッションを しかけといたんだ。

「なんでブーブークッション？一瞬下品な音だと思って困惑したよ」

*おやくそくの ギャグさ。だいじょうぶ、オイラは ひとまえて げひんな おと
はださないぜ。

「なら良いや。」

約束のギャグ、そして男の行儀の良さに、ユウトは安堵した。

*それはそうと アンタら ニンゲンだろ？

「おう」

*ははは ウケるな。

「?何で？」

*オイラは サンズ。

*みてのとおり スケルトンさ。

「また無視かい…」

また無視をされたとユウトが呟く。

それを見た小柄なスケルトン——サンズは微笑し、続ける。

*ニンゲンが こないか ここで みはってろって いわれてんだ。

「やっぱりここにも人間を捕まえたりするのか…」

*つつつても…

「？」

*オイラてきには ニンゲンつかまえるとか どーでもいいけどな。
「なんだ、良かったあ」

ユウトはサンズがニンゲンを捕まえる事がどうでも良いと答えると、ホツと安堵する。

しかし…

*でも おとうとの パピルスは…

*すじがねいりの ニンゲンハンターだぜ。

「やっぱりするのねえ…」

ニンゲンを捕まえない訳がない、そう言う事だ。
と…

*あ うわさをすれば…、パピルスが きたつぽいな。

「え、マジ?...捕まりたくないなあ」

*ま とりあえず このゲートつぽいのを くぐれよ。

*ふつうに とおれるだろ？

*パピルスが つくったんだけどさ イミないよな。

「そんな事無いけどなあ」

ユウトとサンズは、凍ったように硬直する2人を抱え、ゲートを潜り：

*その ちようどいい かたちの ランプに：、とおもつたが あつちのこやに かくれて くれ。

「はいよ。」

サンズは、ユウトがミンティアと形が類似しているランプに隠れられないと、小屋に隠れるように命じ、ユウトは小屋に身を潜めた。

すると、逆方向からサンズと違って、身長が長いスケルトンが現れる。

*よう パピルス。

よう！…ではぬああいッ！

長身長のスケルトン——パピルス。
地団駄を踏んでいる彼はどうやらサンズにお怒りのようだ。

パズルをちようせいしておくようにと、八日まえに、いったはずなのに…

(八日前?)

いまだに なにもせず、かつてに もちばをはなれてフラフラと…!
こんなところで なにをしているのッ!

弟に説教される兄。

しかも何方も骨という混沌とした状況にユウトは困惑するが、2人は続ける。

*そこの ランプと こやをみてる。

(は?あの野郎お…)

*いいランプだろ?

*オマエも みろよ。

そんな!ヒマは!ぬああいッ!

一瞬場所をバラされるような発言をされるが、パピルス自身、忙しいようで見える気が無いらしい。

ニンゲンが ここをとおったら どうするッ！

ニンゲンのしゆううらいに、そなえ！

そして！かならず！このパピルスさまが！

ニンゲンをつかまえてやるのだあッ！

(マジで見つかったら終わりじゃんこれ)

そうすれば このいだいなるパピルスさまの：

のぞみはすべて かなう！

彼は格好付けながらニンゲンを捕まえた後の妄想を始める。

あこがれの「ロイヤル・ガード」になって、そんけいされて！

みんなに「おともだちになって！」っていわれちゃったりして？

まいにちラブラブなこうせんをあびまくるのだッ！

*そんなら…

*このランプに そうだん してみるのが いいかもな。もしくは あのこやに。
 (もうバラす気だろ彼奴…)

ユウトはサンズに呆れた表情を見せ、パピルスも地団駄を踏み出した。

ちよつと！てきとうなこといわないで！くされスケルトンめツ！

まいにちなーんもせずに、ホネくそほじつてばつかのくせに！

(ホネくそ?)

そんなだと えらいひとに、なれないんだぞ！

*いやいや。こうみえても トントントンびょうしに しゅっせ してるんだぜ。

*スケルトンだけに!?

?ツクテーン／

さむっ！

(南極だね)

*またまたあ。

*かおが わらってるぜ？

しってる！くやしいけどッ！

怒るのに疲れたのか、パピルスは溜息を吐く。

なぜ、オレさまのように えらいスケルトンが こんなくろうをしないとイケないのか…

悩むパピルス。

そんな彼に、微笑みながらサンズは話し掛ける。

*パピルス たまには かたのちから ぬけよ。それが ほんとの…

*ホネやすめ…！なんつって。

? ツクテーン／

(いや、はねやすめ)

ユウトがそうツツコむ最中、パピルスは遂に叫び出した。

ぬああああ!!!

もういいよ！オレさまはパズルのかんりでいそがしいんだ！

まったく、兄ちゃんは、ホントに：

「ホネ」のずいまで なまけものだな！

……………。

ニヤハハハハ！またな！

*おう。

パピルスは笑いながら、持ち場へと戻っていき：

彼が来なくなったのを確認した所で、サンズは話しかける。

*よし もう でてきていいぜ。

「お前、さつき場所バラそうとしたろ」

*いや…、しらないぜ

「馬鹿たれ。…まあいいや、じゃあな。」

と、ユウトが先に進もうとした、その時…

*あ そうだ

「？」

不意にサンズに話しかけられ、ユウトは足を止める。

*ひとつ たのむが…

*ここ さいきん パピルスは ずっと おちこんでる…

「そうか？」

*ああ。

*アイツのゆめはニンゲンにあうことだから アンタらあつてやつてくれよ。
「けど、パピルスって俺達捕まえるんじゃないか？」

パピルスは筋金入りのニンゲンハンター。

ユウト達ニンゲンを捕まえようとしているのに、会う事なんて出来るのだろうか。

*だいじょうぶ　じつはアイツ　そんなに　キケンじゃない。

*がんばって　つよそうな　フリをしてるだけだ。

「そっか…」

彼奴も思う節があるんだなあと思いつつ、ユウトは答える。

「分かった。サンズの頼み通り、パピルスに会ってみるわ」

*ひきうけてくれて　ありがとうさん。

*じゃあな。オイラ　このさきで　まってる。

「おう。」

と、サンズは「この先」とは逆方向に歩いて行った。

ユウトは違和感を覚えるが、深くは考えない事にして、凍ったように気を失うウエンデイとミンティアに視線を向ける。

To Be Continued...
「さて、こらいつらどうすっかな」

第27話 スノーフル② 弟との邂逅と探索

ユウト L V 1 ミンティア L V 1 ウエンディ L V 1

15:15 ボックスのみち セーブしました。

——輝く光に触れ、ミンティアはユウトの元へ向かう。

「さて、行くか」

ユウトの言葉に、ウエンディとミンティアは相槌を打ち、凍えるような寒さの中、3人は先へ進む。

ボックスの道を抜けると、先には逆方向へと向かった筈のサンズ、そしてその弟のパピルスの2人——スケルトン兄弟が話していた。

話しているパピルスの姿を見て、ユウトはふと先程サンズが言っていた言葉を思い出す。

『*アイツのゆめはニンゲンにあうことだから アンタらあつてやつてくれよ。』

彼の言葉を断る事は毛頭無い。

ユウトはその言葉に追従し、パピルスに近づいてみる…。

すると、彼は此方を振り返り——サンズの方を向き始めた。

サンズはパピルスとは逆にユウト達の方に視線をむけるが、パピルスがユウト達の方に視線を向けると、彼はパピルスの方に視線を向ける——と言う繰り返しが起きる。

次第にそれはスピードを増して行き、最終的に両方ともユウト達の方を向き、背を向ける。

「何なんだよ…」

「よく分からなかったね、今の…」

ユウトとウエンディは彼等の行動に苦笑し、彼等が此方の方を向くのを見て、苦笑をやめた。

*ん…

*いや。あれは いわ だ。

恐らくパピルスがニンゲンなのか!?!と質問したであろう。

質問されたサンズはユウト達の存在を誤魔化す。
多分彼がユウトは居ないと言おうとしているのだろうか、

*みろよ いわの まえに なんか たつてるぜ？

そんな事はなかつた。
それを聞いたパピルスは、改めてユウト達を見て、驚きの反応を見せる。

…ええええッ！

(あ… あれって… ニンゲン?)

(うん)

(あの… せんとうにいるえらそうなやつも?)

(うん)

「聞こえてるんだが」

ユウトの外見を見るだけで偉そうな奴だと勘付かれるようになってしまったらしいが、その事は今は置いておこう。

再びパピルスは驚きの反応を見せる。

しんじらないッ！

兄ちゃん！オレさまはついにやったぞ！

これでオレさまはにんきもの！そしてともだちいっぱい！

パピルスは人気者になれると喜び、咳払いをしてからユウト達を真剣に見る。

…オホン

おい、ニンゲン！ここはおおさん！

いだいなるこのパピルスさまが、そししてやるからなッ！

きさまをとらえて！

「とらえて？」

みやこにつれて行って！

「つれて行って？」

そして…そしてッ！

「そして!？」

ユウトは彼にノってみる。

そして、その後は…

…あとはしらないけど

「いや知らないんかい」

まるでギャグ漫画のように、ユウト達はその場でコケる。

それを見たパピルスは少しだけ笑ってるように見えたが、すぐに表情を変え…

とにかく！

きさま、かくごしろ！

ニヤハハハハ！

と、パピルスは笑いながら何処かへ消えて行き、取り残されたサンズはユウトに話し掛ける。

*うまくいったな。

「本当に仲良くなれんの？」

*しんばいすんなって。

「心配しかないんですけど」

*わるいようにはしないぜ。オイラにまかすとけよ。

と告げ、サンズは去って行った：

「大丈夫なんですかね…」

「ねえ、ユウト兄あの人と仲良くなりたくないの？」

「まあね。サンズの頼み事なんだ、断るなんて出来ないよ」

*YOU WIN!

*OEXP と35ゴールドを かくとく!

アナウンスの後、モノクロの世界に色が戻り、ミンティアの手元に金貨が出現する。ミンティアは金貨をユウトに預け、彼はポケットチエストにしまった。

「ヒョー坊が可哀想に見えた」

「かつこよく思われたかったなんてね…」

パピルスとの邂逅後エンカウントしたモンスター。

2回無視して盗んで褒めろだなど、誰が思ったのだろうか。

「急に頭に入るんだよなあ…なあ、俺って超能力者なんかかな？」

「こおり／エスパ―？」

「なんでそれ知ってんだよミンティア」

「昔やってたからね」

世間話をしている3人。

暫く歩いていると、サンズが氷床の前に佇んでいたので、話し掛けてみる。

「よう」

*よう。アンタらに ひとつ だいじなことを おしえとくぜ。

「大事な事？パピルスの件か？」

*ノー。

*パピルスの こうげきに ついてだ。

「パピルスの件やん」

サンズにそうツツコミ、彼のアドバイスを聞く。

*アイツは スペシャルこうげきを つかってくる。

*あおいこうげきが きたときは うごかなければ ダメージうけないぜ。

カクカクシカジカ…

「ダメになるような、ならないような…」

「信号機逆だしね…」

兎に角、あかこうげきは動いて、あおこうげきは止まると言うのを覚え、彼等は先に進んだ。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d.
:

第28話 スノーフル③ リアクション

ウヒョウ!

ニンゲンたちがやってきたぞ!

ユウト達を見かけるとパピルスは喜んだように反応する。

ここはとおさん…

わが兄とともに、パズルをしかけてやったツ!

パズルを仕掛けたと言われ、地面を見渡す。

しかし見えるのは雪解けた地面だけで、それらしき物は見えないが…

「パズルって…ただの地面にしか見えないけど…?」

いや…その「じめん」にシヨツキングなパズルをしかけたのだ!

『地面にショッキングなパズルを仕掛けた…』

聞いた限り、*「地雷」*のパズルと言う事だろうか。

「地雷か？…危ないんじゃないのか、これ？」

なにしろ そのなも…

「どうめいビリビリめいろ」！

地雷やん、と思ったがしかし違った。

パピルス曰く「めいろのかべ」に触れると、水色に透き通ったオーブから電流が流れるのだと言う。

とりあえず地雷では無いと分かった時点で、ミンティア達に怪我を負わせる事は無くなった。

オーブを持った者にしか効果が無いのであれば、ユウトが持てば問題は無い。

どうだ、すばらしいだろう！

もつとも…きさまらにとつて、これは、あくむのはじまり…

よゆうをかましていられるのも、いまのうちだ！

と、怖気させるような言葉を言い、すぐに始めようとするパピルス。

はーい、それじゃ、はじめー！

少しだけ緊張しつつも、ユウトはパズルに足を踏み入れ…

ビリビリビリッ!!

電流の音が鳴る。

だがユウトの身には何も起こっていない、と言う事は…

ちよつと！

兄ちゃん！なにやらかしたのツ！

電撃を受けたパピルスは、パズルの点検者であるサンスにクレーマーを入れる。

それを聞いたウエンディはパピルスにこう口出しする

「あの…、そのオーブ、パピルスさんが持つてなければ意味が無いのでは？」

え？ああ、そっか

「驚かせないでくれよ…パピルス…」

パピルスはオーブを渡そうと、ユウト達の元に向かう。

彼はパズルの正解ルートを辿りながら近づくが、足跡が見えてしまい、もうパズルどころの話では無くなってしまった…。

はい、じゃ、これもって！

と、オーブをユウトに向かって投げ、颯爽と立ち位置に戻る。

答えが分かってしまった以上、どうすれば良いのだろうか…？

ユウトが躊躇っている中、1人の少女がユウトに近付き…

「ぼくがやるー！」

と、自信満々に答える。

しかし、ユウトは…

「お前に怪我を負わせる訳にいかないんだよ…?」

「でも、ユウト兄だってパピルス兄達にどう反応すれば良いか分からないでしょ?」

「そりゃそうだけどさ…」

すると、ミンティアはユウトが持つオーブを取り、頭に乗せ、パズルの前に立ち…

「大丈夫、ぼくに任せて!」

と、得意気な表情のまま親指を立てた。

はい、はじめ—!

「わっ!?!」

ビリビリッ!

早速電撃の餌食に。

しかし、ミンティアは恐れる事なく引つかかりながらも進み、渡り切った。

「どうだ！恐れ入ったか！」

すごい！おのれ！ちよこざいなツ！

こんなにあっさりクリアするとは！

と、パピルスは感激の言葉を放つ。

しかし彼は見下す（？）ように続けた。

まあよい！

つぎのパズルはこれよりもっとむずかしいぞ！

なにしろわが兄、サンズのさくひんだからな！

きさまらはまちがいでなく、とほうにくれる！

オレならまちがいでなく、とほうにくれる！

「それってもしかして……？」

二、ニヤハハハハ！

と、図星を突かれたように去って行き、それを見たサンズはミンティアに話しかける。

*ありがとな…

*おかげで あいつ すごく たのしそうだ。

「パピルス兄って、ぼくたち子供だって分かってて電撃を弱めてるって、何か好感持てるな」

*あいつ こどもには やさしい からな。

*そうそう パピルスがきてる コスチュームだけど…

「何か彼奴に申し訳なくなっただな…」

「え、なんで？」

ユウトの言葉に、ミンティアが反応する。

「さっきのパズル、俺らが子供だって分かってて、静電気程度に電撃弱めてた訳じゃん。それなのに、俺、防衛本能で、リアクションなんか知らずに守る事だけ考えてた…」

確かに、パピルスはユウトにやって貰いたかったのかもしれない。にも関わらず、躊躇っていたからミンティアにやらせる羽目になった。彼女はリアクションを考えながら道を辿っていた。

防衛本能のユウトとは大違いだ。

「良いんだよ。人間なんて誰だつて分からない事だらけなんだ、次からはちゃんとやってければ良い話だよ？」

「だけど……」

そんなユウトに、ミンティアは彼の手を握り、こう話す。

「ユウト兄、〃終わり良ければ全て良し〃でしょ？」

「え？」

不意なことわざに、ユウトは思わず声を出す。

「最初は誰だつてなんてリアクションを取れば良いか分からないから、相手は悪い印象を持ってしまふ。でも、次から頑張ればパピルス兄だつて良い印象を持ってくれて、良い方向に持つていけるよ?きつと」

「そう、か…?」

「そうだよ。挫けずにやつて行こうよ、ユウト兄!」

「そう、だよな…!ありがとな、ミンティア」

「いえいえ」

ユウトはさつきまでの暗くなっていた感情を吹き飛ばし、ミンティアに礼を言い、

「行くぜ、野郎ども!」

「よかった、元のユウト君に戻つて」

「だね!」

彼等の冒険は、まだまだ続く…

To Be Continued…

第29話 スノーフル④ 疑問と冴える脳

その後、彼等は文字探しのパズルを解き…

「はまき…たばこ…す…ふぎあるろ???」

「絶対これ適当じゃないかな」

“輝く光”がある部屋のスパゲティを取ろうとしたりした。

「スパゲティくつついて取れない…!」

「(きさまはしらないだろうが、これはワナだ…) って、これ書いたらアカンヤツ!!」

そして…

「ここにボタンが…あった!」

ポチッ

雪に隠れているボタンを押すと、道を塞いでいた針山が無くなる。それを確認し、ユウト達は先に進む。

すると、前から其々斧を持ち、フードが付いた薄黒いローブを身に付けたの二足歩行の犬2匹が此方に向かってきて…

*なんか におうツス。

* (ニオイのものは どこサ?)

「何なに?」

(しっ、動くな)

ミンティアが困惑し声を出す、口元を押さえてユウトは動かないように伝える。すると、2匹はユウト達の周りを動き回り始め、ユウト達の前に立ち止まり…

* “マーク” したくなるっス…

* (… “マーク” してやるサ!)

瞬間、世界が暗くなった：エンカウントだ。

しかし、ユウトはそれには怖気付く事は無く、寧ろ余裕の表情を見せていた。何か作戦があるのだろうか。

*イヌカップルが おそつてきた！

「ミンティア、『ぼうきれ』貸して！」

「え、ちよつと待って」

ミンティアの装備を貸せと頼みだし、ミンティアはアイテムから手袋を取り出す。

*『じょうぶなてぶくろ』をそうびした。

ミンティアはぼうきれをユウトに渡すと、

それを投げた。

「!?」

「ちよつと、ユウト兄!？」

「大丈夫」

すると、イヌカップルの2匹はぼうきれに向かって走り、それを口にくわえ、ユウトに渡した。

イヌの遊びで機嫌を取ろうとしているのだろう。

「イヌはみーんな棒切れ遊びがだーい好き!!きあ取つて来ーい!!」

ユウトはそう叫び、彼には見えない筈のボタンを偶然か分からないが押し、エンカウントは終了した。

*YOU WIN!

*OEXP と40ゴールドを かくとく!

「え、え???」

*ヘンなニオイは いいことの まえぶれでも あるんスね…

*（…ぼうきれあそび とかサ！）

*ヘンなイヌ！ サンキュッス！

*（いっしょに あそべて たのしかったサ！）

「また遊ぼうなー！」

*また あそぼうッス！

驚きの連続に、ミンティアとウエンディは驚きを隠せず啞然としていた。

「ユウト兄…？」

「ん？犬には棒切れの遊びが効果的だろ？」

「いや、そうだけど…」

「何？」

「……何で、あのボタン押せたの？」

ユウトはその言葉に疑問を浮かべるが、それはすぐに消えていき…

「偶然か何かだろ？別にそんなに気にしなくたって良いと思うが？」

「偶然…ね…」

偶然と言う言葉に目を付けながらも、先に行くユウトを追いかけた。

カチャ

やった！とけた！

しかも、オレさまのたすけをかりずに…

すばらしい！じつにみごとだ！

「ミンティアが頭が良いおかげだ」

「別にそんなに良くないよ…？」

×マークを全て??にするパズルを、ミンティアの頭が冴えたおかげでサクサクとクリアする事が出来た。

さらにヒント無しと言う事もあってか、パピルスも彼等を称えた。

さてはきさまら、オレさまみたいに、パズルがだいすきだな！

それならきつと、つぎのパズルもきにいるはずだ！

きさまらにはカンタンすぎるかもしれんがな！

「簡単なのか…」

「そこは難しいじゃないんだね…」

「ニヤ！ハハ！ハハハ！」

パピルスがその場から立ち去り、その先に進んだ所にサンズが立っていた。

*あつというまにといたな。

*おみごとだぜ。

「俺のおかげじゃないぜ、ミンティア様のおかげさ。」

「〃様〃…」

ミンティアを〃様〃呼ばわりするユウトに、ミンティアは少し困惑しつつも微笑んだ。

*ハハ

*オイラが たすけるまでも なかったな。

*たすかったぜ。オイラ きほんてきに なんも したくないから。

「怠け骨め」

*ハハ おもしろい ガキだ。

ユウトの駄洒落ツツコミを炸裂させ、サンズを笑わせた所で、ユウト達は先に進んだ。
その先は…難しいパズルだった。

「?????」——どうだ！ わかったか！

「?????」——「ミンティアちゃん、分かる？」

「まかせて！」

情報が多すぎて理解できてない中、パピルスの説明を理解したミンティア。

彼女のIQは一体…

よし！

では、さいごにだいじなことをおしえよう！

このパズルは…

かんぜんにランダムにせいせいされるツ！

「成る程、答えはパピルスにも分からないと」

そうだ！

答えを聞かれても分からない、難解パズルが完成する訳だ。

頼みの綱であるミンティアはクリア出来るのか？

「行けるかな…？」

かくごは いいか…！

パピルスはスイッチを押し、パズルを起動させた。

さて、どんなパズルが出来るのか…

そして、生成されたのは進入禁止タイルにサンドされた何もないピンクタイル…

——「一本道」だった。

「え?」「は?」「ん?」

パピルスは困惑したのか、クルクル回りながら、その場を立ち去った…

To Be Continued…

第30話 スノーフル⑤ 町とパピルス

5話毎前回までのあらすじ（前回やってなくてごめんなさい）

- ・ 交通事故によって統合世界に転生した少年ユウト。
 - ・ フェアリーテイルの世界を突破し、次なる世界は *under tale*。
 - ・ ウエンディと共に穴に落ちてしまい、その穴の先で出会ったのは記憶喪失の少女。
 - ・ 兄の事や昔の家は何故か覚えている？
 - ・ いせきを踏破し、彼等はスノーフルへと足を進める。
 - ・ ボタンが押せたのは何故？
- 次回のあらすじは第35話。

「今にも落ちそうな橋だな、こりゃ」
「怖い…」

ユウト達は極寒の中、幾多のパズルや戦闘を繰り返して、とうとう吊り橋へと辿り着いた。

その吊り橋は落ちたら一発アウトと言う程の高さに吊るされていて、老化が進んでい
るのか今にも落ちそうだ。

しかし、此処で立ち止まっていたら凍えてしまうのは分かっている。

戻ろうとしてもいせきまでの道は閉ざされているので帰る事は不可能。

残る選択肢——進むを選び、彼等はぎしぎしと音を立てながら前へと進んだ。

「落ちないでくれよ…？此処から落ちたら死ぬのは確実なんだよ」

「分かってる、分かってるから怖いの！」

「いや、2人して怒らなくても…」

ユウトの身体を掴む2人。

これって所謂ハーハー（ゴホンゴホン

そう落ちそうな吊り橋を渡っていると、向こう岸でスケルトン兄弟2人がユウト達を
待ち構えていた。

いいか、ニンゲンども！

さいごのゲームだ！

こいつは、これまででいちばんキケンだぞ！

「ちよつと、今それどころじゃ」

みる！「きようふの、しけいしつこうマシーン」！

パピルスがマシーンの名を呼ぶと、上から下からと、まるで本当に処刑されるかの如く、槍やナイフが刃を光らせていた。

「うそっ!？」

「パピルス兄!？」

ウエンディとミンティアは顔を真っ青にさせながらそう叫ぶ。

どうやら本気で恐怖を感じているようだ。

ユウトも2人を睨みつける。

オレが「やれ!」と、ひとことあいずをすれば、たちまちうごきだすのだ!

たいほうがはっしやされ!

ヤリがつきさし!

ナイフがきりきざむ!

すべてのきょうきが、ようしやなくこうげきをはじめるぞツ!

「クソツ…彼奴…」

*アイツのゆめは ニンゲンにあうこと だから アンタら あつてやつてくれよ。

ふとその言葉がユウトの脳裏を過ぎる。

サンズは嘘を吐いていたのか…?

(それは無い筈だ、嘘であつたら今頃俺達は彼奴に捕まつてる筈。)

でもなんで?

パピルスのマシーンは今ユウト達に刃を向けている。

本当に殺す気なのか?

かくごはいいか!?

いいなら…

いくぞ!!!

よいな!?

いつ…せーの…!

…ホントにやつちやうからな!

ユウト、ウエンデイ、ミンティア。

3人は、刃が降りて来る……そう思い、頭を伏せて目を瞑った。

——が、落ちない。

*…うごかないぜ?

*こしようかな?

サンズが笑いながらそう問い掛ける。

しっけいな!

いま…あいずするところだ！

「いやまだ合図してないんかい」

うるさい！

うて！

今度こそ落ちて来る…！

——なんて事は無かった。

*…まだ？ ぜんぜん うごいてるように みえないぜ？

笑いながらサンズがまた問い掛ける。

いや、やはり、このゲームは！

なんというか…

「なんというか？」

その…あつというまに、けつちやくが、つきすぎる

「そい？」

ユウトがそう突っ込む。

そうとも！こんなそうちは、ぜんぜんダメだ！

オレさまはほこりたかきスケルトン！

オレさまのパズルは、ぜんぶフェアプレー！

れいのワナも、じっくりにこんで、おいしくしあげたしツ！

「固くて食べられたもんじゃn」「うるさいよ」「すいません」

言つてはいけない事を何とか食い止め、パピルスは首を傾げたが話を続けた。

だが、このそうちは、あんちよくすぎるし、ひんがない！

ええい、やめやめい！

そうパピルスが命令すると、マシンは元の場所に引っ込んでいった。

と言うか、一体、何処から吊り下げられていたのだろうか…？

ふう！

と、パピルスは後ろを向いて溜め息を吐いてから、ユウト達の方に向いた。

なんだ！

なにをみている？

またしてもオレさまの大しようりだ！

ニヤ、ハ！

ハ！

ハ…？

何か違和感を感じたのか、最後は疑問付きの笑い方で去って行ったのだった。

それからして、ユウト達は落ちる事なく吊り橋を渡りきり、遂に町へと辿り着いた。

「「着いたあ！」」

3人は疲れから解放されたかの如く、そう叫ぶ。

…彼等の目指す休憩所はすぐに見つけた。

フロントにいるウサギに80ゴールド渡し、部屋に入った彼等はベッドに横になる。すると疲れからか睡魔が襲い、ユウト達は1分も経たないうちに眠りについたのであった。

ミント視点

「寝ましたか…」

やっと私の出b…ゴホンゴホン

ユウト様御一行を監視…：見守るだけで大変ですよ…

あれ？これって着いて行つた事にならないかな？

さて、この世界でも他の世界の敵キャラが現れたようですね。

「Splatoon」から、タコゾネス達が。

ユウト様達が襲われている時は焦りましたよ…？

大事に至らないだけ幸いでしたが…

そう言えば、ミンティア様の事で言いたい事が。

彼女、記憶喪失を引き起こしてゐる為に分からないようですが、親が——で——
——んですよね……

今は言わないでおきますが、いずれ思い出す場面があるかと思ひます。

その時は、彼女がこの先どう生きて行くかを選択しなければならぬでしょう。

これ以上はネタバレになりますのでやめておきますね。

つて、ユウト様起きたんですね……

では、私はこれで。

「2分しか寝てないのか……」

「感覚だと2時間ぐらいたったよね？」

「時空がおかしいんだと思います」

「何言ってるんだ」

2分間しか眠っていなかったユウト達。

やはり時間軸がおかしいのか…？

隣のショップで食べ物を購入し、この町を探索する。

「クリスマスツリーだ」

「そっか、此処ずっと冬だからいつもクリスマスムードなんだ…」

「羨ましいな…」

スノーフルのまちの中心に置かれているクリスマスツリー。

季節外れではあるが、スノーフルの季節は年中冬である事もあってか、クリスマスムード真つ盛りであった。

ウエンディはプレゼントを置くシロクマに話し掛けてみる事に。

「すみません、スノーフルって今クリスマス真つ盛りなんですか？」

*クリスマスというか…

*むかし ティーンエイジャーたちが あるモンスターの中のツノに かざりをつけて イタズラしたことがあったんだ。

*それをみて まちのひとたちは そのモンスターを なぐさめるために プレゼ

ントを あげるようになったんだよ。

* それいらい 木をかざりつけて そのしたに プレゼントをおくしゆうかんが
うまれたんだ。

* まあ きみたちのいうクリスマスとは すこしにてはいるがな。

「なんか…深いな」

慰める為のイベントと考えると、クリスマスとは少し違うのだろう。

「なんか…ごめんなさい」

* いいんだよ。

それを横目に、ミンティアは黄色い肌色の子供に話をしていた。

* オツス!

* オマエさ オレと おなじで こどもだろ?

「10歳の子供だよ?」

* あっ まけたぜ…、オレ8なんだよなあ

「なんか弟みたいだなあ」

*オレ弟だぜ！ アンダインの！

「アンダイン？どんな人なの？」

*つよくて カッコいいんだぜ！ ニンゲンなんかイチコロだい！ あ オマエらの ことじゃねえからなの！

「分かってるよ。」

笑いながら話をする2人。

それを見て、ユウトとウエンデイはクスツと微笑んだ。

—— 白い霧が立ち籠める。

町を出てから、様子が可笑しい。

歩く度に、霧が段々と濃くなっているような気がする。

それでもユウト達は、霧で視界が見えないまま注意しつつ先へと進んだ。

そして、1つの影が浮かび上がる。

影はユウト達に話し掛ける。

ニンゲンよ

ふくぎつなかんじょうについて、かたつてもよいか…？

「どうぞ？」

ありがとう

ユウトの許しに礼を言い、影は話す。

ふくぎつなかんじょう、それは…

じぶんとおなじように、パスタをあいするものをみつけたよろこび…

「硬かつて」「うるさいよ」「ごめんなさい」

ミンティアの突っ込みを気にせず、影は喋る。

じぶんとおなじように、パズルがとくいなものへのあこがれ…

イケてて、あたまもいいヤツに、イケてるとおもわれないというねがい…

これこそ…

「あれ、あれ、それ…」

きさまらがいま、いだいているかんじようだなッ！

「は、い？」

オレさまには、そんなきもちはさつぱりわからんがッ！

なにしろ、オレさまはいだいなるパピルスさまだからッ！

ともだちがたくさんいるヤツのきもちなんて、フツーにしている！

しかし、こどくなきさまらはあわれだ：

「孤独ではないがね」

実際、ユウトにはギルドの仲間、学校の友達など、様々な人が居るが、ウエンディは、その中の孤独な子供に入るのかもしれない：

だが、あんずるな！

オレさまがきさまらをひとりぼっちにはしない！

この、いだいなるパピルスさまが、きさまらの：

沈黙が始まり、パピルスは背を向ける。

ダメだ…

やはり、こんなことはゆるされん！

オレさまは、きさまらのもだちにはならないのだツ…

きさまらはニンゲンだ！

オレさまが、きさまらをつかまえて、ながねんのゆめであるロイヤル・ガードのいち
いんになるおとこだツ！

「来るぞッ！」

世界が暗くなつた。
パピルス戦、開始。

To Be Continued…

第31話 スノーフル⑥ v s. パピルス

*パピルスに ゆくてを ふさがれた！

霧でパピルスの姿がはつきりと見えない状況下、パピルスとの戦闘が始まった。空かさずミンティアは「*ぶんせき」を押し。

*パピルス | ATK 20 DEF 20

*ニヤハハ！ が くちグセ。

「ニヤハハハハ！」

彼は空気を読むように笑った後、骨の攻撃を仕掛けた。

ユウトはそのままミンティアの護衛に向かうが、その攻撃はミンティアに向かって来ず、そのまま何事も無いように通り過ぎて行った。

(外れた?...いや、そんな事は無い筈だ)

*パピルスは ホネこうげきを じゅんびしている。

様子を見る為、ユウトはミンティアにもう一度「*ぶんせき」を押すように頼むと、彼女は疑問する事なくボタンを押した。

*パピルス | ATK 20 DEF 20

*ニヤハハ！ が くちグセ。

「ニヤハハハハ！」

パピルスはホネこうげきを繰り出すも、前回と同じくミンティアの横を通り過ぎて行った。

どうやら、攻撃が外れたのではなく...

(彼はわざと外したんだ。俺等を倒さない為に。)

*パピルスは ひつしに スカした たいどを とっている。

そのアナウンスを聞いたミンティアは、「こうどう」欄にあった「*くどく」を押し、ウエンデイ達に聞こえる事の無い声でパピルスを口説く。

「え！オレさまをくどいてるの？ついにきさまの、ほんとうのキモチをあかしたな！だが！きさまは、じぶんがオレさまにふさわしいとおもうかッ？」

「スパゲティ作れるよ？（真面目）」

真面目な顔で自分の取り柄を教えた。

「なんとッ！きさまはカンゼンにオレさまのタイプだ！という事は、きさまとはデートをしないとイケないな…？」

「え」

「でででは！デートをしよう！きさまらをつかまえてからな！」

*パピルスは デートに きていく ふくを かんがえている。

(乗り気だー!!!)

「パピルス兄、デート楽しみなの？」

ああ！たのしみだ！

(マジかー!!!)

なんとパピルスはミンティアに一目惚れしたのか、勝手にデートの準備を始めたのだ。

彼の心境を聞いたミンティアは苦い微笑みの表情を浮かべた。

「そ、それは良かったね…?」

「俺正直ミンティアで良かったかも、ウエンディだったら氷漬けにしてたかもしれねえわ」

「え？それって私を好「ミンティアちゃん、早く行動しよつか？」ええ」

ユウトはウエンディの言葉を遮りつつミンティアに言う。

それにミンティアは従い、パピルスに行動する。

「どうどう」欄には「*ぶじよくする」が残っていたので、今度はパピルスを侮辱した。

「なんとしんせつな…」

「はい?」

「オレさまがきさまらとたたかいたか、きをつかっているのか…そんなしんせつをうけるいわれはない…」

（いや、「気持ち悪い」って言った筈なのに親切ってどう言う事なの?）

「さり気無く酷い事言うんだねミンティアちゃん」

「さり気無く心を読まないで欲しいなユウト兄…まあ本心じゃないからね?」

*パピルスは デートで デイナーに なにを りようりするか かんがえている。

ユウト達のやり取りを横目に、パピルスはデートの計画を進めていた。

しかし、此処は物凄く寒い。

それにスノーフルは極寒の地であり、ユウト達の服装も冬対応ではない。

これではまるで、寒い中夏の服装で外をずっと歩いているのと同じだ。

ユウトは氷の魔導士だから大丈夫なのだろうが、ミンティア達は氷耐性では無い為、このままではすぐに凍え死んでしまうだろう。

身の危険を感じ、ミンティアは「*にがす」を選択した。

が。

「なるほど……たたかうつもりはないんだな」

「なんか眠くなってきたから戦闘を終わらせて！」

「ならオレさまの「あおこうげき」をくらえ！」

「話聞いてた!?!」

すると、ミンティアに青色の骨が襲い掛かる。

ユウトはすぐさま氷の盾を造形するが、骨は盾を貫通し、ユウトの身体に直撃……と
思いきや、ダメージを食らう事は無く、そのまま通り過ぎて行った。

このターンの攻撃が終了したと油断したその時、ユウト達3人はそれぞれ同時に見えない壁に打ち付けられ、ホネこうげきに当たってしまったのだ。

「ぐあつ！」

「ああつ！」

「きやつ！」

極寒で弱まっているミンティアとウエンデイにとつて大ダメージだった。

多分HPは半分以下、このままではユウト以外全滅の可能性も考えられるが…

「すまねえ、お前ら！」

*あおくなつた。

(どうする、どうする…このままじゃウエンデイもミンティアも倒れてしまう…！…
温めるにしてもどうやって…?)

ユウトはなんとか彼女達を温める事が出来ないかを考える。

とりあえず第一に自分の服を貸す事にした。

「お前ら、俺の服着てくれ」

「え？そしたらユウト君は…」

「俺なら氷に対して耐性があるから心配しなくて良い。それより第一に身体を温める事だけを考えろ！」

「わ、分かった…！」

幸い、ポケットチエストに服が収納されていた為、多少温める事は出来た。

しかし、先程かけられた「あおこうげき」によつて、ユウトはウエンデイ達を助ける事が出来なくなつてしまった。

あの攻撃は重力を与えるだけでは無く、魔法まで禁止にしてしまうと云う、特殊な効果の付いた攻撃らしい。

なんとか耐えて欲しいが…

ミンティアは着々とターンを進め、攻撃を避けては受けて、避けては受けてを繰り返す状況だった。

そして、遂に…

ドサッ

「ウエンデイ!?!」

「ごめん……後は……任せた……よ……」

*ウエンデイは たおれた…

「ぼくも……もう……」

「ミンティアっ!!」

*ミンティアは たおれた…

2人は限界を迎えてしまい、その場で倒れてしまった。

残されたユウトはパピルスと戦闘を続行しようとしたが、パピルスが心配した顔でウエンデイとミンティアに近づく。

気付いた時には暗転から戻り、戦闘どころの話では無くなっただらしい。

ニンゲン、ふたりをいえにはこぶぞ！
「ああ、手伝うぞ！」

2人の運命やいかに…？

To Be Continued…